

第4章 自然科学分析

第1節 香川県沖遺跡出土動物遺存体の分析

富岡直人（岡山理科大学 生物地球学部）

出土した動物遺存体は全て哺乳綱であり、同定出来たものはウシ2点とウマ7点で、ウマが顕著に多く出土したものの、帰属する時代はウシが中～近世、ウマが古墳時代～近世と時期差が広く、一概に多寡を論じる事は困難である。また、遺構の共伴資料から年代を推定したが、判然としないケースも含まれ、本来はそれぞれの個体について放射性炭素年代測定を実施し、帰属時期を確定する事が望ましい。

1. ウシ *Bos taurus*

ウシと同定されたものは、中世～近世に帰属する整理番号3、7の資料であった。

整理番号3は、3-2区、溝SD3014の上層から出土しており、共伴遺物より中世(12世紀前葉～13世紀初頭)の資料と推定される。この溝は、東西方向の条里地割地境溝と考えられる。埋土中には、12世紀前葉～13世紀初頭の土師質土器・青磁片等が混在していた。断面土層に数回の再掘削の痕跡が認められ、改修を繰り返しながら一定期間維持されたことがわかる。ただし、一部に下層の遺物の混入が認められており、より古い資料である可能性も残されている。本資料はウシの右下顎第3後臼歯で、前位の一部が欠損している。齢階梯としては成獣の段階のものと推定された。

整理番号7は、3-3区、溝SD3042より出土した。この溝は、坪界溝の可能性があり、中世後期段階には多少埋没しながらも使用され、遅くとも17世紀中葉には完全に埋没していたと考えられる。そのため、本資料は中世～近世前期(14世紀～17世紀前半)に帰属すると推定された。共伴した骨格はほとんど小破片であったが、一つの小破片がウシの右脛骨の遠位端破片と同定出来た。齢階梯は若～成獣と推定された。

2. ウマ *Equus caballus*

ウマと同定されたものは、古墳時代～古代に帰属する整理番号10・11と中世に帰属する整理番号8、中世～近世に帰属する整理番号4・5・6、近世に帰属する整理番号9の資料であった。

a. 古墳時代～古代

整理番号10-1、2は、3-1区にある河道SR3001の中層より出土した古墳時代～古代に帰属すると推定された。ただし、最終埋没時期は不明なため、時期の特定はやや困難と考えられる。整理番号10-1は、ウマ右上顎臼歯で第1後臼歯?で、整理番号10-2は右下顎臼歯群で、第3前臼歯と第4前臼歯、第2後臼歯と第3後臼歯が出土し、臼歯の萌出状況から成獣～老獣であったと推定された。

整理番号11は、3-1区にある河道SR3001の中層より出土した古墳～古代に帰属すると推定された。ただし、この資料の場合も遺構の最終埋没時期が不明な事により、時期の特定はやや困難と推定された。本資料は、ウマ左下顎臼歯群で、第2.3.4前臼歯と第2.3後臼歯が出土しており、萌出より成獣～老獣であったと推定される。

b. 中世～近世

整理番号4は、3-2区にある溝SD3014下層から出土した中世(12世紀前半～13世紀初頭)に帰属するウマの右下顎臼歯の前位外側が一部欠損した資料で、齢階梯は、若～成獣と推定された。

整理番号5は、3-3区にある溝SD3042から出土した中世～近世前期(14世紀～17世紀中葉)に帰属するウマ左上顎第3前臼歯の完形のもので、歯の萌出段階より若～成獣のもとと推定される。

整理番号6は、3-3区にある溝SD3042から出土した中世～近世前期(14世紀～17世紀中葉)に帰属するウマ上顎臼歯の歯冠部破片であった。

整理番号8は、3-3区にある溝SD3047から出土した中世(15世紀～16世紀)に帰属するウマ下顎臼歯の歯冠部破片でピビアナイトを析出しており、脆弱化していた。

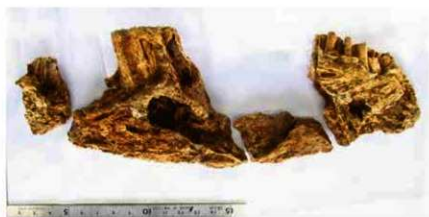
整理番号9は、3-3区にあるSK3027から出土した。本資料は、遺構の帰属時期である近世17世紀初頭の埋め戻しの際に混入した可能性あると考えられている。本資料はウマ左上腕骨の近位端+骨幹部+遠位端(近位部前位一部欠損)で、遠位端と近位端はそれぞれ骨幹部との癒合が完了しており成獣～老獣の個体だったと推定される。出土動物遺存体資料の中で最も保存が良好な個体であった。

第5表 動物遺存体属性表

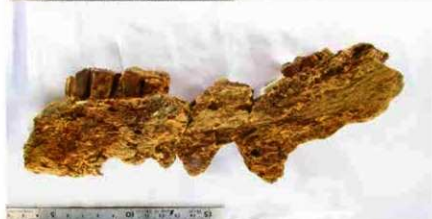
番号	枝番号	注記番号	区名	遺構名	層名	時期区分	大分類	小分類	部位	LRM	部分	成長度	備考
1		D0022	3-2区	SD3007		近世前期 (17世紀中葉)	哺乳綱	目不明	不明	?	不明	不明	viv析出
2		D0022	3-2区	SD3007		近世前期 (17世紀中葉)	哺乳綱	目不明	不明	?	不明	不明	viv析出
3		D0068	3-2区	SD3014	上層	中世 (12世紀前半～13世紀初頭)	哺乳綱	ウシ	下顎 M3	R	前位一部欠損	成獣	
4		D0151	3-2区	SD3014	下層	中世 (12世紀前半～13世紀初頭)	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	R	前位外側一部欠損	若～成獣	
5		D0310	3-3区	SD3042		中世～近世 前期(14～17世紀中葉)	哺乳綱	ウマ	上顎 P3	L	完形	若～成獣	
6		D0317	3-3区	SD3042		中世～近世 前期(14～17世紀中葉)	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	?	歯冠部破片	不明	
7		D0322	3-3区	SD3042		中世～近世 前期(14～17世紀中葉)	哺乳綱	ウシ	脛骨	R	遠位端	若～成獣	
8		D0337	3-3区	SD3047		中世後期 (15～16世紀)	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	?	歯冠部破片	不明	viv析出
9		K0041	3-3区	SK3027		近世前期 (17世紀)	哺乳綱	ウマ	上腕骨	L	近位端+骨幹部 +遠位端(近位部 前位一部欠損)	dpr f	保存良好
10	1	R0015	3-1区	SR3001	中層	古墳～古代	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	R	M1?	不明	
10	2	R0016	3-1区	SR3001	中層	古墳～古代	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	R	P3○4○M1- 2○3○	成～老獣	
11		R0022	3-1区	SR3001	中層	古墳～古代	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	L	P2○3○4-M1 △2○3○	成～老獣	



整理番号 9
SK3027 出土
ウマ左上腕骨
(左：前面 右：後面)



整理番号 10-2
SR3001 出土
ウマ右下顎骨



整理番号 11
SR3001 出土
ウマ左下顎骨

第 200 図 おもな動物遺存体

第2節 プラント・オパール分析 (令和元年度調査)

株式会社パレオ・ラボ 森 将志

1. はじめに

香川県丸亀市に所在する沖遺跡では、水田層の可能性のある黒色土層が検出された。ただし、沖遺跡では畦畔が検出されておらず、水田跡の確定には至っていない。そこで、黒色土層のプラント・オパール分析を行い、水田跡の検証とイネ科植物相の検討を行った。

2. 分析試料および方法

分析対象層準は、弥生時代後期以前の
水田層と考えられている黒色土層である。この黒色土層は、泥混じり砂の洪水層に被覆されており、2-1区と3-1区の黒色土層において、洪水層直下とその下部

第6表 プラントオパール分析試料(令和元年度)一覧表

サンプル No.	試料 No.	調査区	時期	岩質
①	1-1	3-1区北壁	弥生時代後期以前	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト
	1-2			黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト
②	2-1	2-1区西壁		黄灰色 (2.5Y4/1) シルト
	2-2			暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト
③	3-1	3-1区西壁		黒色 (10TR2/1) シルト
	3-2			黒色 (10TR2/1) シルト

から計6点の分析試料が採取された(第6表)。第201図に分析試料を採取した不攪乱の柱状堆積物試料の断面と採取位置を示す。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第203図に載せた。

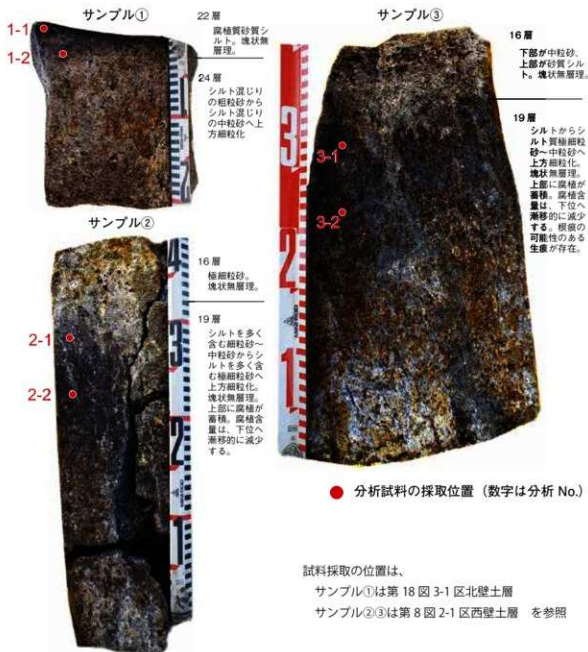
3. 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第7表)、分布図に示した(第202図)。

6試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の7種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。いずれの試料においてもイネ機動細胞珪酸体が検出されている。

4. 考察

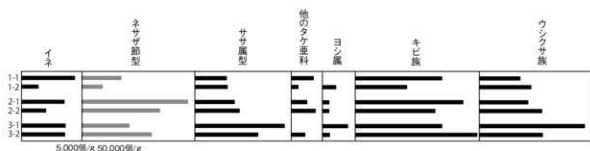
今回の分析試料6点からは、いずれもイネ機動細胞珪酸体が検出された。よって、黒色土層堆積時にはイネが存在していた可能性が高い。また、イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料1g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており(藤原, 1984)、試料1g当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。この目安に照らし合わせると、6試料から産出したイネ機動細胞珪酸体は、いずれも水田土壌の目安を上回っており、黒色土層が水田層であることを裏付ける。さらに、3-1と3-2のイネ機動細胞珪酸体は同



第 201 図 分析試料の採取位置

第 7 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

試料No.	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1-1	18,500	152,200	10,900	7,600	0	30,400	14,100	8,700
1-2	5,600	78,700	11,200	2,200	4,500	18,000	18,000	6,700
2-1	14,800	414,200	13,700	5,300	2,100	37,900	16,900	11,600
2-2	8,300	303,600	15,500	8,300	2,100	28,000	21,800	18,600
3-1	15,200	184,300	31,400	0	8,700	30,400	36,900	3,300
3-2	15,000	271,900	22,000	4,600	2,300	42,800	22,000	5,800



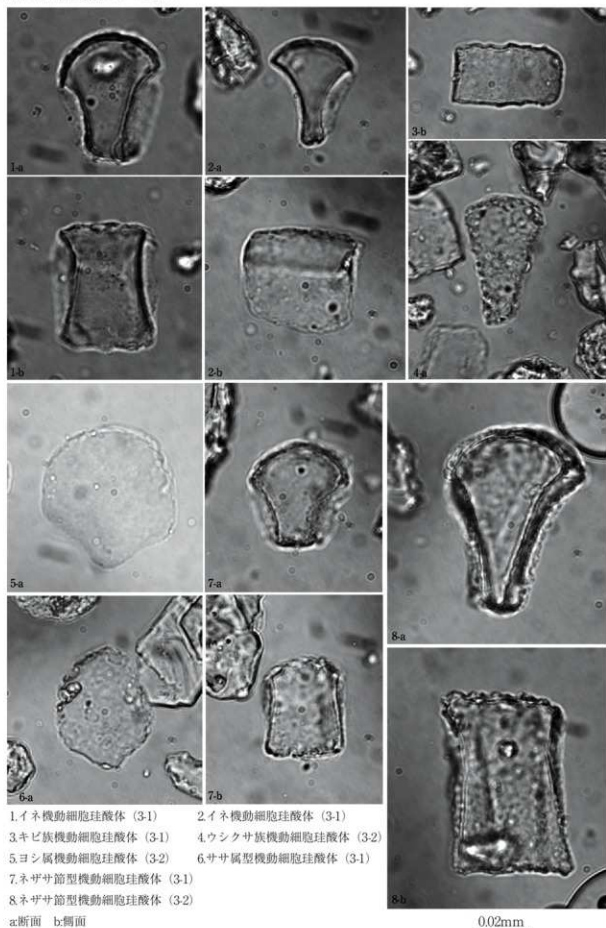
第202図 植物珪酸体分布図

様な密度を示しているが、1-1と1-2、2-1と2-2では下位層の方が密度が低い。人力のみで耕作している実験田の分析結果では、イネ機動細胞珪酸体の密度が水田の表層で高く、深度10cm程度になると密度が低くなる状況が把握されている(菊地, 2019)。今回の分析結果も、人力で耕作された水田では、表層で密度が高く、深度が増すと密度が低くなる状況を示している可能性がある。

イネ以外の機動細胞珪酸体を見ると、ネザサ節型機動細胞珪酸体やササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体などが得られている。いずれの試料においても最も産出量の多いネザサ節型機動細胞珪酸体は、水田周辺の比較的明るい場所に、生育していたネザサ節のササ類から、同じくタケ亜科のササ属型機動細胞珪酸体は、水田周辺に広がる森林の下草などとして分布していたササ属のササ類から機動細胞珪酸体が供給されていた可能性がある。さらに、キビ族機動細胞珪酸体については、黒色土層が水田層である可能性が高いため、タイヌビエなど水田稲作に関わりのあるキビ族から多くの機動細胞珪酸体が供給された可能性がある。また、抽水植物のヨシ属の機動細胞珪酸体の産出から、ヨシ属が水田周辺の湿地的環境の場所に生育していたと思われる。さらに、ウシクサ族はススキやチガヤといった乾燥的環境の場所に生育する種や、オギといった湿地的環境の場所に生育する種が含まれる分類群である。ヨシ属機動細胞珪酸体の産出から、湿地的環境の場所が存在したと推測されるため、オギなど湿地的環境の場所に生育するウシクサ族の植物から機動細胞珪酸体が供給された可能性がある。あるいは、水田が存在していたとすると、その周辺の開けた乾いた場所に生育していたススキやチガヤといったウシクサ族から機動細胞珪酸体が供給された可能性もある。

引用文献

- 藤原宏志(1984) ブラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—。考古学ジャーナル, 227, 2-7。
 菊地有希子(2019) 過去の水田稲作を理解するために実験考古学でなができるか。庄田慎矢編「アフロ・ユーラシアの考古植物学」:
 195-217。奈良文化財研究所



1. イネ機動細胞珪酸体 (3-1) 2. イネ機動細胞珪酸体 (3-1)
 3. キビ族機動細胞珪酸体 (3-1) 4. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (3-2)
 5. ヨシ属機動細胞珪酸体 (3-2) 6. ササ属型機動細胞珪酸体 (3-1)
 7. ネザサ属型機動細胞珪酸体 (3-1)
 8. ネザサ属型機動細胞珪酸体 (3-2)

a:断面 b:側面

0.02mm

第 203 図 産出した植物珪酸体

第3節 花粉分析・プラント・オパール分析（令和3年度調査）

株式会社パレオ・ラボ 森 将志

1. はじめに

香川県丸亀市飯山町に所在する沖遺跡において堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、堆積当時の古植生について検討した。

2. 分析試料

分析試料は、5区南壁から採取された1試料(7層 第30図参照)と、5区東壁から採取された2試料(c層、11層(b層) 第26図参照)の、計3試料である(第8表)。試料の断面写真を第204図に示す。これらの試料について以下の処理を施し、分析を行った。

第8表 花粉分析・プラントオパール分析試料(令和3年度)一覧表

試料 No.	地点	層位	時期	堆積物の特徴
1	5区南壁	7層	不明	灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
2	5区東壁	c層		褐色 (10YR4/6) 細～中粒砂
3		b層		オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細～中粒砂



第204図 分析サンプル断面

3. 分析方法

(1) 花粉分析

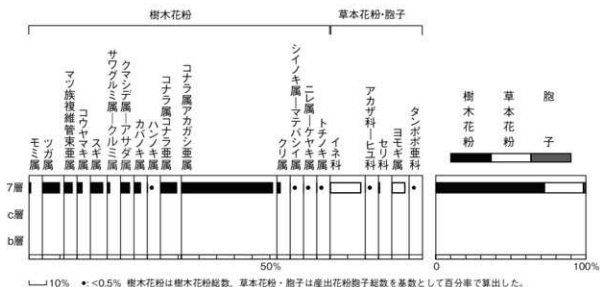
試料(湿重量約3～4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製し、検鏡を行った。検鏡は、樹木花粉が200を超える間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、5区東壁のc層とb層は十分な量の花化石が含まれていなかったため、プレパラート1枚の全面を検鏡するにとどめた。さらに、単体標本(PLC.3651～3658)を作製し、写真を第207図に載せた。

(2) プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～

第9表 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	7層	c層	b層
樹木				
<i>Abies</i>	モミ属	2	-	-
<i>Fagus</i>	ツガ属	21	-	-
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	10	-	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	6	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	15	-	-
<i>Parocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	3	-	-
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシダ属-アサダ属	11	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	8	-	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	-	-
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	20	-	-
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	111	-	-
<i>Castanea</i>	タリ属	4	-	-
<i>Castanopsis - Pasania</i>	シイノキ属-マナバシイ属	1	-	-
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	-	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	1	-	-
草本				
Gramineae	イネ科	52	-	-
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	-	-
Apiaceae	セリ科	2	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	22	-	-
Liguliflorae	タンポポ草科	1	-	-
シダ植物				
monolet type spore	単葉溝胞子	9	-	-
trilete type spore	三葉溝胞子	3	-	-
Arboreal pollen	樹木花粉	215	-	-
Nonarboreal pollen	草本花粉	78	-	-
Spores	シダ植物胞子	12	-	-
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	305	-	-
unknown	不明	5	-	-



第205図 花粉分布図

30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスピーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第 208 図に載せた。

4. 結果

(1) 花粉分析

検鏡の結果、5 区東壁の c 層と b 層からは花粉化石が検出されなかった。5 区南壁の 7 層には十分な量の花粉化石が含まれており、検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 15、草本花粉 5、形態分類のシダ植物胞子 2 の、総計 22 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 9 表に、花粉分布図を第 205 図に示した。花粉分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

5 区南壁の 7 層の樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属の産出率が最も高い。その他では、ツガ属やマツ属複雑管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属などの産出が目立つ。草本花粉では、イネ科とヨモギ属の産出が目立つ。

(2) プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーズ個数の比率から、試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め (第 10 表)、分布図に示した (第 206 図)。

3 試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、メダケ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 7 種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。これらの分類群は、5 区南壁の 7 層において産出量が比較的多く、イネ機動細胞珪酸体は 7 層のみで産出している。

5. 考察

5 区東壁の c 層と b 層から採取された試料では、花粉化石が検出されなかった。花粉の大きさは大多

第 10 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数

試料No	層名	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	メダケ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	7層	9,700	205,300	16,100	15,000	2,100	23,600	22,600	45,100
2	c層	0	58,000	2,300	9,100	2,300	5,700	6,800	19,300
3	b層	0	89,200	5,900	5,900	0	10,600	5,900	25,800



第 206 図 植物珪酸体分布図

数が10～100 μm の範囲に入り、泥粒子の粒径とはほぼ同じ大きさである。よって、植物から散布された花粉粒は、陸域や水域に落下した場合、泥などの微細粒子と同じような挙動を示すと考えられる。今回分析したc層とb層は砂が主体の堆積物である。花粉と砂は粒径が違い、堆積環境における挙動が異なるため、c層とb層には花粉が堆積していなかったと思われる。一方で、機動細胞珪酸体は3試料すべてから得られている。機動細胞珪酸体は主にイネ科植物の葉で形成されるため、葉が混じり込んでいれば、機動細胞珪酸体を検出される。5区南壁の7層については花粉と機動細胞珪酸体の両者から、5区東壁のc層とb層については植物珪酸体のみから古植生について検討した。

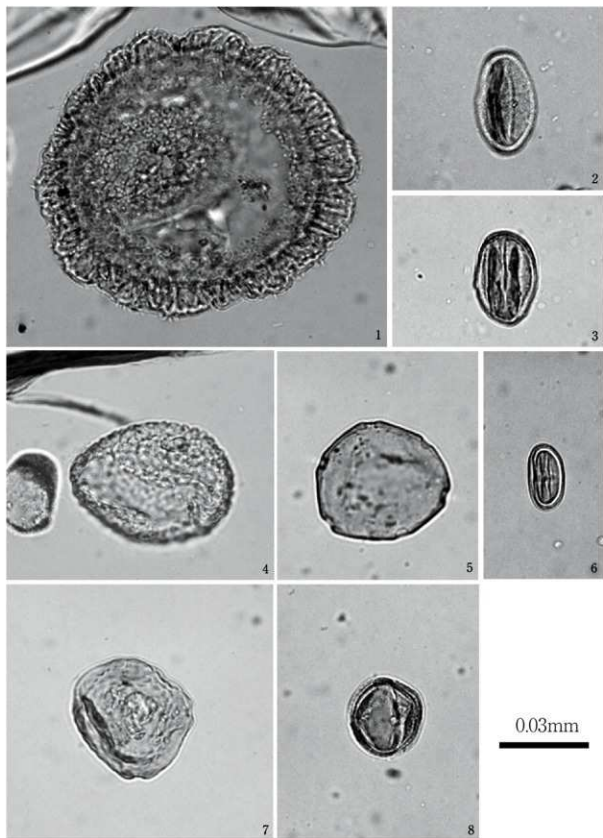
5区東壁のc層とb層で最も多く産出したのがネザサ節型機動細胞珪酸体であり、メダケ節型やササ属型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体を伴う。これらの分類群から考えると、c層とb層堆積当時の5区東壁周辺では、主にネザサ節型のササ類が分布を広げ、メダケ節型やササ属型といったタケ亜科やキビ族、ウシクサ族などが生育していた可能性がある。抽水植物のヨシ属の機動細胞珪酸体がc層から産出するため、c層堆積時には一部に湿地的環境も存在していた可能性がある。

5区南壁の7層堆積時においても同様なイネ科植物相が推測されるが、5区南壁の7層の方が、いずれの分類群も産出量が多い。5区南壁の7層堆積時はイネ科植物が集積しやすかった可能性がある。また、5区南壁の7層からはイネ機動細胞珪酸体を検出された。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料1g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原，1984）、試料1g当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。5区南壁の7層のイネ機動細胞珪酸体の産出量はこの目安を上回っているため、7層は水田であったか、イネの葉身が多く堆積する場所であった可能性がある。

さらに、5区南壁の7層から得られた樹木花粉では、照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属の産出率が高いため、遺跡周辺にはカシ類からなる照葉樹林が分布していた可能性がある。また、ツガ属やコウヤマキ属、スギ属といった針葉樹の産出も見られ、遺跡周辺に生育していたと考えられる。さらに、マツ属複雑管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属などは二次林要素の分類群としても知られており、これらの分類群からなる二次林も周辺に分布していた可能性がある。草本類としては、イネ科やヨモギ属の産出率が目立つため、イネ科やヨモギ属などの草本類が5区周辺に生育していたと考えられる。あるいは、プラント・オパール分析でイネが検出されているため、イネ科についてはイネからもたらされた花粉も含まれている可能性がある。

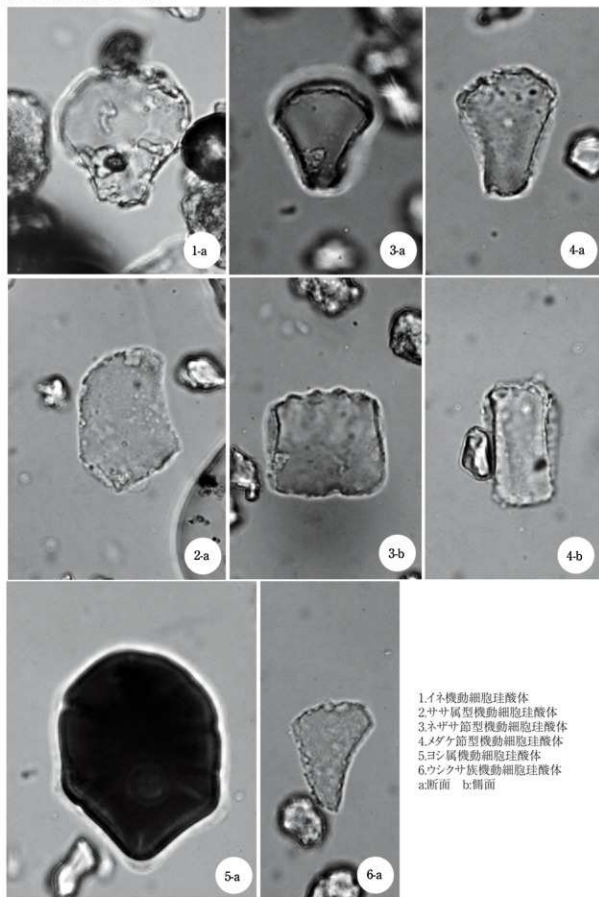
引用文献

藤原宏志(1984)プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探索－。考古学ジャーナル, 227, 2-7.



1.ツガ属 (PLC.3651) 2.コナラ属コナラ亜属 (PLC.3652) 3.コナラ属アカガシ亜属 (PLC.3653)
 4.コウヤマキ属 (PLC.3654) 5.サワグルミ属-クルミ属 (PLC.3655) 6.クリ属 (PLC.3656)
 7.ニレ属-ケヤキ属 (PLC.3657) 8.ヨモギ属 (PLC.3658)

第207図 7層から算出した花粉化石



- 1.イネ機動細胞珪酸体
 - 2.ササ属型機動細胞珪酸体
 - 3.ネササ節型機動細胞珪酸体
 - 4.メダケ節型機動細胞珪酸体
 - 5.ヨシ属機動細胞珪酸体
 - 6.ウシクサ族機動細胞珪酸体
- a:断面 b:側面

0.03mm

第 208 図 7 層から算出した植物珪酸体

第4節 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・小林克也・辻 康男

1. はじめに

沖遺跡より検出された試料について、ウィグルマッチング法を用いた加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第11表のとおりである。測定試料を第209・210図に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第11表 ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-47526	試料 No.1 遺跡名: 沖遺跡 調査区: 3-2 区	採取位置: 外側から1~5年輪目 (最終形成年輪以外で樹皮に近い部分)を採取	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-47527	遺構: SP3018-W3003 種類: 生材 年輪数: 118年 試料の性状: 最終形成年輪以外(樹皮に近い部分)を採取	採取位置: 外側から61~65年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-47528	試料の性状: 最終形成年輪以外(樹皮に近い部分)を採取 状態: wet	採取位置: 外側から111~115年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-47529	試料 No.2 遺跡名: 沖遺跡 調査区: 3-2 区	採取位置: 外側から1~5年輪目 (最終形成年輪以外で樹皮に近い部分)を採取	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-47530	遺構: SP3120-W3001 種類: 生材 年輪数: 32年 試料の性状: 最終形成年輪以外(樹皮に近い部分)を採取	採取位置: 外側から11~15年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-47531	試料の性状: 最終形成年輪以外(樹皮に近い部分)を採取 部位: 外側から1~5年輪目 状態: dry	採取位置: 外側から26~30年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

3. 結果

第12・13表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、ウィグルマッチング結果を、第209・210図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

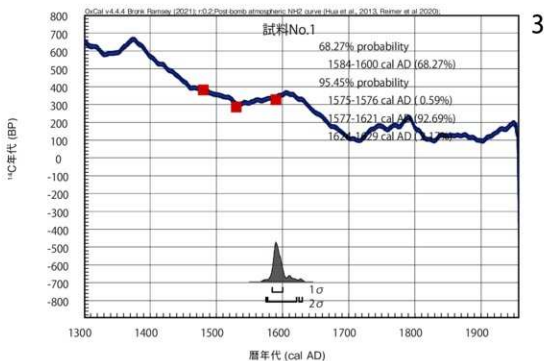
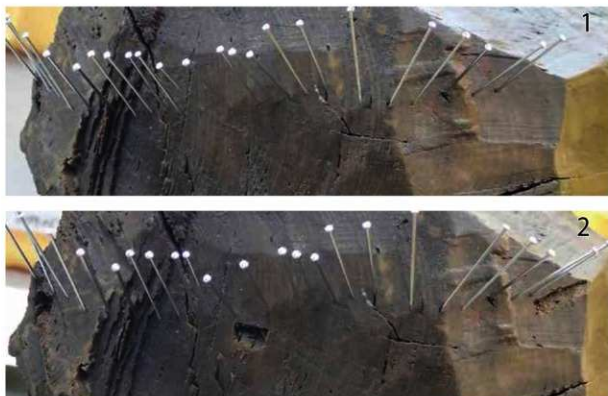
ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより最外試料の確率分

第12表 試料No.1の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-47526 試料No.1	-23.74 ± 0.19	328 ± 18	330 ± 20	1509-1528 cal AD (15.50%) 1542-1544 cal AD (1.41%) 1551-1593 cal AD (37.47%) 1619-1634 cal AD (13.89%)	1493-1602 cal AD (75.98%) 1609-1638 cal AD (19.47%)
				Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1527-1553 cal AD (41.87%) 1633-1648 cal AD (26.39%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1521-1580 cal AD (59.06%) 1584-1587 cal AD (0.63%) 1621-1657 cal AD (35.26%)
PLD-47527 試料No.1	-26.85 ± 0.17	287 ± 19	285 ± 20	1457-1496 cal AD (54.76%) 1601-1614 cal AD (13.51%)	1450-1520 cal AD (70.72%) 1587-1622 cal AD (24.73%)
PLD-47528 試料No.1	-28.01 ± 0.15	382 ± 19	380 ± 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1584-1600 cal AD (68.27%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1575-1576 cal AD (0.59%) 1577-1621 cal AD (92.69%) 1624-1629 cal AD (2.17%)
				Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1586-1602 cal AD (68.27%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1577-1578 cal AD (0.59%) 1579-1623 cal AD (92.69%) 1626-1631 cal AD (2.17%)
		最外試料年代		Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1584-1600 cal AD (68.27%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1575-1576 cal AD (0.59%) 1577-1621 cal AD (92.69%) 1624-1629 cal AD (2.17%)
		最外年輪年代		Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1586-1602 cal AD (68.27%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020) : 1577-1578 cal AD (0.59%) 1579-1623 cal AD (92.69%) 1626-1631 cal AD (2.17%)

第13表 試料No.2の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-47529 試料No.2	-27.85 ± 0.18	382 ± 19	380 ± 20	1457-1496 cal AD (54.76%) 1601-1614 cal AD (13.51%)	1450-1520 cal AD (70.72%) 1587-1622 cal AD (24.73%)
				1476-1514 cal AD (37.96%) 1590-1620 cal AD (30.31%)	1459-1524 cal AD (50.69%) 1560-1564 cal AD (1.16%) 1571-1631 cal AD (43.60%)
PLD-47530 試料No.2	-28.38 ± 0.16	361 ± 18	360 ± 20	1458-1498 cal AD (52.57%) 1601-1615 cal AD (15.70%)	1452-1521 cal AD (67.16%) 1579-1622 cal AD (28.29%)
				1484-1507 cal AD (68.27%)	1479-1520 cal AD (85.69%) 1602-1621 cal AD (9.85%)
PLD-47531 試料No.2	-29.11 ± 0.16	379 ± 19	380 ± 20	1486-1509 cal AD (68.27%)	1481-1522 cal AD (85.69%) 1604-1623 cal AD (9.85%)
				1484-1507 cal AD (68.27%)	1479-1520 cal AD (85.69%) 1602-1621 cal AD (9.85%)
		最外試料年代		1484-1507 cal AD (68.27%)	1479-1520 cal AD (85.69%) 1602-1621 cal AD (9.85%)
		最外年輪年代		1486-1509 cal AD (68.27%)	1481-1522 cal AD (85.69%) 1604-1623 cal AD (9.85%)

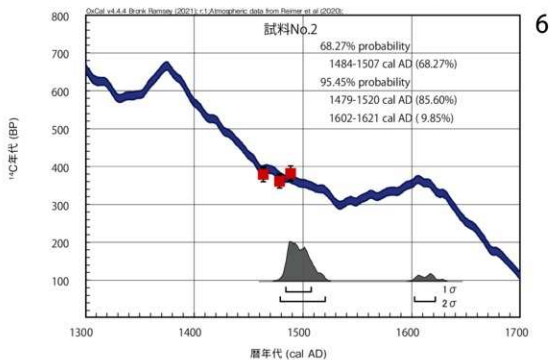


1. 試料 No.1 年輪計測結果 (PLD-47526 ~ 47528)

2. 試料 No.1 採取位置 (PLD-47526 ~ 47528)

3. 試料 No.1 ウィグルマッチング結果

第209図 年代測定を行った試料 (No.1) (ピンは5年間隔)



4. 試料 No.2 年輪計測結果 (PLD-47529 ~ 47531)

5. 試料 No.2 採取位置 (PLD-47529 ~ 47531)

6. 試料 No.2 ウィグルマッチング結果

第 210 図 年代測定を行った試料 (No.2) (ピンは5年間隔)

布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。したがって、試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数(今回の試料については2年輪:2.5年輪を小数以下切り捨て)を考慮する必要がある。

4. 考察

ウィグルマッチング法を適用した結果、沖遺跡の SP3018-W3003 の試料 No.1 の最外年輪年代は、2 σ の較正年代(以下、同様)で 1577-1578 cal AD (0.59%)、1579-1623 cal AD (92.69%)、1626-1631 cal AD (2.17%) で、16 世紀後半～17 世紀前半の暦年代を示した。

沖遺跡の SP3120-W3001 の試料 No.2 の最外年輪年代は、較正年代で 1481-1522 cal AD (85.60%) および 1604-1623 cal AD (9.85%) で、15 世紀後半～17 世紀前半の暦年代を示した。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. van der Plicht, J. and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Böniggen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve(0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757. doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第5節 沖遺跡出土土師器の胎土材料

株式会社パレオ・ラボ 藤根 久・米田恭子

1. はじめに

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和物で構成されるが、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される(藤根・今村, 2001)。また、粘土自体に珪藻化石や放射虫化石が混在している場合があり、使用した粘土の堆積環境を推定できる。

縄文土器や弥生土器などの焼物に利用できる粘土材料は、固結していない地層、すなわち、およそ第三紀中新統以降の地層堆積物、第四紀鮮新統～更新統の段丘堆積物中の粘土質堆積物、そして断層粘土に限定できると考えられる(藤根, 1998; 藤根・小坂, 1997)。

土器胎土中の砂粒物は、これらの粘土質堆積物に付随する砂粒の可能性が高いが、祭祀用とされる土器では、意図的に混和している場合も考えられる。例えば、東海地域の弥生時代後期の赤彩されたパレススタイル土器では、パレススタイル土器のうち3分の1程度に砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている(藤根, 1998)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について、岩石・鉱物のほか微化石類やテフラなどの記載が重要であり、粘土や砂粒物、混和物の特徴を調べたうえで、周辺地質と比較・検討する必要がある。

ここでは、丸亀市飯山町上法軍寺地内の沖遺跡から出土した土師器について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴を調べ、土師器の胎土材料について検討した。

2. 試料と方法

第14表 土師器の胎土分析試料の詳細

分析No.	報文No.	種類	器種	遺構名	時期	注記
1	25	古式土師器	壺	SD1005	古墳時代前期	KO1D0017
2	24		高坏			KO12D0263
3	6		鉢			KO12D0259
4	21		甕			KO12D0263

分析試料は、沖遺跡から出土した古墳時代前期の土師器4点である(第14表)。

土師器片は、岩石カッターを用いて整形し、全体にエポキシ系樹脂を浸透させて固化処理を行った。土師器試料は、精密岩石薄片作製機で整形、研磨フィルムを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の土師器薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

薄片試料は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面に含まれる微化石類(放射虫化石、珪藻化石、骨針化石など)、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について、観察と記載を行った。微化石類は、全体を300倍で観察した後、1500倍(油浸)で観察した。

さらに、微化石類、鉱物、岩片に分けて、粒度区分毎に同定・計測を行った。計測は、メカニカルステージを用いて0.3mm間隔におけるポイント法により、中粒シルト以上の粒子200個体について同定・計測した。本方法は、松田ほか(1999)を参考にした。

なお、ここで採用した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉(1988)や安藤(1990)は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石(海水種、淡水種)を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[胞子化石]

胞子は、直径約10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)によく見られる。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状に割れ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩など、ケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産出する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す）や、小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[緑れん石]

緑色～淡緑色のサイコロ状鉱物で、屈折率が高く、異常干渉色を示す。緑色片岩に特徴的に含まれる。

[ザクロ石]

無色透明の屈折率の高いサイコロ状鉱物である。変成岩中にごく普通に産出し、火山岩中にも含まれる。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩、千枚岩と考えられる。なお、ホルンフェルスも片理複合石英類を示す。

[複合石英類]

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01～0.05mmの粒子を小型、0.05～0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。複合石英類（大型）は、花崗岩などの深成岩類である。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[斑晶質・完晶質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。直交ニコルの観察において結晶度が高い岩石片である。

[流紋岩質]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、主に流理構造を示す岩石である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、直交ニコルの観察において結晶度が低く、全体的に暗い岩石片である。

[ホルンフェルス]

前述の片理複合石英類のほか、泥岩質あるいは凝灰岩質のうち構成粒子あるいは粒子境界が不鮮明であり、やや斑状組織を呈する濁った粒子である。直消光において全体的に暗い。

[不明粒子]

下方ローラーのみ、直交ローラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

偏光顕微鏡による各土師器薄片の観察結果を述べる。粒子組成については、微化石類や岩石片、鉱物を記載するために、プレパラート全面を精査した。以下では、粒度組成や、0.1mm 前後以上の岩石片・鉱物の砂粒組成、微化石類などの記載を示す。なお、第15表における不等号は、量比の概略を示す。また、第16表の記号については、●は極めて多い、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、—は不検出を示す。

第15表 試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載

分析No.	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒組成
1	180 μm ~ 450 μm	152mm	珪藻化石 (淡水種 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、不明種破片)、骨針化石 (4)、胞子化石多い、植物珪酸体化石多い	石英・長石類、ガラス質 (バブル型、軽石型) 複合石英類 (大型、文象構造) 角閃石類、ジルコシ、斜長石 (双晶)、複合石英類 (微細)、カリ長石 (微斜長石構造)、雲母類、準斜輝石
2	150 μm ~ 600 μm	148mm	珪藻化石 (淡水種 <i>Pinnularia viridis</i> 、 <i>Cymbella</i> 属、不明種破片)、骨針化石 (2)、胞子化石、植物珪酸体化石多産	ガラス質 (バブル型) 石英・長石類、複合石英類 (大型) 角閃石類、斜長石 (双晶)、ジルコシ、斜方輝石、カリ長石 (パーサイト)、凝灰岩質、雲母類
3	50 μm ~ 200 μm	113mm	珪藻化石 (淡水種 <i>Cymbella</i> 属、不明種破片)、骨針化石 (7)、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類 複合石英類 (小型)、ガラス質 (バブル型) 斜長石 (双晶)、角閃石類、複合石英類 (微細)、カリ長石 (パーサイト)、ジルコシ、雲母類、斜方輝石
4	300 μm ~ 1210 μm	398mm	珪藻化石 (淡水種 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Pinnularia lata</i> 、不明種破片)、骨針化石 (3)、胞子化石、植物珪酸体化石多い	ガラス質 (バブル型、軽石型)、石英・長石類、複合石英類 (大型) 角閃石類 斜長石 (双晶)、ジルコシ、斜方輝石、凝灰岩質、カリ長石 (微斜長石構造)、雲母類

第16表 胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分析No.	種類	粘土の特徴						砂粒の特徴							鉱物の特徴					植物珪酸体化石	その他の特徴					
		放射状化石	海水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	骨針化石	胞子化石	A-a	B-b	C-c	D-d	E-e	F-f	G-g	石英	斜長石 (双晶・長石帯)	カリ長石 (パーサイト)	ジルコシ	角閃石類			輝石類	雲母類			
1	淡水成	-	-	△	○	△	◎	Gb	-	○	△	-	-	-	◎	◎	△	△	△	△	△	△	△	△	●	ガラス質 (有色含む)、カリ長石 (微斜長石構造)
2	淡水成	-	-	△	○	△	○	Gb	-	○	-	-	△	-	●	◎	△	△	△	△	△	△	△	△	●	沼沢湿原成、ガラス質 (有色含む)、植物遺体含む
3	淡水成	-	-	△	△	○	○	(B)	-	△	△	-	-	△	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	●	砂粒が少ない、ガラス質 (有色含む)、大型の植物遺体含む
4	淡水成	-	-	△	△	△	△	Bg	-	◎	△	-	△	-	◎	◎	△	△	△	○	△	△	△	◎	◎	ガラス質 (有色含む)、カリ長石 (微斜長石構造)

第17表 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Cc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

第18表、第211・212図にポイント法による同定計測の結果、第213図にポイントカウント法による粒度分布を示す。

①微化石類による粘土材料の分類

土師器薄片の全面を観察した結果、微化石類（珪藻化石、骨針化石）が検出された。微化石類の大きさは、放射虫化石が数100 μm 、珪藻化石が10～数100 μm 、骨針化石が10～100 μm 前後である（植物珪酸体化石は10～50 μm 前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9～62.5 μm 、砂が62.5 μm ～2mmである（地学団体研究会・新地学事典編集委員会編, 2003）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は粘土中に含まれると考えられる。植物珪酸体化石以外の微化石類は、粘土の起源（粘土層の堆積環境）を知るのに有効な指標になる。植物

第18表 ポイント法による粒子の同定・計測結果

分析番号	粒径区分	粒度範囲	鉱物片											岩石片					合計	合計									
			淡水珪藻化石	不明珪藻化石	骨針化石	植物珪酸体化石	植物珪酸体化石	石炭・長石類	カリ長石	輝石類	斜長石	角閃石類	雲母類	不明珪物	ジルコン	不明珪物	輝石	片岩類			深成岩類	凝灰岩	流紋岩	火山岩	火山ガラス	粘土塊	不明岩石		
1	礫	細礫	2mm以上																								0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																										0
		粗粒砂	0.5-1mm				2																						2
		中粒砂	0.25-0.5mm						2																				2
		細粒砂	0.125-0.25mm								3								2										8
		極細粒砂	0.064-0.125mm				1	7	1														3						12
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				9	7	2														1						19
		中粒シルト	0.032mm以下				7	12					1			2							1						23
		基質																											125
		孔隙																									9		
2	礫	細礫	2mm以上																								0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																1										1
		粗粒砂	0.5-1mm																6										6
		中粒砂	0.25-0.5mm						4										1				4	2					11
		細粒砂	0.125-0.25mm							6													10						16
		極細粒砂	0.064-0.125mm				3	2	3														4						12
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				8	4															6						18
		中粒シルト	0.032mm以下				12	3			1	1											2						19
		基質																											111
		孔隙																									6		
3	礫	細礫	2mm以上																								0	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																										6
		粗粒砂	0.5-1mm																										0
		中粒砂	0.25-0.5mm												1														1
		細粒砂	0.125-0.25mm												1														1
		極細粒砂	0.064-0.125mm				1	3											1										6
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				2	7				1	1			1													12
		中粒シルト	0.032mm以下				3	17					2	1	1		4												28
		基質																											142
		孔隙																									4		
4	礫	細礫	2mm以上																								13	200	
	砂	極粗粒砂	1-2mm																										12
		粗粒砂	0.5-1mm							1																			7
		中粒砂	0.25-0.5mm							3													4						9
		細粒砂	0.125-0.25mm								8	1																	9
		極細粒砂	0.064-0.125mm				1	3	2					1															11
	シルト	粗粒シルト	0.032-0.064mm				3	4	1																				10
		中粒シルト	0.032mm以下				6	8						1															9
		基質																											107
		孔隙																									7		

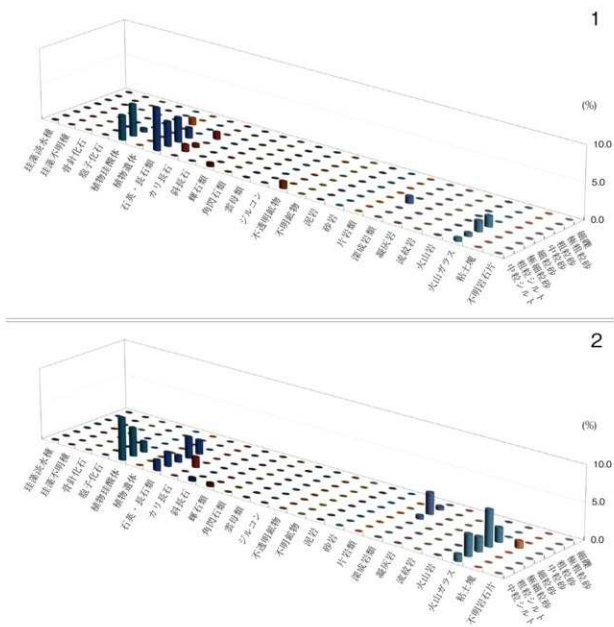
珪酸体化石は、土師器製作の場で灰質に伴って多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を必ずしも指標しない。

今回の試料の土師器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 淡水成粘土、に分類された(第16表)。以下では、それぞれの粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土(分析No.1~4)

これらの土師器胎土中には、淡水種珪藻化石 *Pinnularia* 属や *Cymbella* 属などが含まれていた。また、海綿動物の骨格の一部である骨針化石が含まれていた。

分析No.2の胎土中には沼沢湿地地付着生の *Pinnularia viridis* が含まれ、沼沢湿地成粘土と推定される。なお、植物珪酸体化石が多く含まれているが、多くの珪酸体はタケ類やササ類と考えられる。



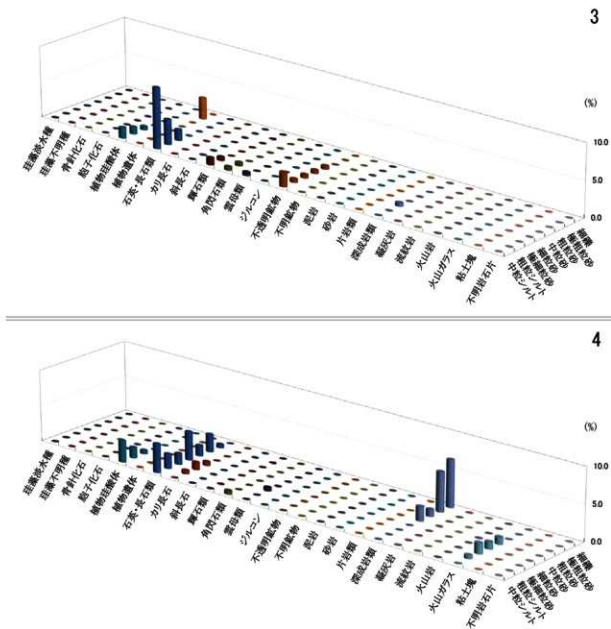
第 211 図 ポイントカウント法による粒子組成図 1(番号は分析No.に対応)

②砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物群は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った(第16表)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類(A/a)、複合石英類(大型)が深成岩類(B/b)、複合石英類(微細)などが堆積岩類(C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類(D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類(E/e)、流紋岩質が流紋岩類(F/f)、ガラス質がテフラ(G/g)である。

土師器胎土中の砂粒組成は、第17表の組み合わせに従って、1) B群、2) Bg群またはGb群、の2



第212図 ポイントカウント法による粒子組成図2(番号は分析No.に対応)

群に分類された。以下に、分類された砂粒物の特徴について述べる。

1) 主に深成岩類からなる B 群 (分析 No.3)

この土師器胎土中には、大型砂粒物が少ないが、複合石英類 (微細) からなる堆積岩類やその他起源の砂粒物も非常に少ない。主に複合石英類 (小型) やジルコン・雲母類・角閃石類などの鉱物群からなる深成岩類と推定される。

2) 主に深成岩類とテフラからなる Bg 群または Gb 群 (分析 No.1、2、4)

主に複合石英類 (大型) からなる深成岩類と、火山ガラス (バブル型・軽石型) からなるテフラで構成される。なお、火山ガラスはバブル型が多く、大型の火山ガラスが目立つ。

③ポイント法による粒子の同定計測

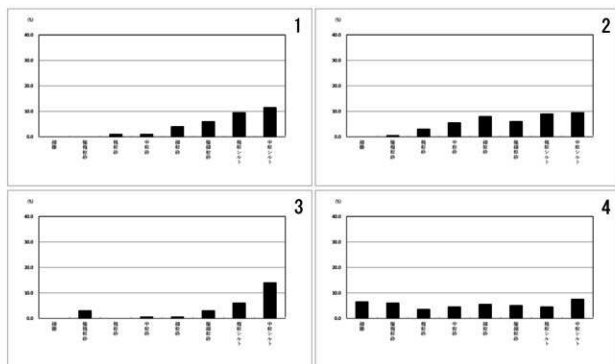
ポイント法による粒子の同定計測の結果を述べる。なお、採用した分類群は、前述した分類群に従った。

粒子の同定計測では、分析 No.1、2、4 において、粗粒物を比較的多く含み、深成岩類やバブル型・軽石型火山ガラスからなるテフラが多く計数された。一方、分析 No.3 では、粗粒物が少なく細粒質であった (第 213 図)。なお、この分析 No.3 では、他の土師器胎土で多く含まれていた火山ガラスは計数されなかった。

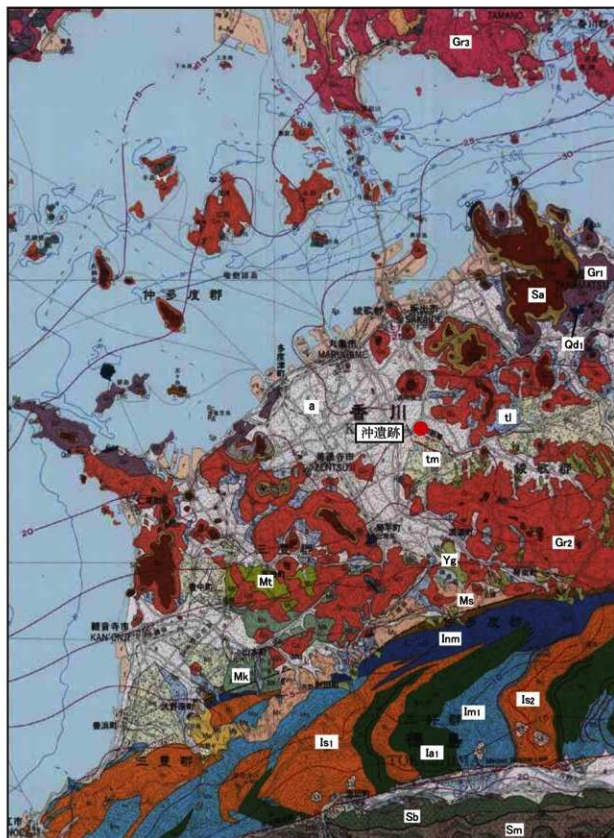
また、薄片全面の観察において示したように、分析 No.1～4 のいずれにおいても、イネ科植物珪酸体化石が多く計数された。

④遺跡周辺の地質環境

遺跡周辺では、新しい時代から、坂出平野・丸亀平野において完新世の沖積層 (第 214 図の凡例 a)、更新世後期・完新世の礫・砂及びシルトからなる低位段丘堆積物 (凡例 t1)、更新世中期・後期の礫・砂及びシルトからなる中位段丘堆積物 (凡例 tm) が分布する。



第 213 図 ポイントカウント法による粒度分布図 (番号は分析Noに対応)



[凡例] a: 沖積層, t1: 低位段丘堆積物, tm: 中位段丘堆積物, Mt・Mk・Ms: 三豊層群, Yg: 焼尾峠礫層, Sa: 讃岐層群国分台層及び相当層, Im1・Ia1・Is1・Inm: 和泉層群, Gr3: 花崗岩類Ⅲ, Gr2・Qd1: 花崗岩類Ⅱ, Gr1: 花崗岩類Ⅰ, Sb・Sm: 三波川結晶片岩類

第214図 遺跡と周辺の地質 (松浦ほか(2002)の20万分の1の地質図幅「岡山及び丸亀」を編集)

新生代第三紀の鮮新世末・更新世中期の三疊層群の礫及び砂からなる高瀬層(凡例 Mt)、泥及び砂からなる河内層(凡例 Mk)、礫及び砂からなる財田層(凡例 Ms)、同時期の礫及び砂からなる焼尾峠礫層(凡例 Yg)、中新世中期の讃岐層群国分台層及び相当層の安山岩及び火砕岩(凡例 Sa)が分布する。

さらに、南側の讃岐山脈では、中生代白亜紀後期の和泉層群の滝久保層及び堀田層の泥岩及び泥岩優勢の砂岩泥岩互層(Iml)、砂岩泥岩互層(凡例 Ial)、砂岩及び砂岩優勢の砂岩泥岩互層(凡例 Is1)、泥岩からなる引田層(凡例 Inm)、白亜紀後期の花崗岩類Ⅲの黒雲母花崗岩からなる(凡例 Gr3)、花崗岩類Ⅱの黒雲母花崗岩及び角閃石黒雲母花崗閃緑岩(凡例 Gr2)や角閃石トータル岩及び石英閃緑岩(凡例 Qd1)、花崗岩類Ⅰの角閃石黒雲母花崗岩・花崗閃緑岩(凡例 Gr1)が分布する。

さらに、中央構造線の南側地域では、中生代白亜紀の三波川結晶片岩類の苦鉄質片岩及び石英片岩(凡例 Sb)や泥質片岩(凡例 Sm)が分布する。

沖遺跡は、完新世の沖積層(凡例 a)や更新世中期・後期の礫・砂及びシルトからなる中位段丘堆積物(凡例 tm)の分布域に位置する。

⑤土師器材料の特徴

粘土材料は、粘土中に含まれていた微化石類により、淡水成粘土に分類された。分析 No.2 の土師器胎土は、珪藻化石により沼沢湿地成粘土が利用されていた。一方、砂粒組成は、B 群(分析 No.3)と Bg 群または Gb 群(分析 No.1、2、4)の 2 群に分類された。

いずれの土師器胎土中から、タケ類やササ類と考えられる植物珪酸体化石が多く含まれていた。

なお、器種による材料の違いはなかったが、鉢においては細粒質胎土であった。

⑥土師器材料の地域性

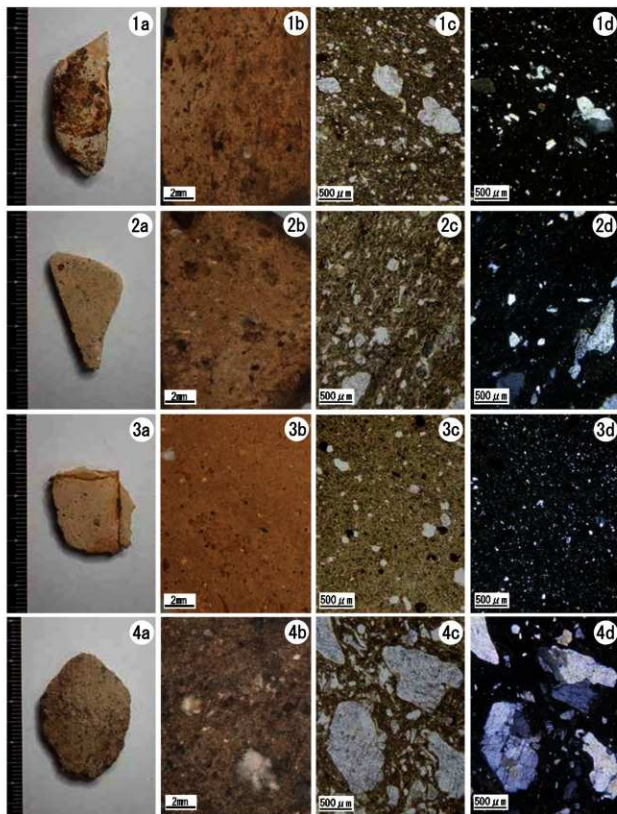
テフラ以外の砂粒物の岩石組成から、いずれの土師器も堆積岩類が極少なく、変成岩類を伴わない深成岩類が主であった。この深成岩類は、主に花崗岩類と推定され、砂粒物が由来する地域を示唆するものと思われる。沖遺跡は、坂出平野・丸亀平野に位置し、周辺では南側山地において、主に白亜紀後期の花崗岩類Ⅱの黒雲母花崗岩及び角閃石黒雲母花崗閃緑岩(第 214 図の凡例 Gr2)が広く分布する。また、鮮新世末・更新世中期の礫及び砂からなる焼尾峠礫層(凡例 Yg)が部分的に分布する。土師器胎土は、堆積岩類を僅かに伴い、主に深成岩類からなる砂粒組成は、こうした遺跡周辺の地質環境を反映した結果と言える。

なお、大型のバブル型火山ガラスが多く、九州の火山から飛来したテフラと推定され、始良 Tn テフラ(AT)の可能性が考えられる。テフラの同定は、エネルギー分散型 X 線アナライザー分析(SEM-EDS 分析)による化学組成の検討により可能であり、今後において確認したい。テフラは、粘土採掘に伴う粘土質堆積物に付随する可能性が高く、利用した粘土層の堆積時期を限定できる。遺跡の南側には、更新世中期・後期の礫・砂及びシルトからなる中位段丘堆積物(凡例 tm)が分布することから、この堆積物中の粘土質が利用された可能性が考えられる。

なお、これら土師器の製作地推定は、想定される地域の粘土材料や付随する砂粒物、あるいは、在地土師器との比較、粘土採掘鉞の調査事例など、土師器材料に関する精査が必要と考える。

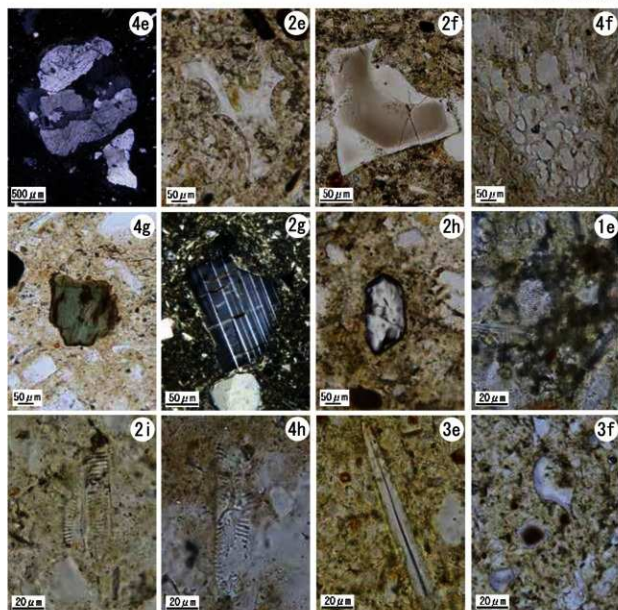
引用・参考文献

- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42(2), 73-88。
 地学団体研究会・新地学事典編集委員会(2003)新版 地学事典, 1443p, 平凡社。
 藤根 久・小坂和夫(1997)生物西麓(東大阪市)産の縄文の胎土材料—新層内物質の可能性—, 第四紀研究, 36, 55-62。



1a. 分析 No. 1 1b. 分析 No. 1 (断面) 1c. 分析 No. 1 (解放ニコル) 1d. 分析 No. 1 (直交ニコル)
 2a. 分析 No. 2 2b. 分析 No. 2 (断面) 2c. 分析 No. 2 (解放ニコル) 2d. 分析 No. 2 (直交ニコル)
 3a. 分析 No. 3 3b. 分析 No. 3 (断面) 3c. 分析 No. 3 (解放ニコル) 3d. 分析 No. 3 (直交ニコル)
 4a. 分析 No. 4 4b. 分析 No. 4 (断面) 4c. 分析 No. 4 (解放ニコル) 4d. 分析 No. 4 (直交ニコル)

第 215 図 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真



4e. 複合石英類 (大型) 2e. ガラス質 (バブル型) 2f. 有色ガラス質 (バブル型)
 4f. ガラス質 (軽石型) 4g. 角閃石類 2g. 斜長石 (双晶) 2h. ジルコン 1e. 珪藻化石 *Cymbella* 属
 2i. 珪藻化石 *Pinnularia viridis* 4h. 珪藻化石 *Pinnularia* 属 3e. 骨針化石 3f. 植物珪酸体化石

第216図 胎土の偏光顕微鏡写真

- 藤根 久(1998)東海地域(伊勢-三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料. 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・甕が語る:美濃の独自性 弥生から古墳へ」:108-117. 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会.
- 藤根 久・今村美智子(2001)第3節 土器の胎土材料と粘土探掘坑対象堆積物の特徴. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「流志江中宿遺跡」:262-277. 日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団.
- 藤根 久・Lomtatidze Zauri・丹生越子・中村俊夫(2003)S字状口縁台付甕の AMS年代とその意味. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 XIV. 208-216.
- 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究. 27. 1-20.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火成灰アトラス. 336p. 東京大学出版会.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高(1999)瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察. 日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集. 120-121.
- 松浦浩久・栗本史雄・吉田史郎・斎藤文紀・牧本 博・利光誠一・巖谷敏光・駒沢正夫・広島俊男(2002)20万分の1地質図幅「岡山及丸亀」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 日本地質学会(2016)日本地方地質誌7「四国地方」. 679p. 朝倉書店.

第6節 出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は香川県内に所在する、沖遺跡から出土した木製品3点である。

第19表 出土木製品樹種同定表

No.	出土遺構	器種	樹種
1	3-2区 SP3042	柱材	マツ科モミ属
2	3-2区 SP3120	柱材	マキ科マキ属イヌマキ
3	3-3区 SD3042	用途不明	スギ科スギ属スギ

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柀目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹3種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科モミ属 (*Abies* sp.) (遺物 No.1) (第217図 No.1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柀目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

2) マキ科マキ属イヌマキ (*Podocarpus macrophyllus* Sweet) (遺物 No.2) (第217図 No.2)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柀目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州（中・南部）、四国、九州、琉球に分布する。

3) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don) (遺物 No.3) (第217図 No.3)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に接線方向に並んでいた。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

◆参考文献◆

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)
- 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載1～V」京都大学木質科学研究所(1999)
- 鳥地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」鹿山閣出版(1988)
- 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)
- 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
- 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-F11

No-1 マツ科モミ属



木口



杵目

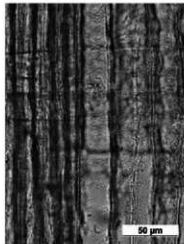


板目

No-2 マキ科マキ属イヌマキ



木口



杵目



板目

No-3 スギ科スギ属スギ



木口



杵目



板目

第217図 樹種同定 顕微鏡写真

第7節 沖遺跡出土のサヌカイト製石器の産地推定

株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展

1. はじめに

丸亀市飯山町上法軍寺に所在する沖遺跡より出土したサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象試料は、遺跡より出土したサヌカイト製石器6点(石1～石6)である(第20表)。石1、石2、石5、石6は中世～近世の遺構や遺物を中心とする1面より、石3は2面の古墳時代の大型灌漑水路付近より、石4は大型灌漑水路付近で灌漑水路掘削以前である3面より出土している。時期は、石5、石6が不明、石4が縄文時代後期、石1～石3が弥生時代後期以前とみられている。

第20表 サヌカイト分析試料一覧

分析資料番号	組文番号	遺構略号	注記番号	調査区名	面	遺構名	器種	時期区分	備考
石1	489	KO12	D0092	3-2	1	2面構成土中	石鏃	弥生後期以前	
石2	317	KO12	D0226	3-1	1	SD3032底	石包丁	弥生後期以前	17世紀前半～中葉の多里型地割の方向に平行する溝、横断面より砂質シルトの堆積による埋没後、細砂の堆積による埋没が明らかである。今回の分析対象は、SD3032の底という注記がなされ、SD3032が砂質シルトで埋没する際に混入したものであるという確証が持たない。(場合によっては溝の地山に入っていたもの可能性がある。)SD3032から混入とみられる7世紀の須恵器、12世紀～17世紀中葉の遺物が出土している。その他の石製品として、サヌカイト製石包丁、砂岩・流紋岩・安山岩製の砥石、角礫凝灰岩製の五輪磨が出土している。
石3	507	KO13	0041	5	2	2面構成土中	石鏃	弥生後期以前	遺構面精査中に出土。古墳時代の大型灌漑水路付近で出土したが、水路の流路ではない。2面では古墳時代の大型灌漑水路を検出している。
石4	502	KO13	0016	4	3	3面構成土中	石匙	縄文後期	遺構面精査中に出土。石3(507)とは古墳時代の大型灌漑水路をはさんで反対側(水路東側)で出土した。石4とは出土層位が異なり、大型灌漑水路掘削以前の層位と考えられる。この層位での遺構、遺物の検出はない。
石5	492	KO12	D0157	3-3	1	遺構面精査(1面構成土中)	火打石	不明	遺構面精査中に出土。出土状況は不詳。1面では遺構面精査中に出土。出土状況は不詳。1面では弥生時代後期～近世の遺構、遺物を検出している。
石6	494	KO12	D0147	3-4	1	遺構面精査(1面構成土中)	剥片	不明	遺構面精査中に出土。出土状況は不詳。1面では弥生時代後期～近世の遺構、遺物を検出している。

試料は、サンドブラストを用いて風化層を一部除去し、新鮮な面を露出させて測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法は、黒曜石産地推定法として用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えば望月2004)を、サヌカイトに適用した。方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図(第219図下段)と横軸Sr分率-縦軸 $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図(第219図上段))を作成し、各地の原石ア-



1. 自衛隊演習場付近
2. 神谷神社付近
3. 高産霊神社谷
4. 国分台下みかみ畑
5. 蓮光寺南東麓
6. 出雲神社周辺
7. 赤子谷
8. 法印谷
9. 金山南麓・北峰道路脇・奥池付近
10. 金山北東部
11. 城山南側
12. 城山北側
13. 雄山・雌山
14. 二子山南麓
15. 佐伯神社付近
16. 宮ヶ尾古墳周辺

第218図 香川県内のサヌカイト原石採取位置

第21表 原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	原石採取地 (試料点数)
香川	二上山	春日山	春日山みかん畑内 (10)
		国分台1	自南降演習場付近 (21)、神谷神社付近 (8)、高産霊神社谷 (1)、国分台下みかん畑 (4)、 蓮光寺山南東麓 (1)
	讃岐	国分台2	神谷神社付近 (3)、高産霊神社谷 (4)
		国分台3	自南降演習場付近 (1)、神谷神社付近 (2)、高産霊神社谷 (7)、国分台下みかん畑 (1)、 蓮光寺山南東麓 (25)、出雲神社周辺 (5)
		赤子谷	赤子谷第1地点 (5)、赤子谷第2地点 (5)
		法印谷	法印谷 (10)
		金山1	北峠道路脇 (9)、金山南麓 (8)、金山北東部 (27)
		金山2	北峠道路脇 (1)、金山南麓 (23)
		城山	城山南側 (5)、城山北側 (5)
		東奥1	雄山 (5)、懸山 (5)、神谷神社付近 (4)、出雲神社周辺 (23)、奥池付近 (11)
		東奥2	神谷神社付近 (3)、出雲神社周辺 (2)、奥池付近 (5)
		双子山	双子山南麓 (10)
	香色山	佐伯神社付近 (30)、宮ヶ尾古墳周辺 (1)	
	大塚山北麓	宮ヶ尾古墳周辺 (2)	

タと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。

さらに、上記指標値に加え、サヌカイト用に以下の2指標値を計算し、この2指標値を用いた判別図 (第219・220図) も作成した。

5) Zr 分率 = Zr 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)

6) Ca 強度 / K 強度

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。第21表にサヌカイトの判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第218図に香川県内のサヌカイト原石の採取地を示す。

3. 分析結果

第22表にサヌカイト製石器の測定値および算出された指標値を、第219・220図に、サヌカイト原石の判別図にサヌカイト製石器の分析結果をプロットした図を示す。判別図では視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定の結果、6点いずれも金山1群の範囲にプロットされた。第22表に産地推定結果を示す。

第22表 測定値および産地推定結果

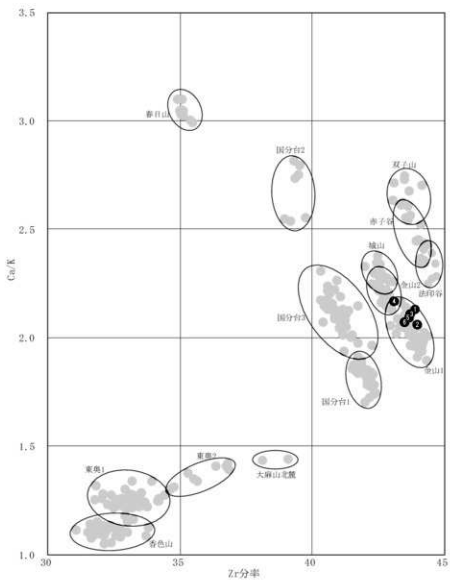
分析 番号	K 強度 (cps)	Ca 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	Mn/100 Fe	Sr 分率	log Fe/K	Zr 分率	Ca K	判別群	エリア	
石1	489	195.0	415.1	167.0	7608.4	559.4	1517.8	305.2	1862.8	13.18	2.20	35.75	1.59	43.88	213	金山1	讃岐
石2	317	195.6	403.6	166.0	7326.5	528.0	1420.0	291.0	1756.2	13.22	2.27	35.54	1.57	43.96	206	金山1	讃岐
石3	507	206.2	435.3	175.3	8000.1	574.0	1552.8	312.6	1895.3	13.24	2.19	35.82	1.59	43.72	211	金山1	讃岐
石4	502	199.6	432.3	161.9	7487.3	521.2	1446.1	287.6	1706.9	13.15	2.16	36.50	1.57	43.08	217	金山1	讃岐
石5	492	204.9	429.2	171.4	7658.7	540.4	1463.4	296.0	1783.2	13.24	2.24	35.84	1.57	43.67	209	金山1	讃岐
石6	494	208.7	432.3	168.3	7794.6	553.8	1491.6	305.9	1809.3	13.31	2.16	35.85	1.57	43.49	207	金山1	讃岐

4. おわりに

沖遺跡より出土したサヌカイト製石器6点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った。その結果、6点すべてが金山産の可能性が高いと推定された。

引用文献

望月明彦 (2004) 用田大内河内遺跡出土土曜石の産地推定。かながわ考古学財団編「用田大内河内遺跡」: 511-517。かながわ考古学財団。



第 220 図 サマカイト产地推定判別図 2

第8節 沖遺跡出土鍛冶・鑄造関連遺物の調査

日鉄テクノロジー株式会社 九州事業所
鈴木瑞穂

1. 調査対象

沖遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。発掘調査地区からは中世前半～近世前半と推定される生産関連遺物が出土している。このため遺跡内での鉄器生産の実態を検討する目的から、出土した生産関連遺物3点を調査した。

2. 調査方法

(1) 外観観察

目視での調査前の外観観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

試料を切り出した後、断面をエメリー研磨紙の#150、#240、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で順を追って研磨し、全体像を撮影した。

(3) 顕微鏡組織

光学顕微鏡を用いて断面観察後、代表的・特徴的な視野を撮影した。

(4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬度を測定した。試料は顕微鏡を用い、荷重は50gfで測定した。ビッカース硬度は測定箇所に圧子(136°の頂角をもったダイヤモンド)を押し込んだ時の荷重と、それにより残された窪み(圧痕)の対角線長さから求めた面積から算出される。

(5) EPMA調査

EPMA(日本電子株式会社 JXA-8230)を用い、鉄滓や鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧:15kV、照射電流(分析電流):2.00E-8A。

(6) 化学組成分析

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化磷(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO_2):ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer):誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3. 調査結果

OKI-1:鍛冶滓(250)

(1) 外観観察:ごく小形の鍛冶滓破片(14.9g)である。表層には広い範囲で黄～茶褐色の土砂や錆化鉄が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。また上面端部に1箇所瘤状のガラス質滓が付着する。これは熱影響を受けた羽口先端等の粘土溶融物と推測される。鍛冶滓の地の色調は暗灰色で弱い磁性がある。破面には細かい気孔が散在するが、比較的比重の大きい(鉄酸化物の割合の高い)滓と推測さ

れる。

(2) マクロ組織：第221図①に示す。上側はガラス質滓である。これに対して下側は鍛冶滓である。全体に発達した淡灰色結晶ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が晶出する。また滓中の青灰色部は錆化鉄である。

(3) 顕微鏡組織：第221図②③に示す。②はガラス質滓の拡大である。内部には熱影響を受けた石英粒などが多数点在する。この部分は羽口先端等の粘土溶融物と判断される。③の上側は錆化鉄部の拡大で、内部には微かに層状のパーライト (Pearlite) 痕跡が残存する。この組織痕跡から、本来は亜共析 ($C < 0.77\%$) 組織の鋼であったと推測される。また③の下側は鍛冶滓部分である。上述したように、滓中には発達した淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。

(4) ビッカース断面硬度：第221図③下側の鍛冶滓部分の淡灰色結晶を硬度測定した。硬度値は602、688、703Hvであった。ファヤライトの文献硬度値 (約600～700Hv(注1)) とほぼ同じ硬さであった。

(5) EPMA 調査：第221図④にガラス質滓部分の反射電子像 (COMP) を示す。写真右側の熱影響を受けた暗灰色鉱物の定量分析値は96.6% SiO_2 (分析点1) であった。石英 (Quartz: SiO_2) と推定される。また素地の暗灰色部の定量分析値は78.1% SiO_2 - 10.2% Al_2O_3 - 3.7% K_2O - 4.8% FeO (分析点2) であった。非晶質珪酸塩である。

さらにもう1視野、鍛冶滓部分の組成を調査した。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、珪素 (Si) に強い反応がある。定量分析値は67.2% FeO - 27.9% SiO_2 (分析点3) であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) と推定される。素地の暗灰色部の定量分析値は44.4% SiO_2 - 19.2% Al_2O_3 - 5.2% CaO - 6.1% K_2O - 18.4% FeO (分析点4) であった。非晶質珪酸塩である。また写真右上の微小白色粒は特性X線像では鉄 (Fe) にのみ強い反応がある。この箇所は定量分析値は98.9% Fe (分析点5) であった。金属鉄 (Metallic Fe) である。

(6) 化学組成分析：第24表に示す。全鉄分 (Total Fe) 43.76% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) が0.53%、酸化第1鉄 (FeO) は13.67%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 46.62% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は32.75% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は1.22% と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.19%、バナジウム (V) < 0.01% と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.16%、銅 (Cu) も < 0.01% と低値である。

当鉄滓は主に鉄酸化物と炉材粘土の溶融物 (SiO_2 主成分) からなり、製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の珪石成分 (TiO_2 , V) は低減傾向が顕著であった。以上の特徴から、当鉄滓は鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛煉鍛冶滓と推定される。

OKI - 2: 鑄造鉄器片 (214)

(1) 外観観察：ごく小形で扁平な板状の鑄造鉄器の破片 (11.8g) である。鉄鍋など鉄鑄物 (器物) の破片の可能性が高いと考えられる。また全体に金属探知器反応はなく、内部に金属鉄は残存していないと判断される。

(2) マクロ組織：第222図①に示す。横断面の形状から、厚さ5mm程の板状の鉄器破片と推定される。観察面は全体が錆化 (腐食) しており、金属鉄は残存していない。また内部には鑄果 (気孔) が複数確認された。

(3) 顕微鏡組織：第222図②③に示す。観察面全体で、蜂の巣状のレデブライト (Ledeburite) が観察

された。この金属組織痕跡から、当試料は共晶組成白鑄鉄(C:4.26%)であったと推定される。

(4) EPMA 調査: 第222図④⑤に銹化鉄部の反射電子像(COMP)を示す。特性X線像では全体に鉄(Fe)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は64.7%Fe - 29.1%O(分析点6)、61.5%Fe - 33.2%O(分析点7)であった。金属鉄が腐食(銹化)して生じた、ゲーサイト[Goethite: FeO(OH)]などの水酸化鉄と推測される。なお内部に硫黄(S)や磷(P)の偏析はみられなかった。

(5) 化学組成分析: 第24表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は39.15%と低値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.24%、酸化第1鉄(FeO)16.14%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)37.70%であった。遺物全体が腐食(銹化)しており、金属鉄はほとんど残存していない。また二酸化珪素(SiO₂)は26.43%、酸化アルミニウム(Al₂O₃)が3.10%であった。これらは鑄造鉄器破片の腐食(銹化)に伴い、土壌が固着した影響と判断される。

以上の調査結果から、当遺物は厚さ5mm程の鑄造鉄器破片と推定される。上述したように鉄鍋などの鉄鑄物(器物)の破片の可能性が高いと考えられる。

OKI-3: ガラス質滓(炉材粘土付着)(400)

(1) 外観観察: やや大形で不定形のガラス質滓(83.1g)である。下面側には灰褐色の被熱粘土が残存する。また滓の表層には茶褐色の銹化鉄粒や木炭破片が付着する。銹化鉄粒には金属探知器反応がなく、内部に金属鉄は残存していないと考えられる。強い熱影響を受けてガラス質化した、炉壁内面または羽口の粘土溶解物と推測される。

(2) マクロ組織: 第223図①に示す。観察面はほぼ全面ガラス質滓で、内部に熱影響を受けた石英粒などが多数点存在する。これらは炉壁または羽口粘土中に混ざられた砂粒と推測される。また表層(写真上側)には、微細な銹化鉄粒や木炭破片が付着する。

(3) 顕微鏡組織: 第223図②③に示す。②下側の左右にほぼ同じ大きさの銹化鉄が2粒溶着している。どちら粒も内部に片状黒鉛(Graphite: C)が残存している。この特徴から、これらの銹化鉄粒はねずみ鑄鉄であったと判断される。また③の上側は木炭破片である。内部に発達した導管が分布しており、広葉樹材の黒炭と推定される。

(4) EPMA 調査: 第223図④に溶着金属(銹化鉄粒)の反射電子像(COMP)を示す。中央の片状黒色部に対応して、炭素(C)に強い反応がみられる。この結果から片状黒色部は黒鉛(Graphite: C)と判断される。

さらにもう1視野、ガラス質滓部分の組成を調査した。第223図⑤に反射電子像(COMP)を示す。左上の微小白色粒は、特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は95.2%Fe(分析点8)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。写真右側の熱影響を受けた暗灰色鉱物は、特性X線像では珪素(Si)に強い反応がある。定量分析値は95.6%SiO₂(分析点9)であった。石英(Quartz: SiO₂)と推定される。また素地の暗灰色部の定量分析値は67.4%SiO₂ - 13.3%Al₂O₃ - 2.8%CaO - 6.2%K₂O - 4.0%FeO(分析点10)であった。非晶質珪酸塩である。

(5) 化学組成分析: 第24表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は6.87%と非常に低値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.16%、酸化第1鉄(FeO)が1.58%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)7.838%であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)の割合は88.63%と高く、このうち塩基性成分(CaO + MgO)は6.75%であった。また二酸化チタン(TiO₂)は0.46%、バナジウム(V)が<0.01%と低値であ

た。さらに酸化マンガン(MnO)は0.22%、銅(Cu)は<0.01%と低値である

当鉄滓は珪長質(SiO₂、Al₂O₃)成分主体のガラス質滓であった。この特徴から、炉材または羽口などの粘土溶融物と推定される。また表層にはねずみ銹鉄粒や広葉樹材の木炭破片が確認された。

4. まとめ

沖遺跡から出土した遺物3点を調査した結果、次の点が明らかとなった。

(1) 鍛冶滓(OKI-1 250)は鍛錬鍛冶滓であった。上面側には微細な金属鉄粒や熱影響を受けた石英粒を含むガラス質滓が確認された。これは熱間での鍛冶作業に伴い羽口先端の粘土が溶融したものと判断される。素地の鍛冶滓はファヤライト(Fayalite 2FeO・SiO₂)組成で、製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起原の脈石成分(TiO₂、V)は低減傾向が顕著であった。鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた滓と推定される。

また鍛冶滓中には銹化鉄部も確認された。その内部には微かに層状のパーライト(Pearlite)組織痕跡が確認された。鍛冶炉内で加熱されているうちに、加工時の鉄素材から炭素量が変化している可能性はあるが、この金属組織痕跡から鋼を熱間で鍛打加工していたと考えられる。

(2) 鑄造鉄器片(OKI-2 214)は、厚さ5mm程の板状の小破片で、断面全体に共晶組成白銹鉄組織痕跡が残存する。この金属組織痕跡から、鉄鍋などの鉄鑄物(器物)の破片と推定される。なお中世以降、こうした板状の鑄造鉄器の小破片が鍛冶遺構から出土することはめずらしくない。鉄鍋・鉄釜などの器物が日用品として普及していくに従って、その破片(廃鉄器)を溶融・脱炭して、鍛冶原料として再利用することが広く行われていたと推測される。この鑄造鉄器(OKI-2)片は、同時期の鍛冶遺構・鍛冶関連遺物と共存するものではないが、そうした用途で遺跡内にあった可能性は考えられる。

(3) ガラス質滓(OKI-3 400)は、珪長質(SiO₂、Al₂O₃)成分主体で、内部に被熱した石英粒が多数混在する。また表層には複数のねずみ銹鉄粒や、広葉樹材の木炭破片が確認された。この特徴から、鉄鑄物の製作に用いられた鑄造用溶解炉の内面、または羽口先端が溶融して生じた遺物の可能性が考えられる。

上述したように、中世以降には鉄鍋などの鑄造鉄器の小破片を鍛冶原料に利用することは広く行われている。こうした鑄造鉄器を溶融・脱炭する作業のなかで、炭素量が下がらなかった鉄粒が粘土溶融物中に残存する可能性もある。ただし、銹鉄が溶着する比較的大形のガラス質滓が鍛冶関連遺物中に確認される事例は、あまり一般的なものではない。このため鑄造関連遺物の可能性がより高いと考えられる。

(注)

(1) 日刊工業新聞社 1968『焼結組織写真および識別法』

ウスタイトは約450～500Hv、マグネタイトは約500～600Hv、ファイヤライトは約600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO・TiO₂)の硬度値範囲の明記はないが、マグネタイト(Magnetite: FeO・Fe₂O₃)と同じスピネル類の化合物で、チタニアを固溶するためマグネタイトよりも硬質である。ウルボスピネル組成であれば通常600Hv以上の値を示す。ヘルシナイト(Hercynite: FeO・Al₂O₃)はさらに硬質で1000Hvを超える。

第23表 鋳造関係遺物の供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	根文番号	遺物名	遺物名称	推定年代	計測値		金銅添加物反応	調査項目		備考
						大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ組織	顕微鏡組織	
OK1-1	沖	250	SD0028	銅治萍	14c ~ 17c 中頃	28 × 23 × 21	14.9	なし	○	○	○
OK1-2		214	SD0016	銅造鉄器片	近世前期	28 × 26 × 14	11.8	なし (緑化)	○	○	○
OK1-3		400	SD0042	872銅萍 (浮材粘土付着)	14c ~ 17c 中頃	87 × 62 × 23	83.1	なし (緑化)	○	○	○

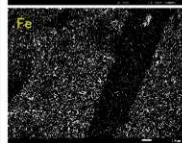
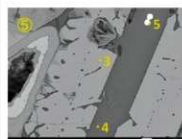
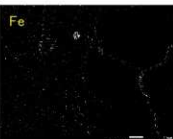
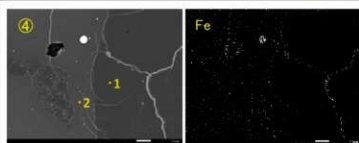
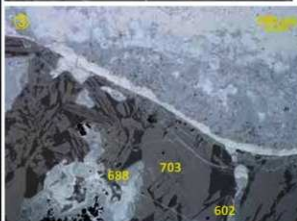
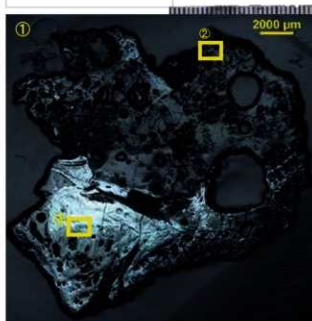
* OK12-3 の銅萍測定結果は参考値として報告

第24表 鋳造関係遺物の供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	全鉄分 (Metallic Fe)	炭素 (C)	二酸化 ケイ素 (SiO ₂)	二酸化 ケイ素 (Al ₂ O ₃)	酸化 カルシウム (CaO)	酸化 マグネシウム (MgO)	酸化 ナトリウム (Na ₂ O)	酸化 マンガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO ₂)	二酸化 ケイ素 (Cr ₂ O ₃)	硫酸 カルシウム (CaSO ₄)	五酸化 リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	炭素 (V)	炭素 (Cu)	二酸化 ケイ素 (ZrO ₂)	成分		
OK1-1	沖	250	SD0028	銅治萍 14c 中頃	43.76	0.53	13.67	46.62	(FeO)	36.50	3.26	0.99	0.23	1.41	0.26	0.16	0.19	0.03	0.04	0.33	0.27	<0.01	<0.01	32.49
OK1-2	沖	214	SD0016	銅造鉄器片 近世前期	30.15	0.24	16.14	37.70	26.43	3.10	0.49	0.04	1.03	0.35	0.55	0.11	0.03	0.04	0.87	1.82	<0.01	0.02	<0.01	31.09
OK1-3		400	SD0042	872銅萍 (浮材粘土付着)	6.87	0.16	1.58	7.838	66.68	9.92	5.84	0.91	4.33	0.95	0.22	0.46	0.04	0.01	0.31	0.20	<0.01	<0.01	0.01	87.68

OKI-1 鍛冶滓(250)

①マクロ組織、②ガラス質滓(被熱砂粒混在)、③上側: 酸化鉄(パーライト組織痕跡)、下側: 鍛冶滓、ファイヤイト(硬度:602、688、703Hv, 50gf)



定量分析値

Element	1	2	3	4
MgO	0.005	0.407	0.831	-
SiO ₂	96.645	78.066	27.899	44.388
Na ₂ O	-	0.261	0.012	0.798
Al ₂ O ₃	-	10.180	0.013	19.200
CaO	0.005	0.235	0.237	5.189
TiO ₂	-	0.978	0.046	0.904
S	0.011	-	0.002	0.023
ZrO ₂	0.083	0.060	-	0.076
P ₂ O ₅	0.044	0.080	-	0.473
K ₂ O	-	3.720	0.013	8.125
CuO	-	-	-	0.011
FeO	0.222	4.800	67.172	18.370
MnO	0.025	0.097	0.229	0.040
V ₂ O ₅	-	0.043	0.009	0.008
Total	97.040	98.907	96.499	95.555

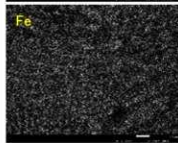
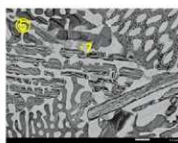
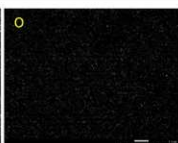
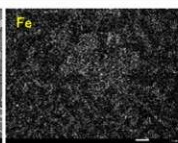
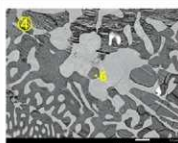
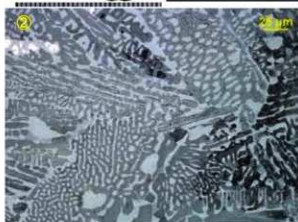
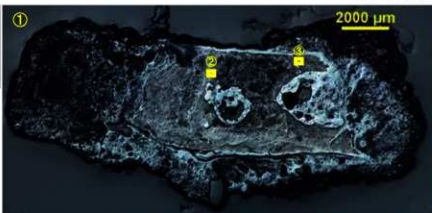
Element	5
N	0.123
O	0.254
Si	0.031
As	0.042
Al	0.005
Ca	0.042
Ti	0.042
Zr	0.078
P	0.007
Fe	98.898
K	0.067
Cu	0.100
Co	0.199
Mn	0.030
Total	99.918

滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第 221 図 鍛冶滓 (250) の顕微鏡写真・EPMA 調査結果

OKI-2 鑄造鉄器片(214)

①マクロ組織、②③錆化鉄:共晶組成白鑄鉄組織痕跡



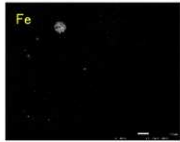
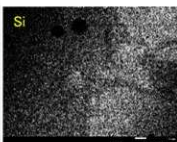
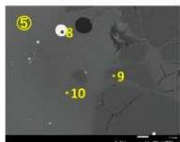
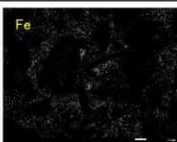
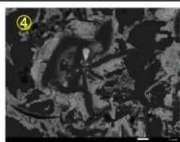
Element	定量分析値	
	6	7
N	0.114	0.109
O	29.095	33.226
Si	0.292	0.012
As	-	0.057
Na	0.016	0.036
Ce	0.452	-
Cl	0.016	0.013
Ti	0.001	0.010
Pb	0.090	0.043
S	0.075	0.059
Zr	0.025	0.027
P	0.008	0.493
Fe	64.703	61.455
Zn	0.009	-
Cu	0.066	0.043
Ni	-	0.052
Co	0.096	0.157
Mn	-	0.022
Cr	-	0.010
V	0.039	0.006
Total	95.099	95.830

鑄造鉄器片の反射電子像 (COMP) および特性線像

第 222 図 鑄造鉄器片 (214) の顕微鏡写真・EPMA 調査結果

OKI-3 ガラス質滓 (400)

- ①マカ組織、素地:ガラス質滓(被熱石英混在)、②下側(左右2箇所)ねずみ錆鉄粒、③木炭破片:広葉樹材



定量分析値

Element	8	Element	9	10
N	0.134	MgO	-	0.416
O	0.388	SiO ₂	95.804	87.394
Si	0.047	Na ₂ O	0.001	0.808
As	0.029	Al ₂ O ₃	0.228	13.329
Ti	0.012	CeO	0.033	2.844
Pb	0.046	TiO ₂	0.008	0.503
Zr	0.008	S	0.009	0.008
P	2.545	ZrO ₂	-	0.066
Sr	0.003	K ₂ O	0.173	6.180
Fe	95.230	CuO	0.027	0.018
K	0.075	FeO	0.208	4.011
Zn	0.026	MnO	0.027	0.094
Cu	0.062	V ₂ O ₅	0.009	0.007
Co	0.173	Total	96.328	95.658
Cr	0.006			
Total	98.792	Total	96.328	95.658

溶着金属・ガラス質滓の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第 223 図 ガラス質滓 (400) の顕微鏡写真・EPMA 調査結果

第9節 沖遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社イビソク

1. はじめに

香川県丸亀市の沖遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、ピットから出土した木製品7点である。発掘調査所見によれば、時期は中世後半～近世初頭と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定では、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柀目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のモミ属とマツ属複雑管束亜属、アスナロの3分類群と、広葉樹のクスノキ科とクワ属の2分類群の、計5分類群がみられた。モミ属とクスノキ科が各2点、マツ属複雑管束亜属とアスナロ、クワ属が各1点であった。同定結果を第25表に、一覧を第26表に示す。

第25表 樹種同定結果

樹種/器種	柱材	枋	合計
モミ属	2		2
マツ属複雑管束亜属	1		1
アスナロ		1	1
クスノキ科	2		2
クワ属	1		1
合計	6	1	7

以下に、同定された材の特徴を記載し、第224・225図に光学顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第224図 1a-1c(No.6)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複雑管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第224図 2a-2c(No.3)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複雑管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬であるが、切削等の加工は容易である。

(3) アスナロ *Thujaopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 第224図 3a-3c(No.4)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列である。分野壁孔は小型のヒノキスギ型で、1分野に2～4個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また、精油が多く耐朽性に優れている。

(4) クスノキ科 Lauraceae 第225図 4a-4c(No.5)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～2列である。木部繊維内には、油細胞が認められる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

(5) クワ属 Morus クワ科 第225図 5a-5c(No.7)

年輪のはじめに大型の道管が並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、斜め方向に断続的に複合する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が方形となる異性で、幅1～6列である。

クワ属にはヤマグワやマガワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し、日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

4. 考察

柱材では、モミ属とマツ属複雑管束亜属、クスノキ科、クワ属がみられた。モミ属とマツ属複雑管束亜属は木理通直でまっすぐに生育する加工性の良い樹種であり、クスノキ科とクワ属は堅硬な部類に属する樹種である(伊東ほか, 2011)。

香川県内で確認されている戦国時代～江戸時代初期の柱には、マツ属複雑管束亜属を中心として、針葉樹、広葉樹共に利用されており、傾向は一致する(伊東・山田編, 2012)。

杭は、アスナロであった。アスナロは木理通直でまっすぐに生育し、加工性が良く、油分が多くて耐朽性が高い(伊東ほか, 2011)。香川県内で確認されている戦国時代～江戸時代初期の杭には、コナラ属コナラ節とハンノキ属ハンノキ亜属が利用されており(伊東・山田編, 2011)、今回の試料は異なる傾向を示した。

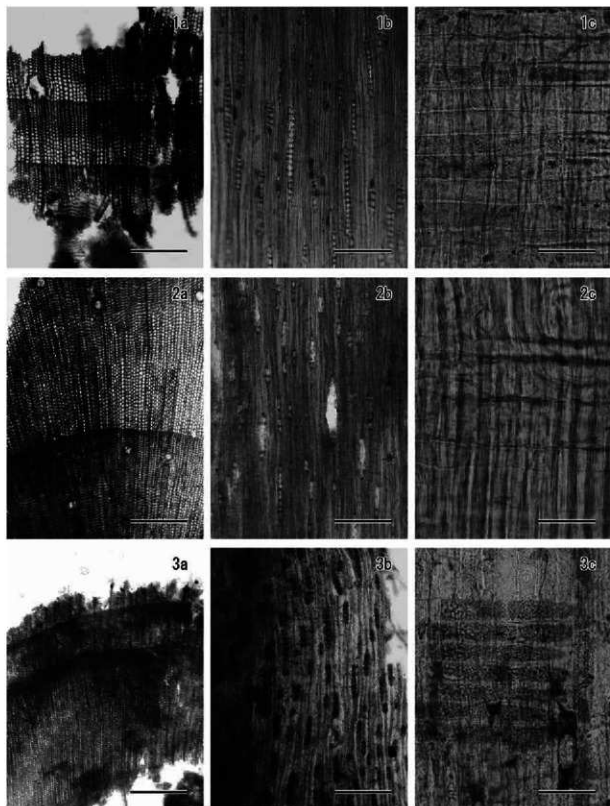
引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和樹(2011)日本有用樹木誌. 238p, 海青社。
伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社。

技術協力 小林克也氏(パレオ・ラボ)

第26表 樹種同定結果一覧

分析番号	編文番号	注記番号	調査区	面	遺構名	芯種	樹種	木取り	時期
1	-	P0424	3-5	1	SP3753	柱材	モミ属	割れ	中世後半～近世初期
2	-	P0336	3-1	1	SP3372	柱材	クスノキ科	割れ	中世後半～近世初期
3	-	P0389	3-3	1	SP3612	柱材	マツ属複雑管束亜属	割れ	中世後半～近世初期
4	147	D0286	3-1 (南証張部)	1	SD3007	杭	アスナロ	志持丸木	中世後半～近世初期
5	-	P0099	3-2	1	SP3083	柱材	クスノキ科	角材	中世後半～近世初期
6	-	P0121	3-2	1	SP3016	柱材	モミ属	志持丸木	中世後半～近世初期
7	-	P0170	3-2	1	SP3011	柱材	クワ属	志持丸木	中世後半～近世初期

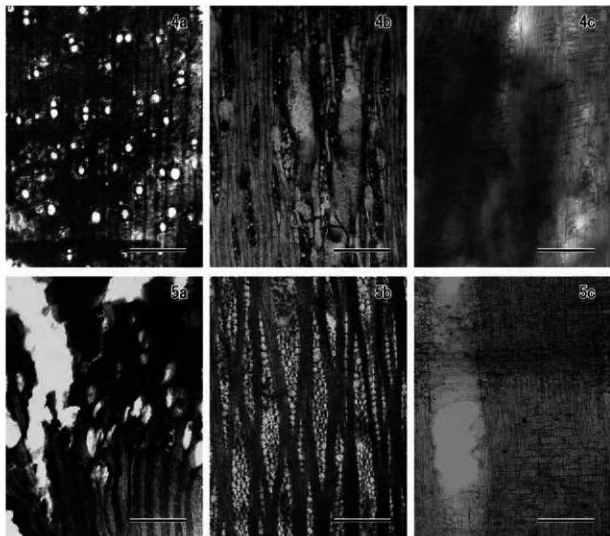


図版1 沖遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. モミ属 (No. 6)、2a-2c. マツ属複雑管束重層属 (No. 3)、3a-3c. アスナロ (No. 4)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=50 μm)

第 224 図 光学顕微鏡写真 (1)



図版2 沖縄跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)

4a-4c. クスノキ科(No. 5)、5a-5c. クワ属(No. 7)

a: 横断面(スケール=500 μm)、b: 接線断面(スケール=200 μm)、c: 放射断面(スケール=200 μm)

第 225 図 光学顕微鏡写真(2)

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷（第226・227図）

弥生時代後期以前

縄文時代以前の遺構は確認されていないが、4区において縄文時代のもと考えられる石匙を採集した。蛍光エックス線分析によるサヌカイト産地推定の結果、金山産サヌカイト製と推定される。周辺の北岸南遺跡でも縄文時代の石器の産地推定を行い、8点の分析対象のうち6点が金山産ということが明らかになっている。本地域において、縄文時代の石器の原産地を分析した資料は上記の2例のみであり、今後資料の蓄積が進むことによって、原産地の時期的推移や石材流通について実証的な研究が進展すると考える。

弥生時代後期以前の遺跡は1～3区の第2遺構面ないしは第3遺構面において確認される。遺構は溝と自然河川が中心で分布は希薄であり、居住域は確認できない。3-2区において検出した自然河川SR3004からは弥生時代後期の壺体部片が2点出土しているが、その他の遺構から遺物の出土はない。

丸亀市教育委員会が実施した東側隣接地の発掘調査では、弥生時代のSN01から稲株痕が検出され、当該期に水田耕作が行われた可能性が指摘されている。本調査で行ったプラント・オパール分析では、丸亀市調査区24層と連続すると推定される2-1区西壁19層・3-1区北壁22層から採取した試料で多量のプラント・オパールが検出されており、当該期の調査地付近が水田耕作地として利用された可能性が想定されるが、畦畔等の明確な水田遺構は検出されていない。

古墳時代～古代以前

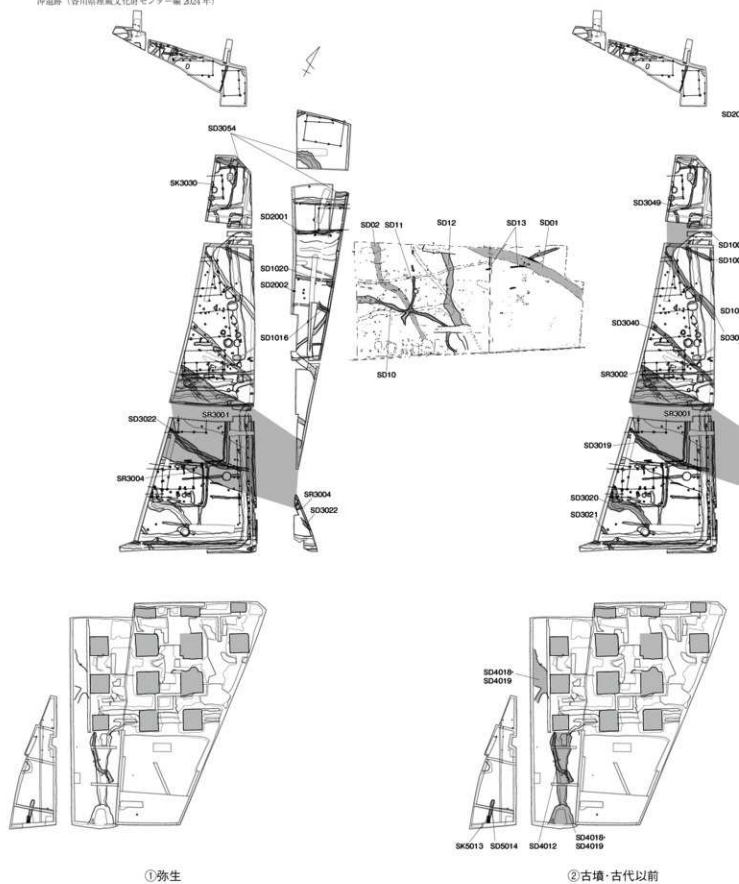
弥生時代後期以前に引き続き、検出した遺構は溝・自然河川が主体であり、同時期の明確な居住関連遺構は確認できない。

3-1区から3-2区ではSR3001、SR3002を検出した。現在本遺跡の周辺を流下する大東川は旧綾歌町に源を発し丸亀平野を南から北へ流下する。上流地域では、流路方向が周辺の地割に概ね合致しており、人為的に流路の付け替えが行われた可能性が想定される。また、本遺跡に近い法敷寺跡付近では、西大東川（旧土器川）が南へ流下し「逆さ川」と呼ばれる。本遺跡の周辺には土器川と大東川の旧河道があり、その位置から3-1、3-2区で検出した自然河川は西大東川（旧土器川）の流路と想定している。弥生時代後期以前から古代以前の自然河川の変遷を考えるとSR3004→SR3002→SR3001となり流路が若干北に動くものの、ほぼ同じ位置を流下している。

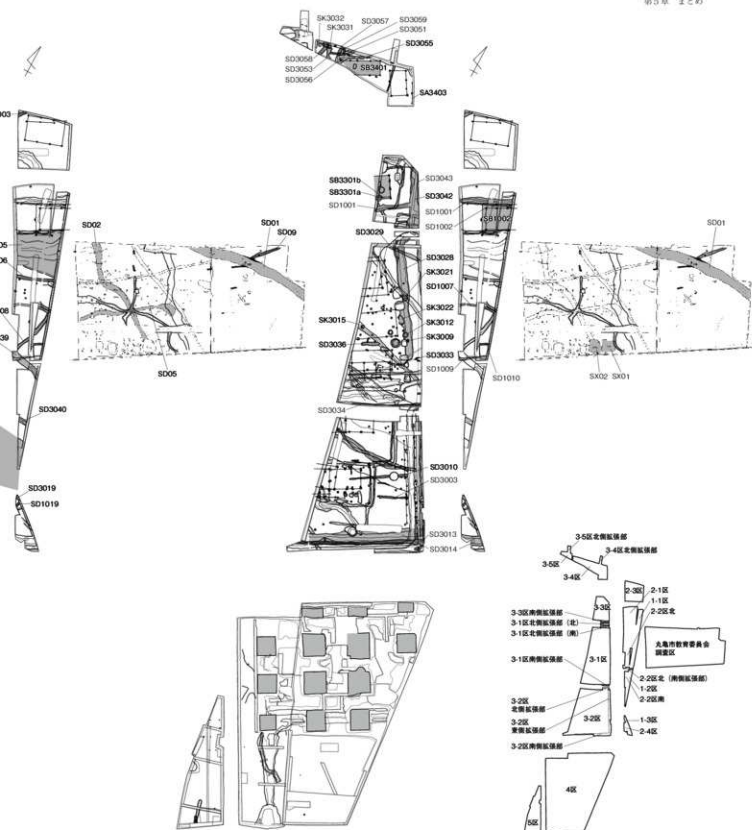
4区では、古墳時代の大形灌漑水路と考えられるSD4018、SD4019が検出された。攪乱により3区方向へ連続するかは不明だが、西壁断面より北西から南への流路方向を復元できる。沖遺跡の南に位置する沖南遺跡では溝の延長は検出されていない。

第4章第2節、第3節での花粉分析の結果から、古代以前の周辺では、水田が営まれていた可能性が指摘されるほか、周辺に照葉樹林の分布していた可能性も指摘されている。丸亀市教育委員会が東側隣接地での発掘調査にともない実施した自然科学分析でも、「調査区の近くに森林（照葉樹林）が迫っていた」（渡辺2021）ことが明らかになっている。本調査区内に遺構が希薄な状況と合わせて考えると、当該期の沖遺跡周辺は、森林に近接した水田耕作地であった可能性が考えられる。

なおSD3019、SD3020、SR3001から出土した土師器は、他遺構出土の土師器と比べ磨滅が少なく、

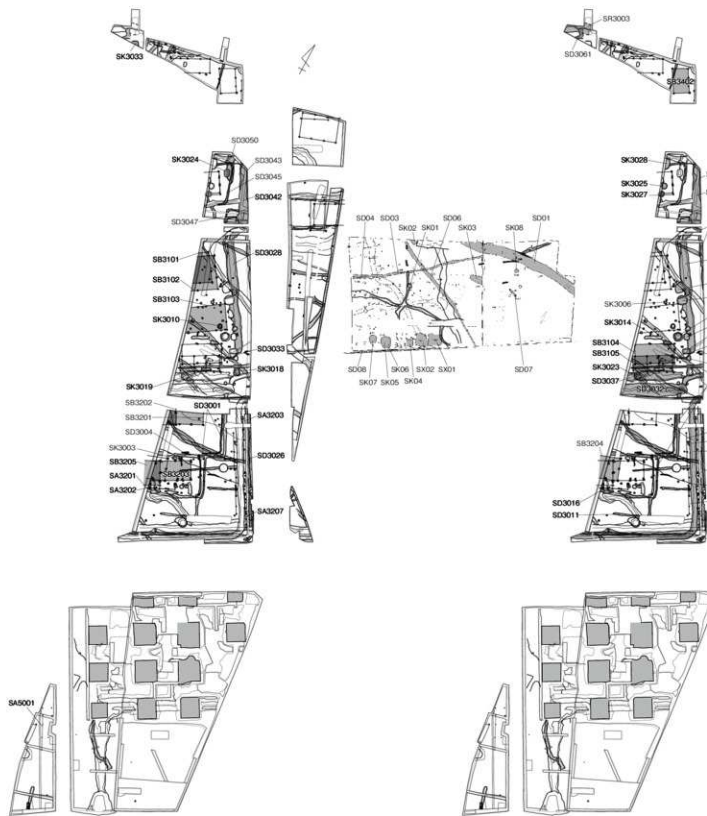


第 226 図 遺構変遷図 (1)



③ 中世前期





④中世後期

⑤近世前期

付近に居住域が存在した可能性も想定できる。

中世前期

3-2区で条里坪界溝と推定されるSD3013・SD3014が開削される。SD3014断面の土層には埋没後に再掘削を繰り返した痕跡が認められるが、上層・下層出土土器に大きな時期差は認められず、比較的短期間に埋没と再掘削が繰り返されたと考えられる。

1-1区では庇付きの掘立柱建物であるSB1002を検出した。出土土器より12世紀前半の時期が想定される。1～3区で検出した柱穴群中にも12～13世紀の遺物を伴うものが複数認められるほか、丸亀市調査区においても同時期の柱穴が多数検出されている。付近にSB1002以外にも建物が存在した可能性が高いと思われ、当該期の沖遺跡は居住域として利用されていたものと考えられる。

中世後期

市道名沖線西側に掘立柱建物群が出現し、中世前期以前と比べて遺構数が大きく増加する。

3-3区では条里坪界溝に相当するSD3042が開削されたと考えられる。近接した位置には掘立柱建物SB3301が存在し、その周囲を区画するSD3045が開削される。同様に、3-1区でも、掘立柱建物SB3101～SB3103とそれを囲繞するSD3028が検出された。

また、SB3101とSB3102、SB3104とSB3105は重複して検出されており、2～3回程度の建て替えが想定できる。一定期間居住域としての利用が継続したと考えられる。

近世前期

当該期では、3-2区において建物を区画するSD3005が検出されており、SB3201～SB3205を囲繞していたと考えられる。SD3005の北側には中世後半～近世前期と推定されるSD3001・SD3004が検出された。SD3001・SD3004は、SD3005と平行するように検出されており、SD3005に先行する区画溝の可能性が高い。区画溝や建物の重複から、長期間の居住域としての利用が考えられる。また3-2区では条里型地割の推定坪界線に並行するSD3007が検出されている。

一方、中世後期の掘立柱建物が検出された3-1区・3-3区ではSD3028、SD3042が完全に埋没する。当該期以降、3-1区、3-3区では溝と土坑が主体となる。

近世後期

建物遺構は、2-3区でSB2001を検出したのみであり、当該期の遺構は土坑が主体である。近世前期と比べ、遺構数は大きく減少する。

第3章第3節でも記載したが、旧耕作土(B層)より近世後期の遺物が出土した。また、5区でB層に相当する7層からは、多量のプラント・オパールが検出された。当該期に相当する畦畔などの水田遺構に伴う遺構は検出されていないものの、水田耕作が営まれていた可能性は高い。近世後期以降に集落が移動・廃絶し、耕地化が進んだものと考えられる。

引用文献

渡辺正巳 2021 「沖遺跡発掘調査に伴う自然科学分析」『飯山南コミュニティセンター移設に伴う発掘調査報告書 沖遺跡』丸亀市教育委員会

第2節 沖遺跡周辺における条里型地割の展開

沖遺跡の調査では、条里型地割の推定坪界線付近で複数条の溝を検出した。沖遺跡の周辺には、前述の通り、現代の道路・用排水路が概ね100～120m間隔で網目状に配されており、条里型地割の痕跡と理解されてきた。また、周辺での過去の発掘調査でも、これらの地割に関連すると考えられる溝等が、複数検出されている。本節では、土器川東岸・大東川中流域の平野部を中心にこれまでの発掘調査等において確認された条里関連遺構を抽出し、条里型地割の施工・展開について、現時点での整理と見通しの提示を試みる。

坪界溝の出現と展開

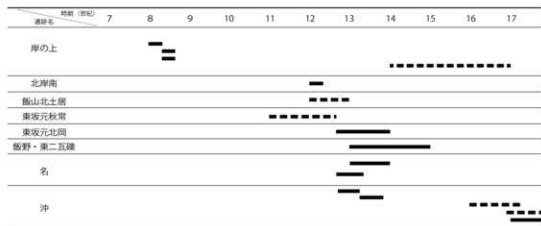
周辺の各遺跡での発掘調査成果から、条里坪界溝と推定される遺構を抽出したものが第27表である。なお、抽出にあたっては金田章裕による歴史地理学的検討(金田1988)をもとに、金田による推定坪界線に近接する位置で検出された溝のうち、主軸方向がN25°W～N35°WまたはN55°E～N65°Eを測り、出土遺物・遺構の重複関係から時期の絞り込みが可能なものを対象とした。

岸の上遺跡では、8世紀前半に推定南海道南側に道路側溝と考えられる溝SD3003が出現し、8世紀中葉から後半に埋没するSD3001・SD3002まで、ほぼ同位置に溝が掘削される。9世紀以降には明確な坪界溝は認められないが、中世後半期と推定されるSD5001など条里方向に並行する小溝は複数条検出されており、中世以降まで条里型の土地区画が継続するものと考えられる。

一方で、岸の上遺跡北側・南側の各遺跡では、8世紀代に遡る条里並行方向の溝は確認できていない。約300m北に位置する北岸南遺跡では、南北方向の推定坪界線に並行する最古の溝はSD12で12世紀前半、さらに北方の飯山北土居遺跡・東坂元秋常遺跡・東坂元北岡遺跡・飯野・東二瓦礫遺跡では、出土遺物の少なさからやや時期が判然としないものの、12世紀～13世紀前半となる。岸の上遺跡南方でも同様の傾向がみられ、約800m南方の名遺跡、約1.2km南方の沖遺跡では、検出された条里並行方向の溝はいずれも、12世紀後半以降に位置づけられる。検出された溝の年代観のみをみれば、旧南海道に接する岸の上遺跡以外では、条里型地割の施工が12世紀代まで遅れる可能性が考えられる。

しかし、推定坪界線上は現在も道路・水路として利用されており、それらの直下は十分な発掘調査を実施できていない。現状では、現道・水路直下に12世紀以前に遡る溝が存在する可能性も否定できず、

第27表 沖遺跡周辺における推定条里坪界溝の展開



溝のみから各遺跡での条里型地割施工の開始時期を特定することは難しい。

掘立柱建物の主軸方向の変化

上記問題の解消を目的に、各遺跡における掘立柱建物の時期と主軸方向を整理したものが第28表、第229・230図である。

岸の上遺跡では、7世紀以前の掘立柱建物群の主軸は概ね正方位にまとまるが、8世紀前半以降はすべての建物が条里並行方向へと転換する。その転換の時期は、南海道の道路側溝と推定されるSD3003の出現時期と重なる。条里地割の整備に連動して条里区画内の建物配置も再編され、建物主軸が統一されたことが推定できる。

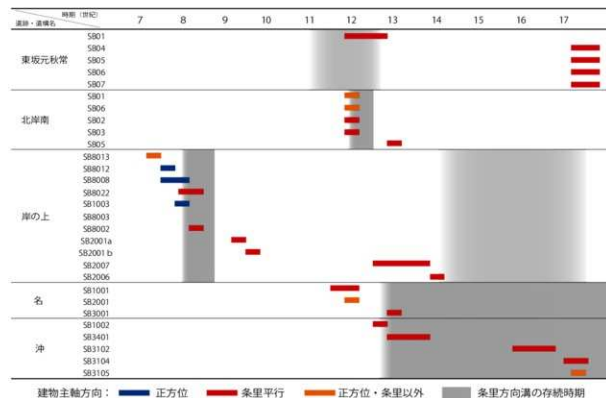
北岸南遺跡・名遺跡では、12世紀前半以前は条里並行方向・地形の傾斜に並行する南西—北東方向の建物が混在する。しかし、12世紀後半には、いずれの遺跡でも建物主軸は条里方向のみに統一される。条里地割の整備と区画内の建物主軸の統一が連動すると仮定すれば、南海道周辺での条里地割は8世紀前半に整備されるが、その整備は大東川中流域の平野全域には及ばず、南北周辺域では12世紀中葉から後半にかけて条里地割に並行する土地区画の整備が行われたものと理解できる。

沖遺跡での各遺構の状況を見ると、条里並行方向の溝はその後数回の再掘削を経て17世紀中葉まで継続しており、中世後半から近世前半期の建物群の主軸方向も条里並行方向が維持される。

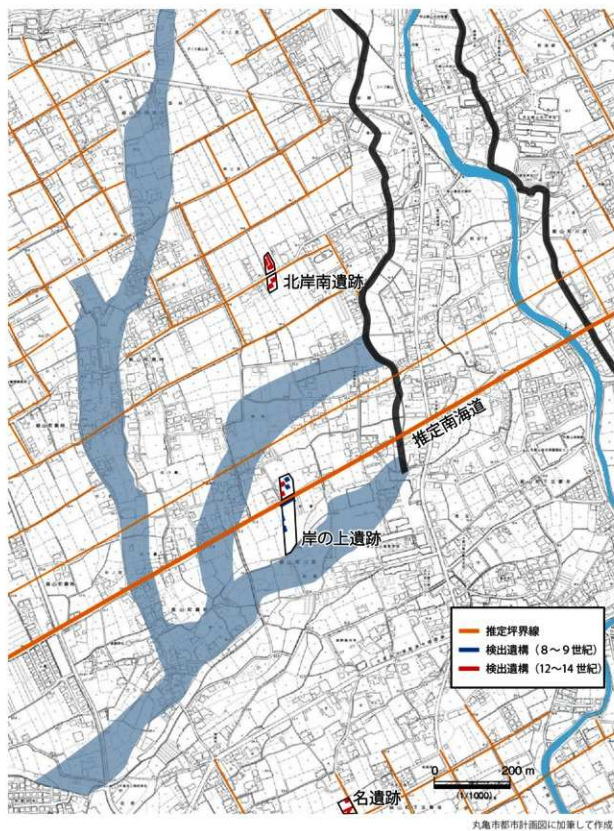
条里地割施工の遅れの背景

現代の地割をみると、名遺跡北側には東西方向の明らかな地割の乱れが認められ、旧土器川の河道が存在した可能性が指摘される（木下1991ほか）。また、沖遺跡でのSR3001～3004をはじめ、周辺の各

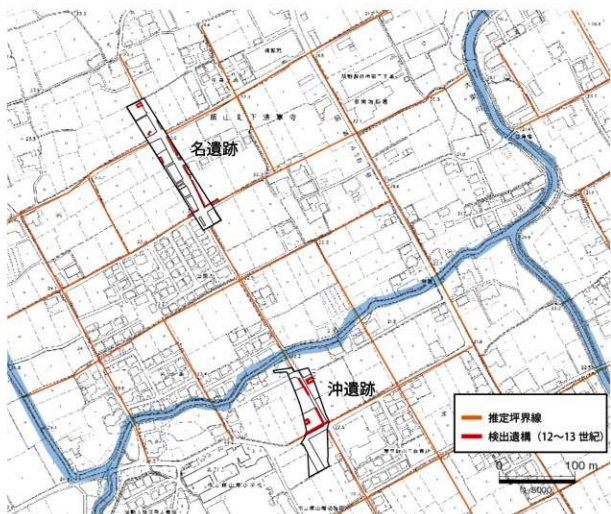
第28表 沖遺跡周辺における掘立柱建物主軸方向の変遷



遺跡で東西方向の埋没河川が複数検出されている。これまでの発掘調査から、これらの河川はいずれも、古代から中世初頭にかけて順次埋没したことが明らかとなっている。また、埋没河川に挟まれた微高地上に位置する岸の上遺跡・北岸南遺跡付近では南北方向の推定坪界線がN25°~26°Wにまとまるのに対



第229図 岸の上遺跡周辺の推定条里坪界線と溝・掘立柱建物の配置



丸亀市都市計画図に加筆して作成

第 230 図 沖道跡周辺の推定条里界線と掘立柱建物の配置

して、推定旧河道を越えた北側では $N30^{\circ}W$ 前後を測るなど、旧河道を境に条里南北軸の方角のずれが認められる。旧河道で区切られた範囲毎に、条里地割施工のタイミングが異なる可能性が考えられる。

沖道跡周辺での条里型地割施工の遅れの背景には、こうした埋没河道・低地が広がることによって土地区画の整備が困難であったなど、当時の土木技術の限界が影響した可能性が考えられる。その後、河床の低下と埋没河川化、それに伴う周辺低地の高燥化が進行した 12 世紀後半から 13 世紀にかけて、条里型の土地区画整備をはじめとした積極的な土地開発が開始されたものと理解できる。

これまでの整理・検討から、沖道跡周辺に残る条里型地割は、12 世紀中葉から後半にかけて整備が開始され、その後、中世・近世と地割が維持されながら、現代まで至るものと推定した。一方で、現在までに発掘調査が実施された範囲は、大東川中流域の平野部のごく一部に留まり、検討対象とした遺構数も極めて少ない。未調査地点に 12 世紀前半以前の条里界溝が存在する可能性も否定できない。今後、国道 438 号の供用開始により周辺地域での開発事業が増加するものと予測でき、それらの事業に伴う発掘調査事例の増加をまって再検証する必要がある。

参考文献

大久保徹也 1990 「下川津道跡といわゆる条里地割について」 香川県埋蔵文化財調査センター編『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発

- 掘調査報告Ⅶ「下川津遺跡」香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
- 金田章祐 1988「桑畑と村落生活」香川県編『香川県史1 通史編 原始・古代』四国新聞社
- 木下晴一 1991「桑畑型地割施工以後の地形変化」『香川理学会会報 No.11』香川県地理学会
- 森下英治 1997「丸亀平野桑畑型地割の考古学的検討」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第3節 「特徴的な」土師質土器碗の分布と展開

沖遺跡の発掘調査では、12世紀から13世紀代の溝を中心に、比較的多量の土師質土器片が出土した。これらの大部分は、既存の土師質土器の編年研究（佐藤 2000 ほか）を援用することで時期等の理解が可能なものであるが、一部にそれらの先行研究事例にあてはめられない形態のものが認められる。

本項では、それらの特異な土師質土器について、他遺跡での出土事例を集成し、整理と検討を試みたい。

沖遺跡 SD3014 出土の土師質土器碗

1は、SD3014埋土中より出土した土師質土器碗(199)である。杯形の体部に高台が貼り付けられた器形で、体部と底部の境には明瞭な屈曲が認められる。体部上半の形状は欠失しており不明だが、下半部外面の屈曲付近には強い回転ナデによる凹凸が認められる。内面は前述の回転ナデに対応する回転ナデの痕跡は認められるが磨減が著しく、見込みの調整は判然としない。底部はヘラ切りと推定され、板目圧痕の有無は欠損により不明である。高台は断面逆三角形で、底部外縁から1cm程度内側に貼り付けられる。高台畳付および底部外縁から径を復元すると、高台径の中心は底部径の中心から1cm前後ずれるものと推定される。

胎土はにぶい褐色で、砂粒は1mm未満と細かく、ごく少量の赤色粒と金雲母片が認められる。焼成はきわめて良好で、よく締まって硬質である。

出土位置は3-2区SD3014埋土中であるが、取上げ日からトレンチ掘削中と推定され、細分層位は記録されておらず不明である。SD3014埋土中の他の出土遺物から推定すれば12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。

1と沖遺跡での同一遺構中の土師質土器とを比較すると、形状はもちろん、胎土も明らかに異なる。他の土師質土器はいずれも、胎土に径1mm前後の砂粒を比較的多量に含み、雲母片も認められない。胎土からすれば、その他の土師質土器とは原料粘土採取地が異なる、もしくは製作地・製作集団が異なる可能性が考えられる。

2は、SD3039より出土した土師質土器碗(51)である。底部のみの小片のために全形は不明だが、底部外縁の破断面付近で屈曲を始めるものと推定できる。内外面ともに磨減と鉄分の沈着により調整は判然としないが、内面見込みに回転ナデによる強い凹凸は認められない。高台は畳付付近が欠損するが、断面三角形と考えられる。

胎土は1と類似し黄褐色で、1mm未満の細砂粒と少量の雲母片が認められる。

出土位置は2-2区SD3039埋土中であるが、同溝は流路方向から古墳時代以降古代以前と考えられ、共存する遺物はいずれも弥生土器の小片である。2は混入の可能性が高く、遺構および共存遺物からの時期の推定は困難である。

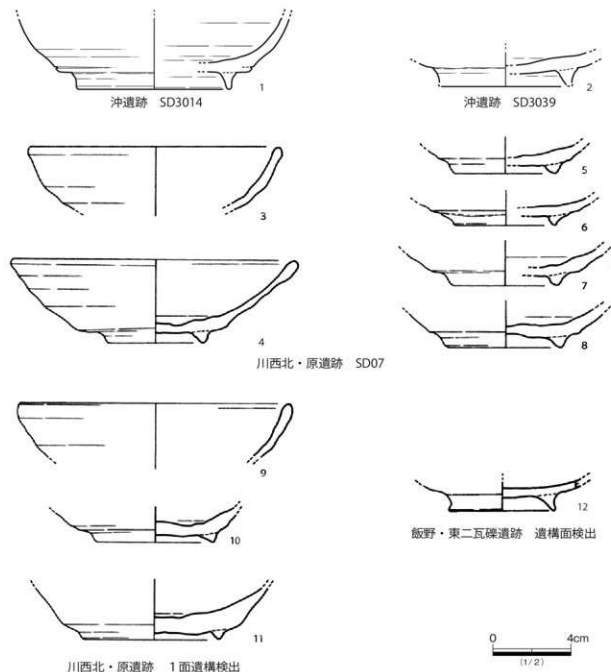
香川県内での類例

香川県内の古代後半から中世前半期の各遺跡で、類似した形態の土師質土器碗の出土事例を集成したものが第231図・第29表、それらの分布を図示したものが第232図である。

川西北・原遺跡(3～11)

12世紀末から13世紀前葉と推定されるSD07より6点、近世以降の耕作土中より混入資料と考えられるもの3点が認められる。

特徴については、報告書中に詳細に記載されるために省略するが、坏形の体部に高台を有し、体部と底部の境に明瞭な屈曲が認められる点、ヘラ切り後に屈曲点の1cm前後内側に高台が貼り付けられる点は沖遺跡例と共通する。一方で、川西北・原遺跡例は見込みに回転ナデによる凹凸が明瞭に残り、高台は畳付の潰れた断面三角形である。また、胎土は径1mm前後の砂粒を比較的多量に含み、赤色粒および雲母片は認められない点、焼成が甘く表面が粉状化する点も、沖遺跡例とは明らかに異なる。



第231図 特徴的な土師質土器椀

第29表 香川県域における出土事例一覧

番号	相文番号	出土遺跡名	所在地	出土遺構	出土遺構時期	色調	口径	底径	器高	高台径	高台高	
1	199	沖	丸亀市飯山町上法軍寺	SD3014	12世紀後半～13世紀前半	にぶい濁	-	7.8	-			
2	51			SD3009	古墳時代 (中世前半遺物が混入)	黄濁	-	8.6	-	6.6	0.9	
3	30	川西北・原	丸亀市川西町北	SD07	12世紀末～13世紀前半	灰白	12.8	-	-	-	-	
4	31				12世紀末～13世紀前半	灰白	14.4	7.5	4.5	4.9	0.6	
5	32				12世紀末～13世紀前半	灰白	-	6.4	-	5.2	0.8	
6	33				12世紀末～13世紀前半	灰白	-	7.4	-	5.0	0.5	
7	34				12世紀末～13世紀前半	灰白	-	7.7	-	5.4	0.6	
8	35				12世紀末～13世紀前半	灰白	-	7.6	-	5.7	0.6	
9	47				近世以降	浅黄橙	14.0	-	-	-	-	
10	48			耕作土 (混入か)	近世以降	浅黄橙	-	7.4	-	6.1	0.5	
11	49			近世以降	浅黄橙	-	8.9	-	6.9	0.5		
12	507			飯野・東二瓦礫	丸亀市飯野町東二	遺構面検出時 (包含層)	弥生、古代・中世遺物が混在)	浅黄	-	6.1	-	

飯野・東二瓦礫遺跡(12)

遺構面精査時に1点が出土しているが、詳細な時期は不明である。

体部と底部の境界は明瞭に屈曲するものと考えられるが、屈曲点付近に高台が貼り付けられており、判然としない。磨減と器表面の剥落により、調整は内外面ともに判然としないが、体部内外面、見込み付近は回転ナデと推定される。底部はヘラ切り後に指ナデまたは板等により平滑化したものと考えられる。高台は断面台形で小さい。詳細な形状は沖遺跡例、川西北・原遺跡例とは相違点が多いものの、杯形の体部に高台を有する点を重視し、抽出した。

胎土は赤褐色系で砂粒も細かく、赤色粒・雲母片は認められない。焼成は沖遺跡例と類似し、良好でよく締まる。

特徴的な土師質土器碗の分布と展開

以上、これまでの香川県内での発掘調査事例から類例を探索した結果、3遺跡12点を確認した。いずれも12世紀前半から13世紀前半までの短期間に集中し、分布は丸亀平野の土器川付近から大東川流域の狭い範囲に集中する。限定された地域・時期にのみ認められる在地的な強い土師質土器の可能性も考えられる。また、沖遺跡例、川西北・原遺跡例に顕著なように、これらの胎土・焼成は遺跡ごとに特徴が大きく異なる。器形・製作技法は共有しつつも、原料粘土の採取地・製作地は異なっている可能性がある。高松平野・丸亀平野の土師質土器については、特に皿・杯において形態・法量・製作技法ともに概ね近似した属性をもつことが指摘されている(佐藤2000)。今回確認した土師質土器碗は、高松平野・丸亀平野におけるそれら「一般的な」土師質土器とは明らかに異なる形態・製作技法であり、多量の「一般的な」土師質土器と共に出土している。今後、土師質土器の生産や流通、生産地・形態の異なる土師質土器の使い分け等を検討する上で、重要な資料となる可能性がある。



地理院地図（電子国土WEB）にて色別標高図・陰影起伏図を改変・加筆して作成

第232図 出土地点分布図

しかしながら、現時点では事例数があまりに少なく、分布・展開とその背景を十分に検討することは困難である。今後、国道438号の改築に伴い、沖遺跡南側の沖南遺跡や岡田台地上の各遺跡での発掘調査が進展するものと見込まれ、周辺地域での類例の蓄積によりさらなる検討が可能となることを期待したい。

参考・引用文献

- 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第20冊 飯野・東二瓦礫遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2000『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第35冊 川西北・原遺跡府中地区』日本道路公団・香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2003『高松平野と周辺地域における中世土器の編年』『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

第4節 沖遺跡出土の土師質土器火鉢について

1. はじめに

本遺跡では、中世から近世の遺構が検出され、その中から土師質土器火鉢と考えられる口縁部片、脚部を伴う底部片が出土した。出土した遺物は深鉢に三脚を伴う形の火鉢であり、同様の形態の火鉢は、松本和彦の研究²¹によると高松城様相1から様相3まで確認され、様相5で姿を消す。

本稿では、現在までに香川県下の発掘調査で出土した火鉢について集成し、現在までの県下での出土をまとめる。続いて、実現できる土師質土器火鉢の中で底部及び脚部を持つものと沖遺跡で出土した火鉢について変異幅と連続性、現段階までの深鉢形の火鉢についてまとめる。

2. 香川県下出土の火鉢

香川県下では96遺跡、352点の火鉢が出土している。

最も多く出土しているのは土師質土器の火鉢である。集成した中で最も年代が古いものは、誉水中筋遺跡と南天枝遺跡でどちらも口縁部の出土のため、全形は不詳である。誉水中筋遺跡では、13世紀頃の火鉢底部が出土しているが脚部が付属するような記載はない。脚部のついた火鉢が出土するのは、下川津遺跡の室町時代の遺構からである。16世紀までで49点の土師質土器の火鉢が集成され、出土場所は東は東かがわ市から西は三豊市と広く、集落遺跡からの出土である。近世に入ると、高松城や丸亀城、それらに伴う城下町からの出土数が急増する。他方高松平野の農村部に位置する中間西井坪遺跡でも近世後半期遺構にまとまった点数の出土が確認される。土師質土器の火鉢は近代に入っても、最多の出土数を誇る。この頃になると農村部での出土が中心になる。

一方、瓦質土器製の火鉢は16世紀までで9点出土が確認されている。その中には大和で生産され流通した奈良火鉢が出土しているが、口縁部や体部片のため全形を確認できるものはない。近世に入ると土師質土器の火鉢同様出土数は増加するが、高松城下からの出土数が大多数を占めている。城下以外では、高松平野の農村集落である空港跡地遺跡や、丸亀平野の農村集落である郡家田代遺跡からも10点未満であるがまとめて出土しており、農村部への広がりも認められる。

陶器製の火鉢の報告は18世紀からみられる。出土場所は高松城跡を中心として空港跡地遺跡、新田本村遺跡、川津六反地遺跡、郡家一里塚遺跡など農村集落からの出土も確認できる。

3. 変異幅と連続性

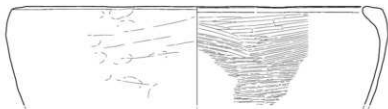
底部と底部に脚部が付属したものを対象として、形態・技法の変化を観察し、型式学的変遷を検討した。今回検討対象とする火鉢の脚部は大きく、断面が楕円～円形を呈するものと長方形を呈するものがあり、前者を1類型、後者を2類型とした(第235図)。

3.1.1 類型

1類型を通して、形態の変化は乏しい。1、2では断面が楕円形状の脚部が付され、底部外面の屈曲部では明確な稜が作り出される。底部内面では屈曲部に板ナデで調整した跡が確認できる。3～7ではほぼ円形を呈する脚部が付される。底部外面の屈曲は弱くなり稜も不明瞭になる。底部内面では弱くなった屈曲部を指ナデする。8、9に関しては、底部の欠損が多く、不明な部分もあるが、円形の脚部が付され、



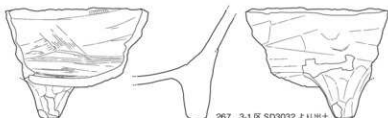
74 3-1区 S83104 より出土



96 3-1区 SK3011 より出土



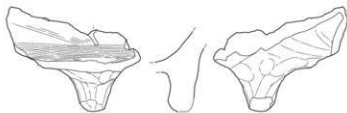
258 3-1区 SD3032 より出土



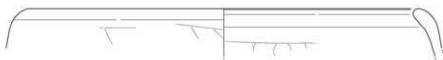
267 3-1区 SD3032 より出土



268 3-1区 SD3032 より出土



326 3-1区 SD3037 より出土



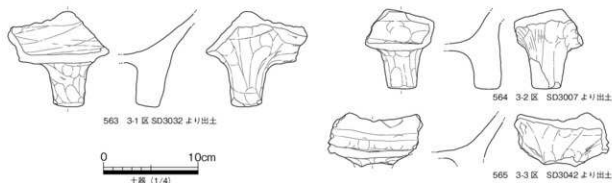
408 3-3区 SD3050 より出土



562 3-1区 SD3032 より出土



第 233 図 沖遺跡出土の火鉢 (1)



第234図 沖遺跡出土の火鉢(2)

体部内面の屈曲が弱くなり、ナデなどの調整も確認しにくくなる。

形態と技法の関連については以下のように考える。1、2では、ほぼ台形状を呈する脚部を、体部、底部ともに接合面を広げるために、脚部を中心に広範囲にわたってナデることによって接合させる。3～6では脚部の形状は変化しないが、体部に接する部分が小さくなりナデる範囲も狭くなる。7～9では、円柱状の脚部を体部と接合させる。ナデの範囲も脚部の幅ほどになる。

3-2.2 類型

2 類型で対象とする中森遺跡（香川県教育委員会ほか 2004 h）、高松城跡（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999）から出土した火鉢は、器高が低く深鉢形ではないが、脚部の断面形が長方形を呈することから、本稿では2 類型として検討を行った。

1、2では脚部端部と体部の接合面の幅が2倍以上ある台形状の粘土板を脚部とする。2では底部が確認できないが、1は底部に明確な稜が作り出されている。3は台形状ではあるものの脚部端部と体部の接合部分の幅の差がなく、ほぼ長方形を呈する粘土板を脚部とする。体部と底部に明確な境界がなく、稜も不明瞭である。4、5では、1～3と比較すると器壁と脚部の厚みが厚くなり、脚部も横幅の広い長方形を呈する。稜も不明瞭である。

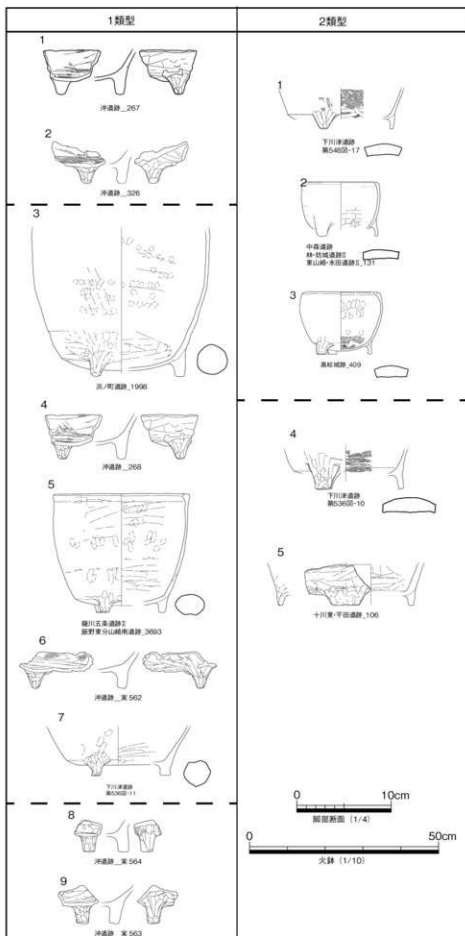
形態と技法については、1～5に共通して脚部を接合させるため、体部を指オサエしたのち体部から脚部にかけてナデを行う。その後、脚部側面から底部まで面取りを行う。5は側面を指でナデることによって面取りを行う。

今回の検討では、脚部の断面形で分類を行った。しかし、4、5に関しては1～3と比較すると、器壁、脚部の厚さ、脚部の形態も大きく異なる。4と5でも脚部の位置が4では体部屈曲部に脚部が付されるのに対し、5では1～3と同じように底部に脚部が付されるという違いもある。今回検討した資料数では違いがあることはわかるが、それが変化によるものなのか、2 類型の中でさらに細分されることに起因するのかまでは判断できない。

4. 現段階での深鉢形火鉢

4.1 対象外の深鉢形火鉢

今回実見できた遺物以外にも、普通寺陣所跡（普通寺市教育委員会 2004、近世）、特別史跡讃岐国分寺跡の僧房跡地区第2層（高松市教育委員会 2020b、18世紀前半以降堆積）、高松城（江戸長尾跡）SK101・



第 235 図 土師質土器火鉢の変遷表

SX101(高松市教育委員会 2009、18世紀第3四半期～19世紀)がある。これらは様相5に相当すると考えられる。また、延命遺跡城岡地区 SP15(香川県教育委員会ほか 1990b)は、1類型、2類型ともに当てはまらなかったため対象外とした。延命遺跡出土の火鉢は、脚部断面が楕円形を呈し、底部に明確な屈曲があり、内面は屈曲に沿うようにしてナデる。底部の特徴としては1類型1、2と共通しているが、脚部が底部下面につき、接合のためのナデを底部中心に行い、体部に接合のためのナデの痕跡が確認できないことは特異点である。

4.2. 深鉢形火鉢の系譜

火鉢から共伴して出土した遺物をまとめたのが第31表である。ここに先ほど型式の変遷のみで順に番号を振ったものをいれると、1類型は近世的様相、2類型には中世的様相に偏る。1類型の中で下川津遺跡 SD IV 01 出土の土器だけ外れるが、SD IV 01 からは染付碗の出土もあり、それらと同じように埋土の中に入ったと理解している。松本氏は、深鉢形火鉢の系譜は中世段階からの系譜で理解できるとし、空港跡地遺跡 IV (SDf57、1類型)、西打遺跡 (SD01、2類型) 出土の土器をあげている。1類型に分類できる空港跡地遺跡 IV のものは、今回着目した底部の屈曲が強く、内面の板ナデがはっきりと確認できることから、1類型の1よりも前の段階に位置づけられる。

一方西打遺跡の資料も2類型の1より前に位置づけられるが、2類型の1は脚部が若干湾曲しているのに対し、西打遺跡の資料は垂直にのび、2類型の4に近い形態を持つ。このことから、2類型の4と西打遺跡出土の火鉢は2類型の中でも別の系譜の可能性もある。また、垂直に伸びる脚部と、器厚や脚部の厚みを鑑みれば、2類型の5の祖型に近い可能性も考えられるであろう。

さいごに

本稿では、脚部を有する深鉢形の土師質土器火鉢の形態と、少しであるがその系譜について述べた。検討対象を脚部を有する底部に限定したため、資料数が少なく系譜に対する言及はできなかったが、中世から近世までの間で県下で確認できる2類型の脚部を持つ火鉢の形態についての提示はできたと考えられる。

今回の検討では、形態に着目したため胎土や産地に対する言及ができなかった。また、脚部の形態についてもその違いの原因についても不明な点が多く、火鉢だけ検討しても解決しないと考えている。今後は脚部を持つ土師質土器にも検討を広げることで、脚部の形態の違いについて言及できるだろう。

本文註

1 松本和彦 2003 「4 香川県における火鉢・焔類の動向」『第5回四国城下町研究会 四国と周辺の土器Ⅱ—火鉢・焔類にみる流通と生活形態—』

引用・参考文献

佐藤竜馬 2003 「近世在地土器の検討」『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
 松本和彦 2003 「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第 32 表 火鉢類表(1)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
勝門跡西遺跡	東かすむ市白鳥	268	Ⅷ区 SX01	瓦質火鉢	14 世紀末～15 世紀前半	口縁部	奈良火鉢 刷印あり	香川県教育委員会ほか 2004a
		269	Ⅷ区 SX01	土師質火鉢	14 世紀末～15 世紀前半	体部		
		270	Ⅷ区 SX01	瓦質火鉢	14 世紀末～15 世紀前半	口縁～体部	奈良火鉢浅鉢形	
成東遺跡 1	東かすむ市白鳥	253	SX06	土師質火鉢	近世	底部		香川県教育委員会ほか 2004b
		282	包含層	土師質火鉢	近世	口縁～底部	脚部あり 浅鉢形	
		285	包含層	瓦質火鉢	近世	体～底部	脚部なし 刷印あり	
田中遺跡	東かすむ市白鳥	186	SK03	土師質火鉢	18 世紀後半～19 世紀前半	底部	脚部なし 刷印あり	香川県教育委員会ほか 2017a
谷遺跡	東かすむ市谷	265	包含層	土師質火鉢	不明	脚部		
川北遺跡、三股出口遺跡	東かすむ市小港、三股	131	遺構外出土 (三股出口)	土師質火鉢	中世	口縁部	刷印あり	香川県教育委員会ほか 2004c
三股北遺跡	東かすむ市三股	608	包含層	土師質火鉢	近世?	体部		香川県教育委員会ほか 2004d
喜水中坊遺跡	東かすむ市中坊	111	柱穴	瓦質火鉢	中世	蓋		香川県教育委員会ほか 2003a
		600	SE01	土師質火鉢	12 世紀末～13 世紀前半	口縁部		
		646	SD11	瓦質火鉢	中世	口縁部	奈良火鉢 刷印あり	
		677	SD12	瓦質火鉢	中世	体部		
		994	SD39	土師質火鉢	13 世紀前半～中世	底部		
		1105	SD44	土師質火鉢	中世	脚部		
原田遺跡 1	東かすむ市川東	1106	SD44	土師質火鉢	中世	脚部		
寺田、産宮遺跡、南大柱遺跡	さぬき市大町 木田部三丁目	34	SK II 02	土師質火鉢	近世	口縁～底部	脚部あり 浅鉢形	香川県教育委員会ほか 2002
		212	溝谷 (溝大後)	土師質火鉢	12 世紀～13 世紀?	口縁部		香川県教育委員会ほか 2003a
		103	SE01	土師質土器	不明	口縁部	火鉢か?	さぬき市教育委員会 2007
森丘遺跡	さぬき市瀬川町	493	SE03	土師質火鉢	15 世紀後半期	口縁部		香川県教育委員会 2008a
		494	SE03	土師質火鉢	15 世紀後半期	口縁部		
		615	SD04	土師質火鉢	中世以後	口縁～底部		
尾崎西遺跡	さぬき市長尾東	457	SD13 (西久保谷)	火鉢	17 世紀中期以降?	脚部	貫不詳	香川県教育委員会 2005
		523	包含層 (西久保谷)	土師質火鉢	不明	脚部		
		4	SD01 (大蔵)	土師質火鉢	16 世紀後半～末	口縁部		
花池尻北遺跡、原久保谷遺跡	さぬき市北原 三農市三丁目	254	同調査	土師質火鉢	19 世紀	底部	円筒形	高松市教育委員会 2007a
西国橋新白鶴市道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報	高松市、大田部							香川県教育委員会ほか 2000b
原島寺	高松市原島東町							高松市教育委員会 2007a

第 33 表 火鉢類調査表(2)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
前田東一・中村遺跡	高松市前田東町	105	B4区 SX02	瓦質火鉢?	近世	体-脚部		香川県教育委員会は少-1965a
		695	C4区 SX01	土師質火鉢	中世	内部施設		
		698	C4区 SX01	土師質火鉢	中世	体部		
		2142	包含層	土師質火鉢	室町時代	口縁-底部	類印あり	
空母跡地遺跡Ⅰ	高松市林町	2143	包含層	土師質火鉢	室町時代	口縁部	類印あり	香川県教育委員会は少-1965a
		2144	包含層	土師質火鉢	室町時代	体部		
		2145	包含層	土師質火鉢	室町時代	体部	類印あり	
		2146	包含層	土師質火鉢	室町時代	底部	類印あり	
空母跡地遺跡Ⅱ	高松市林町	941	SKc40	陶器火鉢	18世紀後半以降	口縁-底部	脚部なし	香川県教育委員会は少-1957a
		978	SDc10	瓦質火鉢	18世紀	口縁部		
		288	SP376	土師質火鉢	江戸時代以降	口縁-底部	浅鉢形	
		321	SE005	土師質火鉢	19世紀以降	体-脚部	類印あり 浅鉢形	
空母跡地遺跡Ⅲ	高松市林町	652	SD41	陶器製瓶 脚火鉢	19世紀代	底部		香川県教育委員会は少-1968a
		670	SD41	瓦質火鉢?	不明	口縁部		
		757	SD43	瓦質火鉢?	不明	口縁部		
		805	SX05・SX06	瓦質火鉢?	不明	体-底部	浅鉢形	
空母跡地遺跡Ⅳ	高松市林町	1341	SD49	土師質火鉢?	近世?	口縁部		香川県教育委員会は少-2000b
		1969	SD92	瓦質火鉢	近世-近代	不明	平面方形	
		1996	SD95	瓦質火鉢	近世-近代	口縁-底部	体部円筒形	
		2241	包含層	瓦質火鉢	近世-近代	口縁-体部		
空母跡地遺跡Ⅴ (G地区)	高松市林町	801	SDg29	土師質火鉢	19世紀以降	完整	体部円筒	香川県教育委員会は少-2000b
		865	SDg29	瓦質火鉢	20世紀以降	体部-脚部		
		870	SDg29	瓦質火鉢	21世紀以降	体-底部		
		871	SDg29	瓦質火鉢	22世紀以降	体-底部	平面円形	
空母跡地遺跡Ⅵ	高松市林町	1061	SKg783	土師質火鉢	19世紀中葉	完整	浅鉢形	香川県教育委員会は少-2000b
		1516	SKg86	瓦質火鉢	近代	口縁部		
		672	SKd128	土師質火鉢	江戸時代以降	体-脚部		
		1760	SDg70	土師質火鉢	江戸時代以降	口縁部		
空母跡地遺跡Ⅶ	高松市林町	648	SKb072	瓦質火鉢	19世紀後半-末	脚部	脚部(あり)	香川県教育委員会は少-2004c
		704	SKh116	土師質火鉢	幕末	口縁部		
空母跡地遺跡Ⅷ	高松市林町	712	SKh119	土師質火鉢?	19世紀前半以降	口縁部		香川県教育委員会は少-2004d

第34表 火鉢観察表(3)

遺跡名	所在地	報告文書番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
型港跡遺跡(Ⅰ地区)	高松市林町・新町	55	SE01	土師質火鉢	18世紀後半～19世紀前半	口縁部		香川県教育委員会ほか、1997b
		122	柱穴	土師質火鉢	18世紀末～19世紀前半	口縁部		
宗高古城遺跡	高松市林町	17	SD01	瓦質火鉢	遺の直前は江戸時代、 廃家は18世紀以降	体部		高松市教育委員会 2004a
		18	SD01	瓦質火鉢		口縁部		
		19	SD01	瓦質火鉢		底部		
		22	SD01	土師質火鉢		脚部		
		20	SK105	瓦質火鉢	近世末～近代	口縁～脚部	平面方形	
山佐城跡	高松市香蒲町	42	溝	土師質火鉢	近世	体部～脚部	漆塗りの可能性あり	高松市教育委員会 2014
		181	SD24 (池内古田)	土師質火鉢	18世紀後半～19世紀中葉	口縁部		香川県教育委員会 1997
高松城跡(大手前地区 城内中子役跡地)	高松市五葉町	36	SF104	陶器製火鉢	19世紀後半～20世紀中葉	ほぼ定形		香川県教育委員会 2023
		290	G層	土師質鉢	17世紀後半	体～脚部		
		291	G層	瓦質脚付鉢	17世紀後半	口縁～底部	脚部あり 瓦鉢彩	
		33	舞台出土	陶器製火鉢	19世紀	体部		
史跡高松城跡地及舞台 発掘調査概報 白田整備)	高松市五葉町	33	文蔵遺土	瀬戸瓦葺陶器系 火鉢?	19世紀?	体部		高松市教育委員会ほか、2016a
		409	包含層	土師質火鉢	16世紀末～17世紀初頭	定形		
史跡高松城跡(旭久舞台 白田整備)	高松市五葉町	1621	SK33	土師質火鉢	幕末～明治初期	口縁部		香川県教育委員会ほか、1999a
		304	南瀬戸石垣 築石層	土師質火鉢	不明	脚部		
高松城跡 瀬戸石垣調査・ 保存整備工事報告書	高松市五葉町	128	SE02	土師質火鉢	17世紀後半～18世紀前半	口縁部		高松市教育委員会ほか、2007b
		129	SE02	土師質火鉢	17世紀後半～18世紀前半	脚部		
		149	SE03	瓦質火鉢	19世紀末	口縁～底部	瓦鉢彩	
		257	SE07	瓦質火鉢	17世紀前半～18世紀前半	口縁部		
		275	SK04	瓦質火鉢	17世紀中葉	底部		
		467	SK23	土師質火鉢	17世紀	口縁部		
		490	SK23	瓦質火鉢	17世紀	口縁部		
		731	SK24	瓦質火鉢	17世紀後半	口縁部		
		732	SK24	瓦質火鉢	17世紀後半	口縁～底部	脚部あり 瓦鉢彩	
		733	SK24	瓦質火鉢	17世紀後半	口縁部		
		734	SK24	瓦質火鉢	17世紀後半	底～脚部		
		33	SD01	土師質火鉢	18世紀前半	脚部		

第 35 表 火鉢観察表 (4)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
高松城跡 (西の丸町地区) II	高松市西の丸町	251	SKG01-02	火鉢?	明治	不明		香川県教育委員会ほか-2003c
		831	8A 区 II 跡五筋目	瓦質火鉢	18 世紀末～19 世紀初頭	底部?	新印あり	
		863	8C 区 III 跡	瓦質火鉢	18 世紀末～19 世紀初頭	口縁部		
		1573	SK30229	瓦質火鉢	17 世紀中葉	底部	洗鉢形	
		1630	SK30235	土師質深鉢	17 世紀中葉	口縁～脚部		
		1650	SK30241	瓦質火鉢	17 世紀中葉	底部		
		1690	SK30249	瓦質火鉢	17 世紀中葉	口縁～体部		
		1705	SK30249	瓦質火鉢	17 世紀中葉	底部		
		62	I 区 SZc1 裏15	土師質野付薬		体～脚部		
		302	Ⅱ区 整地層	土師質火鉢	近世	体部～脚部	平面形は四角 体部に意あり	
		476	Ⅱ区 SZc13 間道	土師質火鉢	近世	口縁～体部		
		506	Ⅱ区 SZc11 掘出中	土師質火鉢	近世	底部	脚部あり	
		588	V 区 SXc09 外堀	土師質火鉢	近世	口縁～体部	きなが一体化	
		659	Ⅱ区 SKc01	土師質火鉢	近世	体～脚部		
		773	Ⅱ区 SXc13	土師質火鉢	近世	口縁～底部	体部円筒	
		774	Ⅱ区 SXc13	土師質火鉢	近世	口縁～底部	体部円筒	
		1045	Ⅱ区 整地層	土師質火鉢	近世	体～脚部	体部に意あり	
1047	Ⅱ区 整地層	土師質火鉢?	近世	口縁部				
1073	Ⅱ区 整地層	瓦質火鉢	近世	口縁～底部	洗鉢形			
1074	Ⅱ区 整地層	瓦質火鉢	近世	口縁～底部	洗鉢形			
1177	簡青灰色砂質 土層部	土師質深 鉢 (火鉢)	17 世紀第 1 四半期	底部～脚部				
1213	赤灰褐色砂質	土師質火鉢	近世	口縁部				
1245	簡青灰色砂 質土層部	土師質火鉢	近世	口縁部				
1245	護岸全面埋 積土下層	瓦質火鉢	近世	口縁部				
1318	SKc27	瓦質火鉢	近世	体～脚部	体部円筒			
1600	SKc42	土師質火鉢	近世	口縁部				
高松城跡 (丸の内地区)	高松市丸の内	29	整地層 D	土師質火鉢	18 世紀第 3 四半期 ～19 世紀初頭	口縁部		高松市教育委員会ほか-2015
		30	整地層 D	土師質火鉢	18 世紀第 3 四半期 ～19 世紀初頭	口縁～体部		

第 36 表 火鉢調査表 (5)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
高松城跡 (丸の内地区)	高松市丸の内	81	SK107	土師質火鉢	18世紀第3四半期 ～19世紀初頭	部位不明		高松市教育委員会ほか、2015
		204	SK152	土師質火鉢	18世紀第3四半期 ～19世紀初頭	体一脚部	浅鉢形	
高松城跡 (丸の内地区)	高松市丸の内	46	SK22	土師質火鉢	18世紀第1四半期 ～19世紀初頭	口縁部		高松市教育委員会は、2016b
		73	SK22	土師質火鉢	18世紀第4四半期 ～19世紀初頭	口縁部		
高松城跡 (丸の内地区)	高松市丸の内	181	SK245	陶製耐火火鉢	18世紀後半～19世紀初頭	底部		高松市教育委員会 2020a
		271	SK302	瓦質火鉢	18世紀前半～18世紀 末第3四半期	口縁部		
		442	SE530	土師質火鉢	17世紀～18世紀	口縁部		
		725	SK123	瓦質火鉢	18世紀第3四半期	口縁一脚部	浅鉢形	
		762	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	口縁一脚部		
		763	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	口縁一脚部		
		764	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	底部	脚部なし 浅鉢?	
		765	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	口縁一脚部		
		766	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	口縁一脚部		
		767	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	口縁一脚部		
高松城跡 (松平大藏家土屋敷跡)	高松市丸の内	768	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	体一脚部		高松市教育委員会は、2002
		769	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	体一脚部		
		770	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	体一脚部		
		773	SK123	土師質火鉢	18世紀第3四半期	体一脚部		
高松城跡 (松平大藏家土屋敷跡)	高松市丸の内	17	SK307	瓦質火鉢	17世紀初頭	口縁部		高松市教育委員会は、2004b
		11	SK202	瓦質火鉢	18世紀前半	底部	浅鉢形	
高松城跡 (江戸長屋跡1)	高松市丸の内	80	第2遺構面検出	土師質火鉢	中世?	口縁部		高松市教育委員会 2008
		107	SE01	土師質火鉢	19世紀後半以降	底部	浅鉢形	
高松城跡 (江戸長屋跡2)	高松市丸の内	170	SK101, SX101	土師質火鉢	18世紀第3四半期～19世紀	体一脚部		高松市教育委員会 2009
		735	SX1301	土師質火鉢	不明	体一脚部		
高松城跡 (無量壽院跡)	高松市寿町、西の丸町	736	SX1301	土師質火鉢	不明	口縁一脚部		高松市教育委員会 2005a
		940	包含層	土師質火鉢	不明	口縁部	類例あり	
高松城跡 (寿町1丁目)	高松市寿町	150	SP1274	土師質火鉢	江戸時代	口縁部		高松市教育委員会 2007c
		477	SK1004	土師質火鉢	17世紀後半	体一脚部		

第37表 火鉢調査表(6)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
高松城跡(竪跡)	高松市内町	365	SX104	瓦質火鉢	17世紀後半～18世紀前半	不明	平面方形	高松市教育委員会ほか・2006a
		620	SX101	陶器製火鉢?	19世紀後半	口縁部		
奥ノ坊遺跡群Ⅰ (奥ノ坊地区(記跡)、 大笠古墳・金川(記跡))	高松市高松町	629	SX101	陶器製火鉢?	19世紀後半	口縁部	浅鉢形	高松市教育委員会1999
		42	B地区	土師質火鉢	18世紀後半～19世紀	底部	脚部なし 円筒形	
		57	I地区	土師質火鉢	近世後半	底部		
		58	I地区	土師質火鉢	近世後半	口縁部		
奥ノ坊遺跡群Ⅳ (奥ノ坊古墳群・久米(記跡))	高松市高松町・新田町	6	SP7	土師質火鉢	19世紀	口縁部	口縁部	高松市教育委員会2006b
		28	SK51018	土師質火鉢	19世紀	口縁部		
奥ノ坊遺跡群Ⅲ(奥 の坊遺跡Ⅴ区)	高松市高松町	33	SK51019	土師質火鉢	19世紀	口縁部		高松市教育委員会2007d
		47	SE51001	瓦質火鉢	18～19世紀後半	底部	脚部	
		48	SE51001	瓦質火鉢	18～19世紀後半	底部	脚部	
		48	SE51001	瓦質火鉢	18～19世紀後半	底部	脚部	
		85	SD51001	土師質火鉢	18～19世紀前半	底部		
		1282	6区aSPⅡ285	土師質火鉢?	近世	口縁部		
中間西半坪遺跡Ⅱ	高松市中園町	1282	SKⅡ03	土師質火鉢?	18世紀中葉～後半	口縁部		香川県教育委員会ほか・1999b
		1347	SKⅡ11	土師質火鉢?	17世紀後半～18世紀中葉	口縁部		
		1348	SKⅡ11	土師質火鉢?	17世紀後半～18世紀中葉	口縁部		
		1349	SKⅡ11	土師質火鉢?	17世紀後半～18世紀中葉	口縁部		
		1350	SKⅡ11	土師質火鉢?	17世紀後半～18世紀中葉	口縁部		
		1351	SKⅡ11	土師質火鉢?	17世紀後半～18世紀中葉	口縁部		
		1377	SKⅡ23	土師質火鉢	18世紀	口縁部	脚部	
		415	SP01 (八塚)	土師質火鉢	14世紀前半～16世紀末葉	底部		
		417	SP01 (八塚)	土師質火鉢	14世紀前半～16世紀末葉	口縁部		
		428	SP01 (八塚)	土師質火鉢	14世紀前半～16世紀末葉	口縁部		
中間東半坪遺跡・ 正福遺跡・八幡遺跡	高松市中園町 福祇町	429	SP01 (八塚)	土師質火鉢	14世紀前半～16世紀末葉	底部		香川県教育委員会ほか・2004g
		430	SP01 (八塚)	土師質火鉢	14世紀前半～16世紀末葉	脚部		
		439	SP01 (八塚)	土師質火鉢	14世紀前半～16世紀末葉	口縁部	口縁部	
		494	SP03 (八塚)	土師質火鉢	18世紀後半～明治	口縁部		
		495	SP03 (八塚)	土師質火鉢	18世紀後半～明治	口縁部		
		519	SP03 (八塚)	瓦質火鉢	18世紀後半～明治	部位不明	平面方形	
		520	SP03 (八塚)	瓦質火鉢	18世紀後半～明治	部位不明		

第 38 表 火鉢調査表 (7)

遺跡名	所在地	報告文庫番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
中国東半沖道跡・ 正細遺跡・人跡遺跡 高松市中国町 榎坂町		521	SO03 (人跡)	瓦質火鉢	18世紀後半～明治	部位不明		香川県教育委員会ほか 2004g
		523	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～底部	体部円筒	
		524	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～底部	体部円筒	
		525	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～底部	体部円筒	
		526	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～底部	体部円筒	
		527	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～底部	体部円筒	
		528	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁部	体部円筒	
		529	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁部	刷印あり	
		530	SO03 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～底部	体部円筒	
		529	SO04 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	体～底部	体部円筒	
		527	SO04 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁～体部	体部円筒	
		528	SO04 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁部		
		529	SO04 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁部		
		600	SO04 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	口縁部		
		601	SO04 (人跡)	土師質火鉢	近世後半～明治	体～底部	体部円筒	
		606	SO07 (人跡)	瓦質火鉢	近世後半～明治	体～底部	体部円筒	
		649	SO17 (人跡)	土師質火鉢	18世紀後半	底部	体部円筒	
		678	遺構外 (人跡)	瓦質火鉢?	近世後半～本郷	体～底部	体部円筒	
		14	アドレンズ 2号墳(中森)	土師質火鉢	17世紀以降	口縁部		
		94	1号墳 (中森)	土師質火鉢	中世後半	体部		
		95	11号墳 (中森)	土師質火鉢	中世後半	脚部		
		131	13号墳 (中森)	土師質火鉢	中世	口縁～脚部		
		168	SO01 (東山崎)	土師質火鉢	12世紀前期, 17世紀埋没	体部		
		223	SP124 (東山崎)	土師質火鉢	17世紀前半以降	体部		
244	7号土坑 (伊勢塚)	瓦質火鉢	18世紀	口縁部				
中国東半・ 林・精城遺跡 東山崎・水田遺跡	高松市穂波町、勸修寺、 田村町、上天神町、 林町、東山崎町							香川県教育委員会ほか 2004h

第 39 表 火鉢観察表 (8)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
川南・東遺跡	高松市春日町	3	SD-1088	火鉢	不明	体-脚部	深鉢形の可能性あり	高松市教育委員会 2000
		61	SK-2027	土師質火鉢	明治末～大正	口縁部		
		147	SK-2050	瓦質火鉢	19 世紀	口縁～底部	平面方形	
		232	SK-2084	土師質火鉢	不明	体-脚部		
		236	調査 3002	土師質火鉢	不明	体-脚部	深鉢形の可能性あり	
		242	SX-2002	土師質火鉢	不明	脚部	脚部	
鬼無部井遺跡	高松市鬼無町	447	SP-2322	土師質火鉢	不明	口縁～底部	施釉か	高松市教育委員会 2001a
		4	SD-E2-102	土製瓦鉢	近世以降	口縁～底部	火鉢か? 浅鉢形	
		1	SD-F103	土師質火鉢?	18 世紀後半～19 世紀初頭	口縁部		
		2	SD-F103	土師質火鉢?	18 世紀後半～19 世紀初頭	口縁部		
浜ノ町遺跡・高松城跡 (内ノ丸町、西打越跡)	高松市浜ノ町・御町、 内ノ丸町、香川町、鬼無町	10	SK12103	土師質火鉢?	17 世紀前半	口縁部		香川県教育委員会ほか 2001b
		220	上野近世出土物	土師質鉢	近世	脚部	火鉢か?	
		1199	SK642	瓦質火鉢	13 世紀末～15 世紀後半	口縁部	施釉あり	
		1379	遺構外出土	瓦質火鉢	不明	口縁部	施釉あり	
		1560	SE201	瓦質火鉢	16 世紀末～17 世紀初頭	口縁部	施釉あり	
		1600	SE519	土師質鉢	17 世紀後半～18 世紀前半	脚部	火鉢か?	
		1607	SE519	瓦質火鉢	17 世紀後半～18 世紀前半	脚部	施釉	
		1741	SK114	土師質鉢	17 世紀後半	体-脚部	体-脚部	
		1860	SK501	土師質火鉢	19 世紀末	体-脚部	体-脚部	
		1968	SK713	土師質火鉢	17 世紀前半	体・底部・脚部	体・底部・脚部	
		2116	SP627	瓦質火鉢	17 世紀中葉	脚部	脚部	
松岡下所遺跡	高松市松岡町	336	SK13	瓦質火鉢	江戸時代	口縁部		高松市教育委員会 2001b
		17	SR3001	土師質火鉢	近世	体-脚部	深鉢形の可能性あり	
		19	SK5010	土師質火鉢	近世	口縁～底部	浅鉢形	
本ノ中村遺跡	高松市本ノ中	20	SK5010	土師質火鉢	近世	体-脚部	浅鉢形	高松市教育委員会 2001c
		62	SZ2001	火鉢?	18 世紀	底部?	質不明	
日勝・松林遺跡 (済生会)	高松市多肥上町	922	粘土採取土坑	土師質火鉢	江戸時代以降	底部		高松市教育委員会ほか 2005b
		43	E2-SF68	土師質火鉢	13 世紀末葉～14 世紀前半	口縁部		

第40表 火鉢観察表(9)

遺跡名	所在地	報告文書番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
西八土居遺跡	高松市西八土町	139	SD61018	土師質火鉢	17～18世紀	口縁部		高松市教育委員会 2005b
		183	SK51017	土師質火鉢	不明	口縁～底部、 脚底	浅鉢形	
		323	SK61086	瓦質火鉢?	18世紀	脚底		
樂林公園	高松市樂林町	70	包含層	土師質火鉢	不明	口縁～体部	観察表では七厘	香川県教育委員会ほか 2006
		71	包含層	土師質火鉢	不明	底部	観察表では七厘	
		72	包含層	土師質火鉢	不明	口縁～底部	観察表では七厘	
		73	包含層	土師質火鉢	不明	口縁～底部	観察表では七厘	
		279	SK06	瓦質火鉢	18世紀中葉～末	口縁部		
樂林公園	高松市樂林町	289	SK06	瓦質火鉢	18世紀中葉～末	口縁～体部		香川県教育委員会 2006
		478	SK07	瓦質火鉢	不明	口縁～体部		
		479	SK07	瓦質火鉢	不明	口縁～底部	浅鉢形	
		682	包含層	瓦質火鉢	不明	脚底	煎脚	
榎垣町遺跡	高松市榎垣町	406	不明	土師火鉢	不明	完形		高松市教育委員会 2003c
		766	SD03	陶器製火鉢	近代	体～底部	浅鉢形	
特別史跡遺跡園分寺 特別史跡遺跡園分寺 路加意輪寺遺跡 園分中 西遺跡 鬼了山遺跡	高松市園分寺町	93	26次調査 (園分寺跡)	土師質火鉢	不明	脚底		高松市教育委員会 2007e
		83177	83年度第2層	土師質火鉢	18世紀末～19世紀	口縁部		
		83341	83年度第5層	瓦質火鉢	17世紀以降	底～脚底		
		84337	集土四層空堀 灰包粘土 灰包粘土	火鉢状風炉	19世紀以降	口縁～体部		
		84338	集土四層空堀 灰包粘土	火鉢状風炉	19世紀以降	口縁～底部		
特別史跡遺跡園分寺跡	高松市園分寺町園分	85775	御房跡地区 第2層	土師質火鉢	18世紀前半以降	体～脚底		高松市教育委員会 2005b
		85790	御房跡地区 第2層	瓦質火鉢	18世紀前半以降	口縁～体部		
		184	土器層り I	土師質火鉢?	14世紀後半～15世紀前半	口縁部		
		1029	土器層り II	土師質火鉢	14世紀～15世紀	口縁部		
園分寺堀井遺跡	高松市園分寺町	66	SD02、SD04	土師質火鉢	17世紀後半	脚底		香川県教育委員会ほか 1995b
		106	SK01	土師質火鉢	18世紀後半	体～脚底		
十川東・平田遺跡	高松市十川東町	151	SK12	土師質火鉢	18世紀以降	体部?		香川県教育委員会 2016a
		302	SD41	土師質火鉢	近代以降	脚底		
上林遺跡	高松市上林町							香川県教育委員会 2016a

第 41 表 火鉢観察表 (10)

道路名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書			
下川津遺跡	坂出市川津町	SX IV 01	SX IV 01	土師質火鉢?	室町時代	脚部		香川県教育委員会 14 号-1990a			
		第 545 図-9	SD IV 03	土師質火鉢	室町時代	体~脚部					
		第 545 図-10	SD IV 05	土師質火鉢	室町時代	体~脚部					
		第 548 図-17	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
		第 536 図-9	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
		第 536 図-10	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
		第 536 図-11	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
		第 537 図-1	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
		第 537 図-2	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
		第 537 図-3	SD IV 01	火鉢?	室町時代	脚部	質不詳				
川津ノ又遺跡Ⅱ	坂出市川津町	584	SD112	瓦質土器	近世	口縁部	火鉢か?	香川県教育委員会 14 号-1998b			
		105	SX214 (川津六反堀)	土師質火鉢	中世	体~底部	脚部があった 痕跡あり				
川津六反堀遺跡・ 川津原加遺跡	坂出市川津町	122	SK204 (川津六反堀)	土師質火鉢	中世後半	口縁~底部	脚部があった 痕跡あり	香川県教育委員会 2014			
		214	SD209 (川津六反堀)	土師質大型 脚付火鉢	近世前半	体~底部	脚部あり				
		947	SK502 (川津原和)	陶器製火鉢	不明	体~底部	脚部あり				
		364	C 区 SK02	土師質火鉢?	18 世紀以降	口縁部					
		373	C 区 SX01	土師質火鉢?	18 世紀以降	口縁部					
		374	C 区 SX01	土師質火鉢?	18 世紀以降	口縁部					
康山古墳群	坂出市高野町	41	SK212	陶器製火鉢?	19 世紀代	口縁部		香川県教育委員会 14 号-2000c			
		48	SD101	土師質火鉢	江戸時代後期	口縁部					
		49	SD101	土師質火鉢	江戸時代後期	口縁部					
		78	遺構外出土	備前焼火鉢?	江戸時代	口縁~底部	形状不明				
本町二丁目遺跡	坂出市本町二丁目	1025	SK19	土師質火鉢	18 世紀後半~19 世紀	底部~脚部		香川県教育委員会 14 号-1995c			
		1036	SK19	瓦質火鉢	18 世紀後半~19 世紀	体~脚部	平面方形				
		1076	SK63	陶器製火鉢	近世	口縁部	煤知				
		242	SK09	瓦質火鉢	近世	口縁~底部					
		243	SK09	瓦質火鉢	近世	口縁部					
		244	SK09	瓦質火鉢	近世	口縁部					
		245	SK09	瓦質火鉢	近世	底部?					
		246	SK09	瓦質火鉢	近世	底部?					
		都家一里原遺跡	丸亀市都家町	1036	SK19	瓦質火鉢	18 世紀後半~19 世紀		底部~脚部		香川県教育委員会 14 号-1995c
				1076	SK63	陶器製火鉢	近世		口縁部	煤知	
都家田代遺跡	丸亀市都家町	242	SK09	瓦質火鉢	近世	口縁~底部		香川県教育委員会 14 号-1995b			
		243	SK09	瓦質火鉢	近世	口縁部					
		244	SK09	瓦質火鉢	近世	口縁部					
		245	SK09	瓦質火鉢	近世	底部?					
246	SK09	瓦質火鉢	近世	底部?							

第42表 火鉢観察表(11)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
都来田代遺跡	九鬼市都来町	350	SK10 石積み高さ約1.5m 出土遺物	瓦質火鉢 土師質火鉢?	近世	底部		香川県教育委員会ほか-1996b
		480	1区北半部 包含層	土師質火鉢	近世	口縁~底部		
		643	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	口縁~底部	脚部あり 浅鉢形	
		644	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	口縁~底部	脚部あり 浅鉢形	
		645	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	口縁部	刻印あり	
		646	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	底部	脚部あり	
		647	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	脚部		
		648	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	口縁~底部	脚部なし	
		649	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	口縁~底部		
		650	1区北半部 包含層	瓦質火鉢	近世	口縁部	箱形	
		369	1直区包含層 (三基石島南側) 1三基石島南側	土師質火鉢	近世	口縁~唇部		
		371	1三基石島南側	土師質火鉢	近世	口縁部		
		使三遺跡	九鬼市使三町・川西町	52	SP483	土師質火鉢	近世	
55	SP062			土師質火鉢	近世	口縁部		
143	SK1192			土師質火鉢	近世	体~脚部		
356	SK1300			土師質火鉢	近世	体~脚部	深鉢形の可能性あり	
427	SX1016			土師質火鉢	近世	口縁~底部	脚部あり 浅鉢形	
482	SX1262			土師質火鉢	近世	体~脚部	脚部あり 体部内湾	
517	SX1334			土師質火鉢	近世	口縁部	口縁部あり、体部 外縁反縁あり	
525	SX1370			土師質火鉢	近世	口縁~底部	浅鉢形	
638	SK2054			土師質火鉢	近世	口縁~底部	浅鉢形	
647	SK2059			土師質火鉢	近世	口縁部		
672	SK2062			土師質火鉢	近世	体部	外縁反縁あり	
715	SK2066			土師質火鉢	近世	口縁~底部	平面方角	
718	SK2088			土師質火鉢	近世	体~底部	脚部なし	
777	SK2112	土師質火鉢	近世	脚部	獣蹄			
丸亀城跡(大手町城區)	丸亀市大手町	517	SX1334	土師質火鉢	近世	口縁部	口縁部あり、体部 外縁反縁あり	香川県教育委員会ほか-2018b
		525	SX1370	土師質火鉢	近世	口縁~底部	浅鉢形	
		638	SK2054	土師質火鉢	近世	口縁~底部	浅鉢形	
		647	SK2059	土師質火鉢	近世	口縁部		
		672	SK2062	土師質火鉢	近世	体部	外縁反縁あり	
		715	SK2066	土師質火鉢	近世	口縁~底部	平面方角	
		718	SK2088	土師質火鉢	近世	体~底部	脚部なし	
		777	SK2112	土師質火鉢	近世	脚部	獣蹄	

第43表 火鉢観察表(12)

遺跡名	所在	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
平池南遺跡	丸亀市金倉町・原田町	1250	SK V 01、07	土師質火鉢	近世以降	脚部		香川県教育委員会 2018c
東坂元秋常遺跡	丸亀市横山町	246	SK30	土師質火鉢	近世	体一脚部	深鉢形の可能性あり	香川県教育委員会 2008c
		260	SK38	土師質火鉢	近世	口縁・胴部	胴部六稜 深鉢形火鉢	
		289	SK68	土師質火鉢	近世	体一脚部	深鉢形の可 能性あり	
		29	SD03	土師質火鉢	近世	口縁部		
龍野西分史定遺跡	丸亀市龍野町	782	SX-a07-08	土師質火鉢	15～16世紀以降	口縁・胴部		丸亀市教育委員会 2014
		783	SX-a07-08	土師質火鉢	15～16世紀以降	脚部		
中東遺跡2・奥白方南遺跡 ・奥白方南遺跡	仲多度郡多度津町	1297	柱・包含層 SD02 (奥白方面)	土師質火鉢	中世	脚部		香川県教育委員会 2015
		46	SD02 (奥白方面)	瓦質火鉢	12世紀前期 15世紀開設	底部		
庄八尺遺跡	仲多度郡多度津町	172	SD07	瓦質火鉢	17世紀前半	口縁・底部		香川県教育委員会 2008d
		229	SB42	瓦質火鉢	16世紀後半	口縁部	浅鉢形	
		266	柱穴跡	土師質火鉢	不明	脚部	脚部	
		426	SK04、SK08	瓦質火鉢	17世紀前半	口縁・底部	浅鉢形	
中又北遺跡	仲多度郡多度津町	406	SD05	瓦質火鉢	16世紀後半～17世紀前半	脚部		香川県教育委員会 2020b
		K1	SK01	土師質火鉢	近世以降	口縁・底部	体部円筒	
		K2	SK01	土師質火鉢	近世以降	口縁・底部	体部円筒	
		K8	SD14	火鉢	近世以降	脚部	貫不洋	
天香城跡発掘調査概観	香通寺市、多度津町、 三野町	18	P6	土師質火鉢?	不明	脚部	一市二町天香城跡保存会 1997	
龍川五条遺跡2・ 龍野東分山岡南遺跡	香通寺市原田町、 丸亀市龍野町	3692	SK90 (龍川五条)	土師質火鉢	18世紀後半	体一脚部		香川県教育委員会ほか 1996c
		3693	SK95 (龍川五条)	土師質火鉢	18世紀後半	口縁一脚部		
		3724	SD15 (龍川五条)	土師質火鉢	近世	口縁・体部		
		3729	(龍川五条)	土師質火鉢	19世紀	体一脚部	胴部なし	
		369	包含層	火鉢	不明	体一脚部	胴部あり	
岩成古墳・香通寺田原町・ 香通寺御所跡・田原古墳遺跡	香通寺市香通寺町、仙遊町	9	第一次調査 (御所跡)	土師質火鉢	18世紀	口縁一脚部	香川県教育委員会ほか 2003c	
田原古墳遺跡群	香通寺市仙遊町	1490	SK008	瓦質火鉢	14世紀後半～15世紀	底部	香通寺市教育委員会 2004	
尾ノ首寺跡発掘調査概要	仲多度郡まんのう町	14	第2調査区 石垣下	土師質火鉢	不明	脚部	香川県教育委員会ほか 2016b 仲町町教育委員会 1980	
買田下遺跡	仲多度郡まんのう町	628	Ⅱ区南包含層	土師質火鉢	不明	底部	香川県教育委員会ほか 2004d	

第 44 表 火鉢観察表 (13)

遺跡名	所在地	報告文番号	遺構名	種類	時期	出土部位	備考	報告書
尾の上遺跡・照田・中尾遺跡跡	三豊市豊中町	943	森 4 号塚	土師質火鉢	近世	口縁部		香川県教育委員会ほか 1996b
		949	森 5 号塚	土師質火鉢	不明	底部	脚部あり	
		1137	SD31	土師質火鉢	近世	底部		
		1180	包含層	土師質火鉢	近世	口縁部		
		1181	包含層	土師質火鉢	近世	口縁～底部		
		1182	包含層	土師質火鉢	近世	口縁～底部	洗鉢形	
		1183	包含層	土師質火鉢	近世	口縁部		
		280	SD02	土師質火鉢	中世	口縁部		
		294	SD03	土師質火鉢	中世	脚部		
		316	SK03	土師質火鉢	中世	口縁部		
		327	SK04	土師質火鉢	中世	口縁部		
		338	SK04	土師質火鉢	中世	脚部		
		430	SK10・SK11	土師質火鉢	中世	体～底部		
		432	SK10・SK11	土師質火鉢	中世	体～底部		
		472	SP15	土師質火鉢	中世	口縁～底部	脚部あり	
633	包含層	土師質火鉢	不明	脚部				
762	SK03 (須田・中尾塚)	瓦質火鉢	18世紀後半～19世紀前半	口縁～体部	平面方形		香川県教育委員会 2018d	

第5節 中世後期～近世前期における土師質土器把手付鍋・播鉢について

1. 編年の前提

中世後期～近世前期の遺跡は、同一地点で長期間継続している事例が多く、廃棄の同時性が保証できる資料が乏しいのが現状である。しかし、作業の前提となる大まかな枠組みは必要である。そこで見かけ上の「共存関係」に基づき、資料群の先後関係を推定する。その上で土師質土器把手付鍋・播鉢の型式学的検討と突き合わせ、生じた違いをどのように整合的にとらえることが可能かを検討し、暫定的な編年案を提示したい。

1-1. 共存関係の推定

資料群の先後関係の想定は、土師質土器把手付鍋・播鉢と共存する在地産土器(楠井産土器)、中国産磁器、国産陶磁器(備前焼^(註1)、瀬戸美濃陶器、肥前陶磁器)の年代観によって推定する。陶磁器の既存の編年と、香川県内の国分寺楠井遺跡の編年、高松城で作成された様相を組み合わせることによって、その資料群が中世的もしくは近世的様相を持つものかを「共存関係」に基づき判断する。

1-2. 遺跡の選出

検討対象とする資料群は、中讃地域に位置する遺跡から出土した土師質土器把手付鍋と播鉢で、上記の在地産土器と陶磁器が共存するものから選定した。また、近世の資料として、中世後期からの断絶が明確な高松城西の丸町地区と歴博地区^(註2)を選定した。そのほか東山崎・水田遺跡では、今回検討する資料群とは異なる特徴を持つ資料が多く出土しているため、検討対象とした。



第 236 図 対象遺跡位置

第45表 対象遺跡の所在地及び報告書

番号	遺跡名	所在地	報告書
1	東山崎・水田遺跡	高松市東山崎町	香川県教育委員会ほか1992
2	高松城跡博地区	高松市玉藻町	香川県教育委員会1999a
3	高松城西の丸町地区Ⅱ	高松市西の丸町	香川県教育委員会ほか2003c
4	高子町遺跡	高松市高子町・高子町	香川県教育委員会ほか2004f
5	西末田遺跡Ⅴ	綾歌郡綾歌町(山下)	香川県教育委員会2015
6	下川津遺跡	坂出市川津町	香川県教育委員会ほか1996a
7	柳家出代遺跡	丸亀市柳家町	香川県教育委員会ほか1996b
8	東坂元林常遺跡	丸亀市敷山町	香川県教育委員会ほか2008c
9	沖道跡	丸亀市敷山町上法軍寺	本報告書
10	庄八尺遺跡	仲多度郡多度津町庄	香川県教育委員会2009

2. 変異幅と連続性

上記の遺跡から出土した土師質土器把手付鍋と搦鉢について、形態・技法の変化を観察し、型式学的変遷を検討した。

2-1. 把手付鍋（第237図）

口縁部に痕跡的な鈎部を伴い、2個一対の把手（外耳）を貼り付け、把手上面から口縁部内面に円孔を開けるものである。香川県と徳島県のみに見られる、地域性の強い特徴的な器種であり、今回の検討対象では下記の①・②の類型に大別できる。

①類型は底部成形を含め、全体に板ナデを多用しており、把手外縁を強いナデによって仕上げるものである。

②類型は底部を叩き出し成形（格子叩き目）し、把手外縁を削り調整によって仕上げるものである。口縁端部と鈎部が①よりも小さく、両者の間に沈線状の窪みが形成される。

①類型は概ね黄白色～黄褐色を呈し、中讃地域を中心に西讃地域と高松平野に分布する。

②類型は茶褐色を呈する胎土を持ち、高松平野以东（吉野川下流域を含む）に分布の主体があるようである。

対象とした把手付鍋の点数は、①類型31点、②類型16点である。以下の観点に基づき、検討資料を型的に古いと考えられる形態から並べ順に番号を付した。

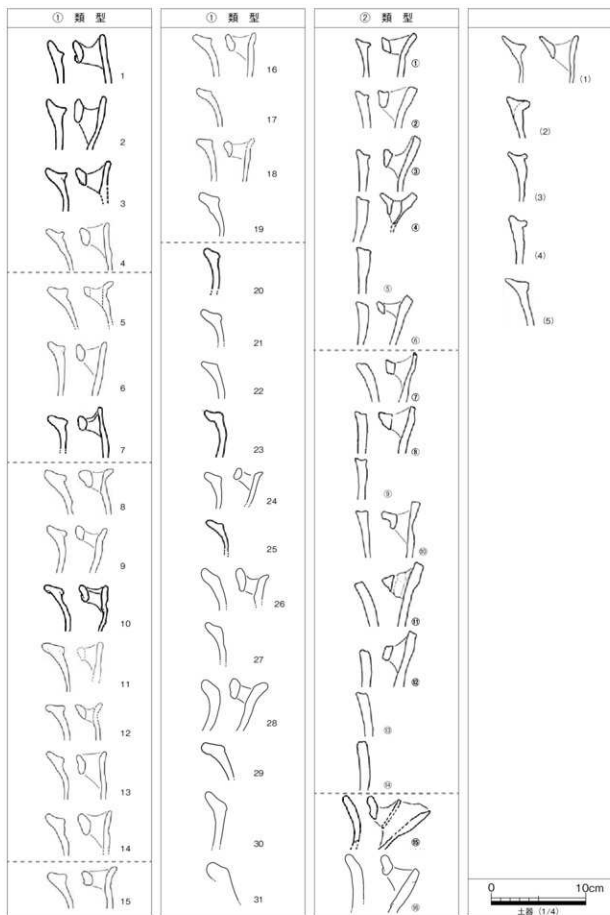
[①類型]

口縁端部形態

1は、比較的長い口縁部を弱く内傾させ、香川県内で盛行した足釜と同様な形態を持つ。2～4では口縁部の内傾はより強くなり、ヨコナデによって口縁端部を比較的細く収める形態がみられる。5～7、10～12、14～19では、より口縁部を水平に近く強く内傾させ、端部も徐々に丸く太く収められるようになる。また口縁部長が次第に短くなる。20～22と26～28では、口縁部の内傾が逆に次第に弱くなり、30～31ではさらに内傾が弱くなる一方で全体に肥厚化が進み、26～31ではより顕著になる。

鈎部の形態

1～4では短いながらも鈎の形状が明瞭であるが、5～7では基部が太くなり隆起の弱い瘤状の断面を呈するようになる。この瘤状化は8以降も進むが、8～14では基部下端に接合痕跡の段（窪み）がみられ、15～19では全体に隆起が弱くなる。20～27では、鈎部は口縁屈曲部の角（稜）をなすようになり、28～31ではそれともいまいになり、口縁部との一体化が進む。



第 237 図 土師質土器把手付鍋の形態的変異（バリエーション）

成形技法

断面観察には困難さがつきまとうが、一応、形態との関連性を以下のように考える。1～4では、通常の足釜と同様に、体部と口縁端部を連続的に作り、その後、鐙部を貼り付け、ナデ調整するようである。次いで5～7も同様の可能性がある。8～19は、口縁端部と鐙部を一体的に成形（粘土紐貼りつけ→口縁端部・鐙部をつまみだし）していると考えられ、国分寺楠井遺跡での足釜C類と共通する。20以降は、体部上端を折り曲げて口縁部を成形し、屈曲部にヨコナデを加えて鐙部を作り出すようになる。

【②類型】

口縁部形態

この類型は口縁端部と鐙部が近接するため、部位を分けずに記述する。①～⑥では、短いながらも上方に延びる口縁端部と、横外方へ延びる鐙部という、明確に分離した部位の構成がみられる。鐙部が突出するため、体部上半部の器厚よりも口縁部幅が広い。⑦～⑭では、口縁端部・鐙部ともに短小化し、両者の間に沈線状の窪みを残すことで、各部位の存在を示すかのような形状を呈する。さらに⑮・⑯では、口縁端部・鐙部の区分そのものがなく、内傾する口縁部を丸く太く収めている。①～⑥、⑦～⑭、⑮・⑯の3形態を、羽釜（足釜）あるいは把手付鍋①類型の口縁部形態を意識した祖型から、これが全く失われた形態への連続的な変化という形で捉えることができる。

その他の形態

口縁部以外の形態的要素としては、相対的に器高（径高指数）が低くなる傾向、把手の高さが口縁部上端よりも低い位置になる傾向（①～⑭から⑮・⑯へ）等の変異が僅かに指摘できる程度であり、把手や円孔を含めた基本形態に強い固定性が認められる。

成形技法

①類型以上に断面観察の難しさはあるが、一応、以下のように捉えている。

①～⑥では、体部上端面に強い横ナデを加えて口縁端部と鐙部を分岐させ、それぞれをつまみ出して端部を丸く収める。⑦～⑭では、成形時の体部上面の中央に沈線を施し、その両面をナデで仕上げ上げる。⑮・⑯では、これらを省略し、体部上端面全体をナデで丸く太い口縁部として仕上げ上げる。

口縁部以外の技法的要素としては、把手外縁が全ての残存資料で認められて特に大きな変異が認められず、また底部の粗い格子叩き目も叩きの範囲や原体の格子寸法に大きな変異を指摘できない。技法においても強い固定性が認められる。

ところで(1)～(5)は形態を見ると①類型に類似する。しかし、前述したとおり①類型と②類型では胎土が異なり(1)～(5)は②類型の胎土と酷似する。また(5)では底部付近に格子叩き目が残る。このことより(1)～(5)は①類型と形態を共有しつつ、②類型へとつながる祖型として位置づけられる可能性はあるが、まだ資料数に乏しい状況であり、その位置づけについては、今後の課題としたい。

2-2. 播鉢（第238図）

内側に折り込む、ないし湾曲させる口縁部を伴うものであり、把手付鍋の①類型に酷似した胎土を持ち、中讃地域を中心に西讃、高松平野にも分布する。国分寺楠井遺跡産の播鉢とは明確に異なる形態、胎土、焼成の特徴を持つ。

対象とした播鉢の点数は67点である。以下の観点に基づき、検討資料を型的に古いと考えられる

形態から並べ順に番号を付した。

口縁部形態

以下の記述では、内傾する口縁部外面の内側端部を「内端部」、外側の端部を「外端部」と呼称して記述する。

1～3は、体部内面から明瞭に屈曲・内傾して斜め内方に長く伸びる内端部と、横外方に明瞭に伸びて取める外端部からなる。全体の断面形状としては、内面の屈曲部と外端面が幅広く、そこから内端部を頂角とした三角形を呈しており、内傾する端面が強く窪むため、両端部が突出して細身に見える。4～20では、内端部がやや丸く太く取められ、外端部の突出がやや弱い。21～41は、外端部は突出せずに単なる屈曲部としての角(稜)となり、屈曲部から内端部まで全体に肥厚する。42～55は、特に内面側で屈曲が弱く、外端部の稜も丸みを帯びる。58～61・63は、内外面ともに口縁部の屈曲が弱くなり、内端部幅が屈曲部幅が屈曲部と同じか、それをしのぐほどになる。64～67は、外端部という部位が曖昧なものになり、口縁部の屈曲がさらに不明瞭なものとなる。口縁部全体が玉縁状に肥厚する。

成形技法

1～3は、端面を強く横ナデしながら両端部を強くツمامし出す。4～20では、両端部、特に外端部へのツمامし出しが弱くなる。21～41は、口縁部全体の折込に留まるようになり、端部のツمامし出しは認められない。42～55は、肥厚した内端部を面取りするようになる。56～61・63は、面取りは行われなくなり、外端面への強い横ナデにより口縁の屈曲を強調するようになる。

3. 資料群ごとの関係

1項で示した第46表に、2項で整理した形態のバリエーションを落とし直して整理した(第47表)。番号は、第237・238図のそれと対応する。

中讃地域の中世後期の各遺構および東山崎・水田遺跡では、番号が混在する状況が認められる。1項でも詳述のとおり、長期にわたり同一地点で遺跡が継続することにより、同一遺構内に廃棄のタイミングが異なる資料が混在したものと理解できる。

一方で東山崎・水田遺跡を除く近世前期の各遺構では、いずれも近い番号にまとまる傾向がある。近接する時期との入れ替えなど、「見かけの共伴関係」に基づく先後関係の微修正を行うことで、概ね前項で想定した遺物の変遷順序に一致させることができる。

また、東山崎・水田遺跡以外の近世前期の各遺構では、沖遺跡SD3032の挿鉢片1点(32)を除いて、中世段階の資料の混在は認められない。したがって、大きく中世後期の資料群と近世前期の資料を比較することで、把手付鍋は鋳部が次第に形骸化・消失する方向へ、挿鉢については口縁部の屈曲が弱くなり直立化する方向へと変化する大まかな傾向を読み取ることができる。

4. 土師質土器把手付鍋・挿鉢の編年案

上記の検討を踏まえ、2項で想定した変遷順をもとに、把手付鍋については口縁部(口縁部・鋳部)の形態・成形技法を中心に、挿鉢については口縁部形態と成形技法に着目して各属性を整理し、この組み合わせから把手付鍋2系譜8型式、挿鉢6型式を設定した(第48表・第49表)。

その上で、各型式の併行関係の推定のため、同一遺構内に把手付鍋、挿鉢が共伴する事例での把手付鍋・挿鉢各型式の出土点数を集計した(第50表)。中世後期の各遺構では、複数型式の遺物の混在が認

第 47 表 土師質土器把手付鍋・播鉢の変遷と仮伴関係の対応

仮伴関係に基づく 時期区分	遺跡名	遺構名	土師質土器				
			把手付鍋	播鉢			
中世 的 様 相	楠井Ⅱ-2～3	笹八尺	SD07	—	○	3,9,10,11,12,14,19,21,23,38,39	
		浜ノ町	SD002	—	○	34,35	
	楠井Ⅱ-3	沖	SD3028	○	19,22,24,29	○	1,2,15,37
		下川津	SDN01	○	1,2,3	○	5,7,22,36
		下川津	SXN01	○	7,10	○	6,25,29,33
		下川津	SDN03	○	—	○	18
	楠井Ⅲ	西木田	SXe12	—	—	○	4,56
		西木田	SXe07・08	○	5,8,9,12,17,18	○	8,16,17,24,26,27,28,30,31,40
		東山崎・水田C地区	SK08	○	10	—	—
		東山崎・水田C地区	SD20	○	51,③	—	—
東山崎・水田C地区		SE04	○	9	—	—	
西木田		SDe26a・b	○	4,6,11,13,14,15,16	○	20,41	
近世 的 様 相	様相1	高松城跡登壇地区	第4遺構面上層	—	—	○	42,57
		高松城跡西の丸町地区	SKb192	○	—	○	48
		東山崎・水田C地区	SD05	○	11,①,⑥,⑧,⑫	○	—
		東山崎・水田D地区	SD30	○	21,⑬	○	—
	様相2	沖	SD3032	○	26,28,30,31,⑭	○	32,52,59
		高松城跡西の丸町地区	SKb255	○	20,23,25	○	44,45,46,47,49
		笹八尺	SX03	—	—	○	53
		沖	SD3042	○	—	○	13,54,62
		沖	SD3037	○	21,27	○	—
		東山崎・水田C地区	SK17	○	7	○	—
		東山崎・水田C地区	SE03	○	13	○	—
	様相3	東山崎・水田E地区	SD05	○	31(4),⑬,⑮	○	—
		高松城跡西の丸町地区	SKb229	—	—	○	43
		西木田	SDr04	—	—	○	50,51
	様相5	東山崎・水田C地区	SD03	○	④,⑤	○	—
		東取元秋富	SD01	—	—	○	65,66
		郡家田代	SK09	—	—	○	67
		郡家田代	SX03	—	—	○	64

められるが、概ね把手付鍋Ⅰ-I型式と播鉢Ⅰ-II型式、把手付鍋Ⅰ-II・Ⅲ・Ⅳ型式と播鉢Ⅱ-Ⅲ型式が共伴し、把手付鍋Ⅰ-Ⅳ型式以前と把手付鍋Ⅰ-V型式・播鉢Ⅳ型式との共伴は認められない。近世前期では、把手付鍋Ⅰ-V型式と播鉢Ⅳ-V型式の共伴が確認できる。東山崎・水田遺跡では遺物の混在が激しく正確な併行関係は特定し難いが、「見せかけ上の共伴関係」から楠井Ⅲ期に位置づけられる各遺構から、把手付鍋2-I・II型式が出土している。以上から、第239図のとおり各型式の併行関係を推定し、中世後期～近世前期を5期(A～E期)に区分した。以下、設定した時期ごとに各型式の特徴と変遷を概観する。

A 期

把手付鍋系譜Ⅰ-I型式、播鉢Ⅰ-II型式が認められる。

(把手付鍋)

I-I 型式は、弱く内傾する比較的長い口縁部で、体部から口縁部を連続的に作り出したのち、口縁部下方に鈎部を貼り付けて成形する。後述のI-II 型式以降と比べ、口縁部が長く上向きに立ち上がる点に特徴がある。

東山崎・水田遺跡では、中讃地域のI-I 型式と比較して鈎部がわずかに大きく突出する個体が認められ、胎土も異なるが、形態・成形技法から別系譜として細分するには至らない。

(描鉢)

I 型式は、口縁内端部を強く斜め上方へとつまみ出し、内端部断面形が頂角の鋭い三角形となる。外端部は、横外方へつまみ出し拡張させる。

B 期

把手付鍋系譜1-II・III 型式、把手付鍋系譜2-I 型式、描鉢II・III 型式が認められる。

(把手付鍋)

I-II 型式は、口縁部・鈎部の成形法はI-I 型式と共通すると考えられるが、I-I 型式と比べ口縁部長が短く、より強く内傾し、鈎部の隆起は弱い。東山崎・水田遺跡例にはI-I 型式と同様に鈎部

第48表 土師質土器把手付鍋の各属性と型式設定

	系譜1										口縁部成形	鈎部成形	把手外縁部 鈎部	型式		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
期	1	300-1														
	2	300-6														
	3	300-7														
	4		300													
	5			300												
	6				300											
	7					300										
	8						300									
	9							300								
	10								300							
期	11								300							
	12									300						
	13										300					
	14											300				
	15												300			
	16													300		
	17														300	
	18															300
	19															
	20															
期	21															
	22															
	23															
	24															
	25															
	26															
	27															
	28															
	29															
	30															
31																

	系譜2										口縁部成形	鈎部成形	把手外縁部 鈎部	型式		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
期	1															
	2															
	3															
	4															
	5															
	6															
	7															
	8															
	9															
	10															
期	11															
	12															
	13															
	14															
	15															
	16															
	17															
	18															
	19															
	20															
期	21															
	22															
	23															
	24															
	25															
	26															
	27															
	28															
	29															
	30															

表中の番号は各遺跡の出土番号を示す。

第50表 土師質土器把手付鍋・播鉢の併行関係

併行関係に基づく時期区分	遺跡・遺構名	把手付鍋					播鉢						時期区分		
		系譜1					I	II	III	IV	V	VI			
		I	II	III	IV	V									
横井Ⅱ-2~3	庄八尺 S007						1	6	4						A
横井Ⅱ-3	下川津 SDFV01	3					1							B	
	下川津 SXIV01		1	1				1	3						
横井Ⅲ	西末則 SDe26a-b	1	1	3	2			1	1					C	
	西末則 SXe07-08		1	3	2			3	7						
様相1	高松城跡西の丸町地区 SKb192					1			1					D	
様相2	高松城跡西の丸町地区 SKb255					2			5						
	沖 S03032					4					1				
様相5	栗坂元秋常 S001												2	E	
	郡家田代 SK09											1			
	郡家田代 SX03											1			

の隆起がやや強いものが認められるが、A期同様に形態・成形技法から系譜を細分するには至らない。

後続するⅠ-Ⅲ型式では、口縁部・鈎部の成形技法に変化が認められる。体部の上端に粘土紐を貼り付け、口縁部と鈎部を一体的に成形する。鈎部は貼り付けた粘土紐の下端を強くツマミながら体部にナデ付ける。

東山崎・水田遺跡出土例には、中讃地域とは異なる形態の変化が認められる(系譜2)。2系譜-Ⅰ型式は、口縁部に粘土紐の付加が認められず、体部から連続して口縁部を成形し、端部を短く上方へツマミ出して口縁部を成形する。底部には、粗い格子タタキ目が明瞭に残る。また、系譜1では把手外縁がナデ成形で平面形が丸みを帯びた台形となるのに対して、系譜2は外縁がケズリ成形で角の鋭い台形となる。

(播鉢)

Ⅱ型式は、口縁部の形態・成形技法はⅠ型式と共通し内端部断面形は三角形状だが、頂角はやや丸みを帯びる。外端部はツマミ出すものの、Ⅰ型式と比較すると突出は弱い。

Ⅲ型式は、口縁部全体を折り込み、内傾させる。内端部はツマミ出さず、Ⅱ型式と比べ丸みが強い。外端部はツマミ出しの痕跡が認められず、突出しない。外端部下側を弱くナデることで屈曲部に稜を成す。

C期

把手付鍋系譜1-Ⅳ型式、把手付鍋系譜2-Ⅱ型式、播鉢Ⅲ型式が認められる。

(把手付鍋)

Ⅰ-Ⅳ型式は、体部から連続して口縁部を成形したのち、口縁端部の外面側に幅1cm程の粘土紐を接合し、口縁部・鈎部を成形する。鈎部はつまみ出さず、貼り付けた粘土紐の下端部をなで窪ませることで瘤状の段を強調する。Ⅲ型式と比べて鈎部の隆起は弱い。

2-Ⅱ型式は、口縁部・鈎部ともに突出が弱く短小化し、口縁部・鈎部の境界に沈線状の窪みが認められるのみとなる。把手部・底部の調整は、前段階の特徴が継続する。

	把手付鍋	播鉢
A	系譜 1 I 下川津_SD IV-01_540-2 東山崎・水田遺跡 260	I 沖遺跡 3-1 区 SD3028 239
	II 西末則遺跡_SDe26a・b_563 東山崎・水田遺跡 1220	II 庄八尺遺跡 161
B	III 下川津_SX IV-01_533-4 東山崎・水田遺跡 124 図・262	III 庄八尺遺跡 155
	IV 西末則遺跡_SXe07・08_765 東山崎・水田遺跡 123 図・261	
C	V 沖遺跡 324	IV 高松城跡(西の丸町地区) 1570
	III 東山崎・水田遺跡 327 図・1223	V 沖遺跡 3-1 区 SD3032 260
E		VI 東坂本秋常遺跡 304

第 239 図 土師質土器把手付鍋・播鉢編年図

(播鉢)

Ⅲ型式が継続すると考えられる。

D 期

把手付鍋系譜1-V型式、把手付鍋系譜2-Ⅲ型式、播鉢Ⅳ・V型式が認められる。

(把手付鍋)

1-V型式は、体部を指先で折り曲げることで、内傾した口縁部を成形する。鐔部の隆起はほぼ認められず、屈曲部の下側をなでることで屈曲部に稜を成す。

2-Ⅲ型式は、口縁部を緩やかに内傾させて端部を太く丸く取める。2-II型式に認められた沈線状の窪みは認められず、鐔部の痕跡は消失している。把手部外縁はケズリ整形が継続する。底部は当該期に位置付けられる資料2点ともに欠損しており、タタキの有無は不明である。

(播鉢)

Ⅳ型式は、口縁部はⅢ型式と同様に全体を折り込み内傾させるが、外端部下側のナデはⅢ型式と比べ弱く、稜は丸みを帯びる。口縁端部には、面取り状のナデ整形が認められる。

V型式は、Ⅳ型式同様に口縁部全体を折り込んで内傾させるものの、Ⅳ型式と比べるとさらに屈曲は弱い。Ⅲ型式・Ⅳ型式に認められた外端部下側のナデは消失して稜は不明瞭化し、体部から緩く屈曲する。外端面に強い横ナデを施し、口縁部の屈曲を強調する。Ⅳ型式に認められた口縁端部の面取りは認められない。

E 期

播鉢Ⅳ型式が認められる。当該期に位置づけられる把手付鍋は、現時点では確認できない。

播鉢Ⅵ型式は、全形のわかる資料が1例のみと限られるが、口縁部の屈曲がさらに弱まり、直線的な体部から緩く弧を描いて口縁部に至り、端部がわずかに内傾する。口縁端部は玉縁状に肥厚する。

5. 今後の課題

以上、1～3項での検討から、土師質土器把手付鍋・播鉢の口縁部形態と成形技法の変化をもとに、暫定的な編年案を提示した。

しかしながら、3項での検討のとおり、中世後期の各遺跡は同一地点で長期間継続する傾向が認められ、出土遺物も時期差のあるものが混在する。年々、当該期の遺物の出土例は蓄積されつつあるものの、上記の混在が認められる以上、編年案の細分、共伴遺物からの併行関係推定の精度向上が困難な状況に大きな変化があるとは考え難い。今後、本節で検討を加えた口縁部周辺の属性とともに、器形や内面調整の変化、把手付鍋把手部の成形技法、播鉢卸目のバリエーションと変化など、口縁部以外の属性との組み合わせ等をもとに、把手付鍋・播鉢の型式学的検討をより深化させることが必要と考えられる。また、本節では主として中国産磁器、備前焼・肥前陶磁器を中心とした国産陶磁器の年代観をもとに資料群の先後関係を推定したが、その他の共伴遺物、特に在地産の皿・壺・火鉢等の変遷を把握し、把手付鍋・播鉢との共伴関係を確認することで、併行関係の推定をより正確化・詳細化することができる可能性がある。

また、把手付鍋ではしだいに口縁部・鐔部に縮小化・痕跡器官化する傾向が認められるのに対して、

把手・円孔にはその傾向がみられず、最終段階まで吊るして火にかけるという機能を有していたものと推定できる。一方で、把手上面から口縁部内面に円孔を開ける構造は、鍋・内容物の重量を口縁部の2点のみで支えるものであり、口縁部に紐または金具を通すことで、口縁部に蓋をかける際にも蓋に干渉すると思われる。機能的とは言い難い形態の把手付鍋が香川県域・徳島領域のみで長期間使用され続ける背景は、円孔部の磨減痕や内外面の被熱痕・吹きこぼれ痕など、使用に伴う痕跡の観察結果をあわせて検討する必要がある。播鉢では、今回の検討対象とした資料の多くに、外面・口縁部に煤や被熱変色、内面にコゲや変色が認められ、高い頻度で「摺鉢鍋」（荻野 1990）として使用されたものと推定される。備前焼をはじめとする陶器製播鉢が流通し、同一遺構内で共伴する事例も大部分を占めるにも関わらず、18世紀代まで土師質土器播鉢の使用が続く理由の1つに、「摺鉢鍋」としての使用がある可能性が考えられる。把手付鍋、播鉢ともに、その機能や使用法については、今後さらなる検討が必要だろう。

本文註

- 1 備前焼の編年については、乗岡実 2002「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会に基づく。
- 2 香川県歴史博物館（現香川県立ミュージアム）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の際に出土した遺物である。高松城西の丸町地区と区別するため以下では高松城歴史地区と呼称する。

引用・参考文献

- 荻野繁春 1990「財産目録に顔を出さない焼物 一西日本の摺鉢一」『国立歴史民俗博物館研究報告第25集』国立歴史民俗博物館
- 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 乗岡実 2002「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
- 松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発掘調査報告書

【香川県】
香川県教育委員会・日本道路公団1987「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊 中村道跡 龍崎跡 上ノ坊道跡」
香川県教育委員会・徳島県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団1990a「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅤⅡ 下川津道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1990b「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第八冊 延命道跡」
香川県教育委員会・(財)香川埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局1992「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 東山崎・水田道跡」
香川県教育委員会・(財)香川埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局1996a「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 南田東・中村道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1996b「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18冊 国分寺橋弁道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1996c「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12冊 郡家一里原道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社1996a「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 空港跡地跡路Ⅰ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1996b「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24冊 郡家田代道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社1997a「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 空港跡地跡路Ⅱ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・建設省中国地方建設局1997b「四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 空港跡地跡路(地下)」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1997c「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27冊 三乘島道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社1998a「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 空港跡地跡路Ⅲ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1998b「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第30冊 川津ノ又道跡Ⅱ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1998c「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29冊 龍川五糸道跡Ⅱ・飯野分山崎南道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター1999a「香川歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1999b「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第32冊 中興西井道跡Ⅱ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団1999c「四国国土・建設省四国地方建設局、香川県土木部2000a「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2000b「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 空港跡地跡路Ⅳ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2000c「国道高松工区東山崎環道建設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 雄山古墳跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2001a「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5冊 高松城跡(西の丸町地区)」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2001b「平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報書 浜ノ町道跡 高松城跡(西の丸町 西行道跡)」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部2002「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第39冊 原田道跡Ⅰ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2003a「国道高松田西志摩線道路改良事業及び高松高松長尺尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 寺田・産宮道跡 南天尾道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社2003b「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 空港跡地跡路Ⅴ(G地区)」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2003c「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 高松城跡(西

の丸町地区)」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2003d「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5冊 高松城跡(西の丸町地区Ⅰ)」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2003e「県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 山崎道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団2004a「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第50冊 善門池西道跡」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部2004b「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第47冊 成重道跡」
香川県教育委員会・日本道路公団2004c「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52冊 谷道跡」
香川県教育委員会・日本道路公団2004d「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第51冊 川上道跡・三崎川道跡」
香川県教育委員会・香川県土地開発公社2004e「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7冊 空港跡地跡路Ⅶ」
香川県教育委員会・香川県土地開発公社2004f「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8冊 空港跡地跡路Ⅷ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター・日本道路公団2004g「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第48冊 中興東井道跡・正新道跡・八幡道跡」
香川県教育委員会・香川埋蔵文化財調査センター・国土交通省四国地方整備局・日本道路公団2004h「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第53冊 中春道跡 林・都城道跡Ⅱ 東山崎・水田道跡Ⅱ」
香川県教育委員会・財団法人香川埋蔵文化財調査センター2004i「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 浜ノ町道跡」
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局2004j「一般国道32号漢越バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊 買田道跡Ⅱ」
香川県教育委員会2005「国道高松志度線および国道丸亀豊岡新線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 花池北道跡、西久保谷道跡」
香川県教育委員会2006「繁林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 繁林公園」
香川県教育委員会2008a「国道高松長尺尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 尾崎西道跡」
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局2008b「一般国道 32号線秋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 飯正道跡」
香川県教育委員会2008c「国道 438号道路改良事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 東元林道跡Ⅰ」
香川県教育委員会2008d「国道丸亀多度津建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書中東道跡Ⅱ 奥白方中道跡Ⅱ 奥白方南東道跡」
香川県教育委員会2009「国道多度津丸亀線道路改良事業(多度津工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 八尺入道跡」
香川県教育委員会2014「国道 438号道路改良工事、国道高松宇津津線道路改良工事、城山川河川交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 津津六反地道跡 川津昭和道跡」
香川県教育委員会2015「香川農業実業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5冊西末道跡Ⅱ」
香川県教育委員会2016a「国道高松長尺尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 十川東・平田道跡」
香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構四国こどもとととの医療センター2016b「独立行政法人国立病院機構香南寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7冊 田津橋道跡Ⅶ」
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局2017a「国道11号大内白鳥バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 田中道跡」
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局2017b「国道11号大内白鳥バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 蟹水前道跡」
香川県教育委員会2018a「香川県豊高松北警察署建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡」
香川県教育委員会・最高裁判所2018b「高松地家裁判官宅宇宮新工事に伴う発掘調査報告書 丸亀城跡(大手町地区)」
香川県教育委員会2018c「香川県立丸亀競球場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 平池南道跡」
香川県教育委員会2018d「国道栗原山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 尾の上道跡 原田・中尾道跡」
香川埋蔵文化財センター2019a「国道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 本町二丁目道跡」
香川県教育委員会2019b「都市計画道路寺富富士見町線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 本町二丁目道跡」
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局2020a「国道11号大内白鳥バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 三股北道跡」
香川県教育委員会2020b「国道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘

沖道跡 (香川県歴史文化財センター編 2014年)

調査報告 中又北道跡

香川県教育委員会 2023 『限道内史香南館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊 池内古田道跡・池内御所前道跡』

【香南町 (現高松市)】

香南町教育委員会 1997 『山城跡跡—由良城跡発掘調査報告書—』

【さぬき市】

さぬき市教育委員会 2007 『ザンリスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 轟広道跡』

【普通寺市】

普通寺市教育委員会 2004 『普通寺市内発掘発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 菊塚古墳 普通寺日壇内 普通寺陣所跡 日塚古墳道跡』

【高松市】

高松市教育委員会 1999 『高松市東部運動公園 (仮称) 整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 美の坊道跡群Ⅰ(美ノ坊地区 (試掘) 大空古墳 金川溝古墳)』

高松市教育委員会 2000 『都市計画道路宮町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 川南・東道跡』

高松市教育委員会 2001a 『高松市港地区内開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第51集 鬼無藤井道跡』

高松市教育委員会 2001b 『太田第2上地区開発整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第04冊 松岡下所道跡』

高松市教育委員会 2001c 『都市計画道路福岡三谷線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊木大中村道跡』

高松市教育委員会・香川県弁護士会 2002 『香川県弁護士会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 高松城跡 (松平大膳家中屋敷跡)』

高松市教育委員会 2003a 『史跡高松城跡地入構台発掘調査費拠一平成11～13年度調査—』

高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜財団済生会支部香川県済生会 2003b 『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 日暮・松林道跡 (済生会)』

高松市教育委員会 2003c 『増原町道跡』

高松市教育委員会 2004a 『都市計画道路福岡三谷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第二冊 宗高坊城道跡』

高松市教育委員会・四電ビジネス株式会社 2004b 『新ヨコタンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡 (松平大膳家上屋敷跡)』

高松市教育委員会 2005a 『市街地内開発関連街路事業 (高松駅前線) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊高松城跡 (無量寿院跡)』

高松市教育委員会 2005b 『都市計画道路木丸無量寿街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 西ハセ上土居道跡』

高松市教育委員会・高松丸亀町商店街A街区市街地内開発組合 2006a 『高松丸亀町商店街A街区第一種市街地内開発事業に係る跡地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡 (隠路)』

高松市教育委員会 2006b 『高松市東部運動公園 (仮称) 整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 美の坊道跡群Ⅱ (美ノ坊古墳群・久米池道跡)』

高松市教育委員会 2006c 『都市計画道路宮町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 新田本村道跡』

高松市教育委員会 2007a 『原島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原島寺』

高松市教育委員会・高松市 2007b 『史跡高松城跡整備報告書第1冊 鉄門石出調査・保存整備工事報告書』

高松市教育委員会 2007c 『市街地内開発関連街路事業 (高松駅前線) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 高松城跡 (寿町一丁目)』

高松市教育委員会 2007d 『高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊美の坊道跡群Ⅲ (美の坊道跡Ⅴ区)』

高松市教育委員会 2007e 『特別史跡讃岐国分寺跡 如意輪寺遺跡 国分中西道跡 曳子山道跡』

高松市教育委員会 2008 『高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 高松城跡 (江戸長原跡Ⅱ)』

高松市教育委員会 2009 『高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡 (江戸長原跡Ⅱ)』

高松市教育委員会・高松市上下水道局 2012 『雨水管渠整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡 (大手前地区域内中学校跡地)』

高松市教育委員会 2014 『高松市立林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書林宗高道跡—第3次調査—』

高松市教育委員会・穴吹興産株式会社 2015 『丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡 (丸の内地区Ⅱ)』

高松市教育委員会・高松市 2016a 『史跡高松城跡整備報告書第8冊史跡高松城跡 (地入構台石垣整備)』

高松市教育委員会・有限会社都市企画設計 2016b 『丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡 (丸の内地区Ⅱ)』

高松市教育委員会 2020a 『都市計画道路高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5冊 高松城跡 (丸の内地区Ⅱ)』

高松市教育委員会 2020b 『特別史跡讃岐国分寺跡—1保存整備事業に伴う発掘調査報告書—道物跡Ⅱ』

高松市教育委員会・株式会社ハローズ 2023 『複合商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松ノ内道跡Ⅱ』

【仲南町 (現まんの町)】

仲南町教育委員会 1980 『花ノ音寺跡発掘調査概要—由一仲南町所在の中世山岳寺院跡の調査—』

【丸亀市】

丸亀市教育委員会 2014 『丸亀市立動物園保存園建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 観野西分定道跡』

丸亀市教育委員会 2021 『観山南コミュニティセンター移設に伴う発掘調査報告書 沖道跡』

第52表 土器観覧表(2)

観文 番号	面	調査区名	遺構名	内容	種類	調査		色調		胎土		法量 (cm)		底或 底径	残存 率	備考	
						外面	内面	外面 (胎土)	内面 (胎土)	石灰・ 角石	雲母	黒色粒	砂粒				口径
21	1	24	SD1005	① ~ 20cm 土器	古式 土器	口縁部: ヨコナテ、 体-底部: ハケ	口縁部: ハケ、 体-底部: ヲナテ、 裏-底部: ヲナテ	外面: 10YR5/2 灰黄褐色 内面: 10YR7/2 に近い 黄褐色	石灰・ 角石	-	-	口径 21.8	器高 21.8	-	良好 7.8	-	
22	1	24	SD1005	(25 ~ 70cm まで)	弥生 土器	口縁部: ヨコナテ、 体-底部: ヲナテ	口縁部: ヲコナテ、 裏-底部: 指オサエ、 体-底部: ハケ	外面: 7.5YR4/4 黄 内面: 7.5YR5/4 黄	中・並	-	-	(11.6)	-	-	良好 2.8	-	
23	1	24	SD1005	① ~ 20cm (0 ~ 20cm まで)	古式 土器	口縁部: マメツ	口縁部: マメツ	外面: 5YR7/6 橙 内面: 7.5YR7/4 に近い 黄褐色	中・並	-	-	-	-	-	欠	6.8	-
24	1	24	SD1005	① ~ 20cm (0 ~ 20cm まで)	古式 土器	口縁部: ヲコナテ、 体-底部: ハケ	口縁部: ヲコナテ、 体-底部: ハケ、 裏-底部: ミガ キ、 脚部: ナテ	外面: 10YR8/2 灰白 内面: 10YR8/2 灰白	中・並	-	-	(15.2)	12.6 (12.2)	-	6.8	-	
25	1	14	SD1005	-	古式 土器	口縁部: ヲコナテ、 体-底部: ハケ	口縁部: ヲコナテ、 体-底部: ハケ、 裏-底部: 指オサエ、 ナテ	外面: 10YR8/2 灰白 内面: 10YR8/2 灰白	中・並	-	-	(18.6)	37.5	-	良好 5.8	-	
26	1	24	SD1005	① ~ 25cm (0 ~ 25cm まで)	弥生 土器	口縁部: ヲコナテ、 体-底部: ハケ	口縁部: ヲコナテ、 体-底部: ハケ、 裏-底部: 未調整 ナテ	外面: NS/ 灰 内面: NS/ 灰	中・少	-	-	-	-	(11.4)	良好 2.8	-	
27	1	14	SD1006	-	古式 土器	口縁部: ハケ	口縁部: ハケ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	(7.2)	-	-	欠 1.8	-	
28	1	24	SD1006	-	弥生 土器	口縁部: ハケ	口縁部: ハケ	外面: 5YR5/6 明赤褐色 内面: 5YR7/3 に近い 黄褐色	中・並	-	-	(13.8)	-	-	良好 2.8	-	
29	1	24	SD1006	-	古式 土器	口縁部: ハケ	口縁部: ハケ	外面: 10YR7/3 に近い 黄褐色 内面: 10YR7/3 に近い 黄褐色	中・並	-	-	-	-	-	良好 8.8	-	
30	1	24	SD1006	-	古式 土器	口縁部: ハケ	口縁部: ハケ	外面: 10YR7/3 に近い 黄褐色 内面: 10YR7/3 に近い 黄褐色	中・並	-	-	-	-	(5.9)	良好 2.8	-	
31	1	32	SD0020	①、④、⑤ 土器点周近	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・少	-	-	5.9	3.75	-	良好 8.8	-	
32	1	32	SD0020	①	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	7.6	3.5	-	良好 8.8	-	
33	1	32	SD0020	①	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	9.1	5.3	-	良好 7.8	-	
34	1	32	SD0020	①	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	10.9	4.9	-	良好 8.8	-	
35	1	32	SD0020	②	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・少	-	-	(10.1)	-	-	良好 5.8	-	
36	1	32	SD0020	②	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	11.4	5.7	-	良好 8.8	-	
37	1	32	SD0020	①、④、⑤ 土器点周近	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 5YR7/6 橙 内面: 5YR7/6 橙	中・並	-	-	(15.3)	12.7 11.4	良好 7.8	-		
38	1	32	SD0020	①、④、⑤ 土器点周近	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	9.0	6.6	-	良好 7.8	-	
39	1	32	SD0020	①	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR8/3 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	8.6	7.2	-	欠 7.8	-	
40	1	32	SD0020	①、④、⑤ 土器点周近	古式 土器	口縁部: ヲコナテ	口縁部: ヲコナテ	外面: 10YR7/3 に近い 黄褐色 内面: 10YR8/3 黄褐色	中・並	-	-	(15.8)	-	-	欠 1.8	-	

第53表 土器観音表(3)

観音番号	面	調北区分名	遺跡名	内容	種類	図様	調整		色調		胎土				口径	底径	高さ	重量	備考	
							外面	内面	外面(胎土)	内面(列頭)	石灰・長石	角閃石	雲母	重色粒						砂粒
41	1	32	SO000	① 古式土器	壺	外面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	内面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	外面 75YR7/4に赤い色	内面 10YR8-2灰白	-	-	-	-	11.5	9.5	-	良好	7.8	-	
42	1	32	SO000	① 39出土、縄文周住	壺	外面 指サエ後ヨコナ子、ハナ目I、マメツ、ヘラクレスI	内面 指サエ後ヨコナ子、指サエ後ヨコナ子、指サエ後ハナ目I、マメツ、ヘラクレスI	75YR6/4に赤い色	10YR6-2灰黄褐色	-	-	-	-	(8.4)	-	-	良好	2.8	-	
43	1	32	SO000	① 古式土器	壺	外面 指サエ後ナナ子、ハナ目I、マメツ、ヘラクレスI	内面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	75YR7/6黄褐色	75YR5-6明褐色	-	-	-	-	10.0	11.9	-	良好	7.8	-	
44	1	32	SO000	① 古式土器	壺	外面 指サエ後ナナ子、ヨコナ子、ヘラクレスI	内面 指サエ後ナナ子、ヨコナ子、ヘラクレスI	75YR7/4に赤い色	10YR8-2灰白	-	-	-	-	(10.0)	13.4	-	良好	6.8	-	
45	1	32	SO000	①、遺跡南縁土器	壺	外面 指サエ後ナナ子、ヨコナ子、ヘラクレスI	内面 指サエ後ナナ子、ヨコナ子、ヘラクレスI	10YR7/2に赤い色	10YR7-2に赤い色	中・並	-	-	-	(11.7)	-	-	良好	6.8	-	
46	1	32	SO000	① 古式土器	壺	外面 指サエ後マメツ	内面 マメツ	10YR5.4に赤い色	10YR7/2に赤い色	中・並	-	-	-	(15.6)	-	-	良好	2.8	-	
47	1	32	SO000	① 古式土器	壺	外面 指サエ後マメツ	内面 指サエ後マメツ	5YR6/6黄褐色	10YR7/4に赤い色	中・並	-	-	-	(15.6)	-	-	良好	2.8	-	
48	1	32	SO021	北	古式土器	壺	外面 マメツ	内面 指サエ後ナナ子I	75YR6-6黄褐色	中・並	-	-	-	(8.0)	-	-	良好	1.8	-	
49	1	34	SO009	② 弥生土器	壺	外面 口縁～体部：ヨコナ子I	内面 口縁～体部：ヨコナ子I	75YR7/6黄褐色	2.5YR6-2灰黄褐色	-	-	-	-	(17.8)	-	-	良好	1.8	-	
50	1	34	SO009	③ 弥生土器	壺	外面 口縁～体部：マメツ	内面 口縁～体部：マメツ	10YR7/3に赤い色	10YR7/2に赤い色	中・少	-	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	
51	1	22北	SO009	弥生土器	瓶	外面 底部：高台貼付後ナナ子体一底部；不明	内面 口縁～体部；不明	10YR5-6黄褐色	10YR5-6黄褐色	中・並	-	-	-	-	-	-	(6.6)	良好	2.8	-
52	1	34	SO040	③ 土器	杯	外面 口縁～体部：ヨコナ子I	内面 口縁～体部：ヨコナ子I	10YR8-2灰白	10YR8-2灰白	-	-	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	
53	1	32	SR001	①上層	壺	外面 指サエ後ナナ子I、マメツ	内面 指サエ後ナナ子I、マメツ	2.5YR4/1黄褐色	2.5YR4/1灰白	-	-	-	-	(12.6)	-	-	良好	2.8	-	
54	1	34	SR001	砂層(遺下層)あま戸	壺	外面 同様ナナ子、ヘラクレスI	内面 同様ナナ子	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	(7.1)	良好	2.8	-
58	1	32	SR001	下層	高性	外面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	内面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	2.5YR6/4黄褐色	10YR6-2灰黄褐色	-	-	-	-	14.3	11.9	95	良好	8.8	-	
59	1	32	SR001	下層	高性	外面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	内面 指サエ後ナナ子、ヘラクレスI	10YR7/3に赤い色	2.5Y7/2灰黄褐色	中・並	-	-	-	(14.8)	11.4	94	良好	7.8	-	
60	1	32	SR001	下層	高性	外面 マメツ、ヘラクレスI	内面 マメツ、ヘラクレスI	10YR7/2に赤い色	10YR7-2に赤い色	中・並	-	-	-	20.6	14.3	11.5	良好	7.8	-	
61	1	32	SR001	下層	高性	外面 マメツ	内面 マメツ	5YR5-6明褐色	5YR5-6明褐色	-	-	-	-	(10.7)	-	-	良好	1.8	-	
62	1	32	SR001	高性	壺	外面 指サエ後ヨコナ子	内面 指サエ後ヨコナ子	10YR6/4に赤い色	10YR5-1黄褐色	-	-	-	-	-	-	-	良好	7.8	-	
63	1	32	SR001	高性	壺	外面 マメツ	内面 マメツ	2.5YR4/1に赤い色	2.5YR5-4に赤い色	-	-	-	-	-	-	-	良好	2.8	-	

第54表 土器観覧表 (4)

観文 番号	調査区名	遺構名	内容	種類	器種	調査	色調	胎土	口径	器高	口径	底径	底或	残存 状況	備考	
64	1	32	SR2001	下層	古式 土師器	甕か 壺	外面 ヨコナデ、ハケ目後 ハケ目	内面 7.5YR5.4に赤 い濁	石英・ 角閃石 雲母	黒色粒 砂粒	-	-	-	1.8 未測	-	
65	1	1,2	SR2001	後編期間 前部遺部	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目後 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR5.4に赤 い濁	外面 (胎土) 2.5Y7.2灰黄	-	-	-	(60)	良好 中	1.8 未測	-	
66	1	32	SR2001	-	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR6.2灰黄	外面 (胎土) 10YR6.2灰黄	-	-	(17.0)	-	良好	1.8	-	
67	1	32	SR2001	-	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR6.2灰黄	外面 (胎土) 10YR6.2灰黄	-	-	(14.5)	-	良好	1.8	-	
69	1	21	SR1002	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.1灰白	胎土 10YR8.1灰白	-	(14.4)	-	良好	1.8	-	
70	1	23	SR2001	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.2灰白	胎土 10YR8.2灰白	-	-	(60)	良好	1.8	-	
71	1	23	SR2001	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.2灰白	胎土 10YR8.2灰白	-	-	(10.5)	-	良好	1.8	器付あり
72	1	31	SR3102	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 5B5.1黄灰	胎土 5B5.1黄灰	-	-	-	-	1.8 未測	-	
73	1	31	SR3104	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR7.2明濁	胎土 7.5YR7.2明濁	-	-	-	-	1.8 未測	-	
74	1	31	SR3104	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR7.4に赤い濁	胎土 10YR7.4に赤い濁	-	中・少	(45.6)	-	良好	2.8	器付あり 体部外周 内部腐食
76	1	32	SR2001	-	陶器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR7.2明濁	胎土 7.5YR7.2明濁	-	中・少	(11.0)	-	良好	1.8	器付あり 内部腐食
77	1	32	SA3207	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 5Y6.4灰	胎土 5Y6.4灰	-	-	(14.0)	-	良好	1.8	器付あり
78	1	32	SR2001	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.2灰白	胎土 10YR8.2灰白	-	-	(50)	良好	2.8	-	
79	1	32	SR2001	-	陶器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 N7/灰白	胎土 N7/灰白	-	-	-	-	1.8 未測	-	
80	1	32	SR2001	-	陶器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 N8/灰白	胎土 N8/灰白	-	-	-	-	1.8 未測	-	
81	1	32	SR2002	-	陶器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 N7/灰白	胎土 N7/灰白	-	-	(98)	良好	1.8	-	
82	1	32	SR2002	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR8.3灰黄	胎土 7.5YR8.3灰黄	-	(28.8)	-	-	良好	1.8	-
83	1	32	SR2004	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.2灰白	胎土 10YR8.2灰白	-	-	-	-	7.5 良好	7.8	-
84	1	31	SR2006	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.3灰黄濁	胎土 10YR8.3灰黄濁	-	中・少	-	-	1.8 未測	-	
85	1	31	SR2006	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR7.4に赤い濁	胎土 7.5YR8.4灰黄	-	中・少	-	-	1.8 未測	-	
86	1	31	SR2009	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 10YR8.3灰黄濁	胎土 10YR8.3灰黄濁	-	中・少	-	-	1.8 未測	-	
87	1	31	SR2009	-	土師質 土器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR7.4に赤い濁	胎土 7.5YR7.4に赤い濁	-	中・少	-	-	1.8 未測	-	
88	1	31	SR2009	-	陶器	甕	外面 ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、指オサ工後 体部: 瓶ナデ後ミガキ体 ・底部: マメフ	内面 7.5YR6.3に赤い濁	胎土 7.5YR6.3に赤い濁	-	中・少	38	良好	7.8	器付あり	

第55表 土器観音表(5)

調査番号	調査地名	遺構名	内容	種類	器種	調整		色調		土土				法量 (cm)	破成	埋存率	備考	
						外面	内面	外面 (土土)	内面 (土土)	角四石	雲母	黒色粒	砂粒					口径
89	1	34	SK3009	-	陶器	葉	口縁部: 同軸ナデ 体部: ナデ, 同軸ナデ	10YR4/1 黒灰 7.5YR7.6 黒	2.5YR5.6 明赤	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	備前焼	
91	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: 同軸ナデ 体部: 同軸ナデ	7.5YR7.6 黒	7.5YR7.6 黒	-	-	-	-	6.4	良好	2.8	-	
92	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: 同軸ナデ 体部: 同軸ナデ	5YR6.6 黒	5YR6.6 黒	-	-	-	-	7.0	良好	1.8	-	
93	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR6.4 に赤 5YR7.2 に赤	10YR7.2 に赤	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	外周埋付着	
94	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	5YR6.6 黒	5YR6.6 黒	-	-	-	-	-	-	2.8 土器	外周埋付着	
95	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR6.3 に赤 7.5YR7.3 に赤	7.5YR7.3 に赤	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	外周埋付着	
96	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR7.4 に赤 7.5YR8.4 黒	7.5YR8.4 黒	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	内・外周埋付着	
97	1	34	SK3011	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR7.3 に赤	7.5YR7.3 に赤	-	-	-	-	9.2	良好	1.8	-	
98	1	34	SK3011	-	陶器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	5YR4/2 灰黒	2.5YR6.6 黒	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	備前焼	
99	1	34	SK3011	-	白磁	湯反皿	口縁部: 施釉 体部: 施釉	N8.1 灰白	N8.1 灰白	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	-	
100	1	34	SK3014	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR5.2 灰黄緑	10YR7.3 に赤	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	-	
101	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR7.2 に赤	10YR6.2 灰黄緑	-	-	-	-	6.6	良好	4.8	-	
102	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR8.4 灰黄緑	10YR8.4 灰黄緑	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	-	
103	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR3/1 黒	7.5YR6.4 に赤	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	-	
104	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR4/1 黒灰	10YR4/1 黒灰	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	外周埋付着	
105	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR8.3 灰黄	7.5YR8.3 灰黄	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	外周埋付着	
106	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR7.3 に赤	7.5YR8.3 灰黄	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	-	
107	1	34	SK3018	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	5Y7.1 灰白	5Y5.3 灰赤	-	-	-	-	14.6	良好	1.8	肥前系	
113	1	34	SK3025	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR7/1 明赤	7.5YR6.3 に赤	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	-	
114	1	34	SK3025	-	陶器	皿	口縁部: 施釉 体部: 施釉	5Y6.2 灰赤	5Y7.1 灰白	-	-	-	-	-	-	1.8 土器	肥前系	
115	1	34	SK3031	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR8.3 灰黄緑	10YR8.3 灰黄緑	-	-	-	-	8.6	1.3	6.0	良好	2.8
116	1	34	SK3031	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR8.2 灰白	10YR8.2 灰白	-	-	-	-	8.9	1.5	6.4	良好	1.8
117	1	34	SK3033	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	7.5YR8.2 灰白	7.5YR8.2 灰白	-	-	-	-	10.9	-	-	良好	1.8 土器
118	1	34	SK3033	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	10YR8.3 灰黄緑	7.5YR8.4 灰黄	-	-	-	-	23.4	-	-	良好	1.8
119	1	34	SK3031	-	土器	葉	口縁部: ナデ 体部: ナデ	5YR6.6 黒	5YR6.6 黒	-	-	-	-	-	-	(7.0)	良好	3.8

第56表 土器観察表 (6)

調査番号	調査区名	遺構名	内容	器種	器種	調査		色調			胎土				法量 (cm)	底径	口径	器高	底径	底色	保存率	備考
						外面	内面	外面 (胎土)	内面 (胎土)	石瓦・灰石	角四石	雲母	黒色粒	砂粒								
120	1	32	SX3003	土師器 小形鉢	ヨコナテ、指オサエ後ヨコナテ、指オサエ後ヨコナテ	ヨコナテ、指オサエ後ヨコナテ、指オサエ後ヨコナテ	5YR8/3 淡黄	中・並	-	-	-	-	-	(10.5)	-	-	-	-	-	良好	1/8	-
121	1	32	SX3003	土師器 足差	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(20.9)	-	-	-	-	-	良好	1/8	-
122	1	32	SX3003	須恵器 椀	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	N8/ 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(5.6)	-	-	-	-	良好	2/8	10ヶ山窯系	
123	1	34	SX3008	陶器 皿	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR8/3 淡黄	中・少	-	-	-	-	-	(3.8)	-	-	-	-	良好	1/8	-	
124	1	14	SD1007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	7.5YR7/6 黄	中・少	-	-	-	-	-	(6.3)	-	-	-	-	良好	1/8	-	
125	1	14	SD1007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR5/6 黄	中・並	-	-	-	-	-	(6.3)	-	-	-	-	良好	1/8	-	
126	1	14	SD1009	白磁 椀	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	5Y7/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(6.6)	-	-	-	-	良好	1/8	中国製	
127	1	32	SD3001	須恵器 鉢	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	N7/ 灰白	中・並	-	-	-	-	-	20.2	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
128	1	32	SD3005	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	7.5YR5/4 に並い	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
129	1	34	SD3005	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	7.5YR6/6 黄	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	1/8	備付書	
130	1	32	SD3005	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(19.5)	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
131	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR8/3 淡黄	中・並	-	-	-	-	-	(26.2)	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
132	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	2.5YR8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(22.4)	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
133	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR5/2 灰黄	中・並	-	-	-	-	-	(22.0)	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
134	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	7.5YR6/4 に並い	中・並	-	-	-	-	-	(23.6)	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
135	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR8/4 淡黄	中・並	-	-	-	-	-	(7.5)	-	-	-	-	良好	2/8	-	
136	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	2.5YR7/3 に並い	中・並	-	-	-	-	-	(15.2)	-	-	-	-	良好	8/8	-	
137	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(60)	-	-	-	-	良好	1/8	1/8 土師器	
138	1	32	SD3007	土師器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	N8/ 灰白	中・並	-	-	-	-	-	(12.0)	-	-	-	-	良好	1/8	肥前系	
139	1	32	SD3007	須恵器 椀	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10YR7/3 に並い	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	6/8	10ヶ山窯系	
140	1	32	SD3007	陶器 鉢	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	7.5YR7/4 に並い	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	1/8	肥前系	
141	1	32	SD3007	陶器 椀	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	2.5Y7/1 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	6/8	肥前系	
142	1	32	SD3007	陶器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	2.5YR4/4 に並い	中・並	-	-	-	-	-	(28.2)	-	-	-	-	良好	1/8	備前焼	
143	1	32	SD3007	陶器 土器	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	ヨコナテ、指オサエ、指オサエ後マメツ	10R4/4 赤黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	1/8	備前焼	

第57表 土器観音表(7)

観音番号	面	調査区名	通称名	内容	種類	器種	調整		色調		土土				法量 (cm)	破砕	保存率	備考	
							外面	内面	外面(土土)	内面(土土)	石英・長石	角閃石	雲母	黒色粒					砂粒
148	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR8/3 灰青 5YR6/6 靑 2.5YR6.6 明黄 10YR7/3 L-赤 10YR8/2 灰白	10YR8/3 灰青 5YR6/6 靑 2.5YR6.6 明黄 10YR7/3 L-赤 10YR8/2 灰白	-	-	-	7.8	1.4	3.2	良好	7.8	-
149	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	5YR6/6 靑 2.5YR6.6 明黄 10YR7/3 L-赤 10YR8/2 灰白	5YR6/6 靑 2.5YR6.6 明黄 10YR7/3 L-赤 10YR8/2 灰白	-	-	-	7.9	1.15	6.5	良好	6.8	-
150	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR7/3 L-赤 10YR8/2 灰白	10YR7/3 L-赤 10YR8/2 灰白	-	-	-	(9.4)	1.4	(7.0)	良好	2.8	-
151	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	杯	同転ナデ	同転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	良好	土器	-
152	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	7.5YR8/4 黄 10YR8/2 灰白	7.5YR8/4 黄 10YR8/2 灰白	-	-	(14.2)	3.3	(7.0)	良好	1.8	-	
153	1	32	SD3014	②上層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR7/6 靑 2.5YR8/2 灰白	10YR7/6 靑 2.5YR8/2 灰白	-	-	(13.6)	-	-	良好	1.8	-	
154	1	32	SD3014	②上層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	-	-	14.0	3.6	8.1	良好	7.8	-	
155	1	32	SD3014	②上層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	(13.3)	4.0	7.7	良好	4.8	-	
156	1	32	SD3014	②上層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	5YR7/6 靑	5YR7/6 靑	-	-	(11.8)	3.7	(6.7)	良好	1.8	-	
157	1	32	SD3014	②上層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	(8.3)	良好	6.8	-
158	1	32	SD3014	②上層	土師器	羽釜	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR8/2 灰白 10YR7/3 L-赤 5YR6/3 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR5/2 灰青 10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白 10YR7/3 L-赤 5YR6/3 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR5/2 灰青 10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	良好	土器	-
159	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	罎	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR7/3 L-赤 5YR6/3 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR5/2 灰青 10YR8/2 灰白	10YR7/3 L-赤 5YR6/3 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR5/2 灰青 10YR8/2 灰白	-	-	(32.6)	-	-	良好	土器	-	
160	1	32	SD3014	②上層	土師質土器	罎	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR5/2 灰青 10YR8/2 灰白	10YR5/2 灰青 10YR8/2 灰白	-	-	(39.0)	-	-	良好	1.8	-	
161	1	32	SD3014	上層	須恵器	罎	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	(6.6)	良好	2.8	十嵐山部系
162	1	32	SD3014	①上層	土師質土器	瓶	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	N4/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰	N4/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰	-	-	-	-	-	(6.4)	良好	2.8	-
163	1	32	SD3014	②上層	青磁	瓶	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰	N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰 N5/灰	-	-	(15.8)	-	-	良好	1.8	中国製	
164	1	32	SD3014	②上層、西面	青磁	瓶	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	5Y6/2 灰青 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤	5Y6/2 灰青 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤	-	-	(16.2)	6.8	(6.0)	良好	3.8	中国製	
166	1	32	SD3014	①下層	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤	10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤	-	-	(8.1)	1.4	6.4	良好	6.8	-	
167	1	32	SD3014	②下層	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	2.5YR7/4 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤	2.5YR7/4 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤 10YR7/2 L-赤	-	-	8.0	1.3	5.7	良好	7.8	-	
168	1	32	SD3014	赤下層 起部	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	-	-	7.9	1.4	5.3	良好	6.8	-	
169	1	32	SD3014	①下層	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	5YR7/6 靑	5YR7/6 靑	-	-	(7.2)	1.6	(5.3)	良好	2.8	-	
170	1	32	SD3014	赤下層 起部	土師質土器	皿	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	-	-	(8.6)	1.25	(5.7)	良好	1.8	-	
171	1	32	SD3014	①下層	土師質土器	杯	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ 同転ナデ	5YR6/6 靑	5YR6/6 靑	-	-	(12.2)	3.1	(7.9)	良好	1.8	-	

第58表 土器観察表(8)

編文 番号	調査区名	遺物名	内容	種類	調査		色調		胎土				法量 (cm)	底径	底高	備考
					外面	内面 (マメツ)	外面 (胎土)	内面 (胎土)	石英・ 角閃石	雲母	黒色粒	砂粒				
172	1	32南東 側丘部	下層	土師質 土器	杯	マメツ	版ナデ (マメツ)	10YR5-2 灰黄緑	10YR5/1 黄灰	-	-	-	(129)	-	-	良好 1.8
173	1	32	①下層	土師質 土器	杯	マメツ	マメツ	2.5YR8-2 灰白	2.5YR8/2 灰白	-	-	-	(131)	2.8	(83)	良好 1.8
174	1	32	②下層	土師質 土器	杯	割版ナデ、割版ヘウ 切刃後板目圧痕	同転ナデ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	-	-	-	13.2	4.0	7.4	良好 1.8
175	1	32	③下層	土師質 土器	杯	割版ナデ、割版ヘウ 切刃後板目圧痕	同転ナデ	10YR8-3 灰黄緑	10YR8-3 灰黄緑	-	-	-	(122)	3.5	(82)	良好 1.8
176	1	32	下層	土師質 土器	杯	割版ナデ、割版ヘウ 切刃後板目圧痕	同転ナデ、指ナデ	10YR8-2 灰白	10YR8-2 灰白	-	-	-	(14.4)	3.8	8.8	良好 1.8
177	1	32	①下層	土師質 土器	杯	割版ナデ (マメツ)、 割版ヘウ切刃後板目圧痕	同転ナデ、マメツ	10YR8-2 灰白	10YR8-2 灰白	-	-	-	(15.1)	3.8	(96)	良好 1.8
178	1	32南東 側丘部	下層	土師質 土器	杯	割版ナデ (マメツ)、 割版ヘウ切刃後板目圧痕	同転ナデ、マメツ	2.5YR5-6 明赤 濁	2.5YR5/6 明赤	中・少	-	-	-	(80)	-	良好 1.8
179	1	32	あせり下層	土師質 土器	杯	圧痕ナデ、割版ヘウ 切刃後板目圧痕	同転ナデ	2.5YR8-2 灰白	2.5YR8/2 灰白	中・少	-	-	-	(7.4)	-	良好 1.8
180	1	32	①下層	土師質 土器	碗	割版ナデ、唇付高竹、 割版ヘウ切刃	版ナデ、マメツ	10YR8-2 灰白	10YR8-2 灰白	-	-	-	-	(7.6)	-	良好 1.8
181	1	32南東 側丘部	下層	土師質 土器	碗	ココナデ、凹版1条、 指ナゲ、ハケ目 (マメツ)	ココナデ、版ナデ	10YR6-2 灰黄緑	10YR6/2 灰黄緑	-	-	-	-	-	-	良好 1.8
182	1	32	①下層	土師質 土器	碗	ココナデ、指ナゲ、 後ココナデ	ココナデ、ハケ目	2.5YR/1 黄灰	2.5YR/2 灰白	-	-	-	(35.6)	-	-	良好 1.8
183	1	32	あせり下層 松葉部	須恵器 白磁	付柱	唇付高竹、 割版ナデ	同転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	(8.4)	良好 1.8
184	1	32	①下層	白磁	碗	地輪	地輪	7.5GYR/1 明赤 灰	N8/ 灰白	-	-	-	(15.7)	-	-	良好 1.8
185	1	32	①下層	白磁	碗	地輪、同転ナデ	地輪	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	(16.0)	-	-	良好 1.8
188	1	13	底皿部 (編 砂部)	須恵器 皿	杯	口縁部：同転ナデ、 底部：同転ヘウ切刃	口縁・底部：同転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	中・少	-	-	-	-	(8.1)	良好 1.8
189	1	13	底皿部 (編 砂部)	土師質 土器	杯	体部：同転ナデ 底部：同転ヘウ切刃	同転ナデ	7.5YR8-6 黄 緑	7.5YR8-6 黄 緑	中・少	-	-	-	-	-	良好 1.8
190	1	13	①	土師質 土器	杯	口縁部：同転ナデ 口縁・体部：同転ナデ 体部：同転ヘウ切刃	同転ナデ	10YR8-2 灰白	10YR8-2 灰白	中・少	-	-	(13.3)	4.5	(80)	やや 軟
191	1	24	①	土師質 土器	杯	口縁部：同転ヘウ切刃 体部：同転ヘウ切刃	同転ナデ	7.5YR7/3 に赤 い帯	7.5YR7/3 に赤 い帯	中・中	-	-	-	-	(80)	良好 1.8
192	1	24	①	土師質 土器	杯	口縁部：同転ヘウ切刃 体部：同転ヘウ切刃	同転ナデ	10YR5/1 黄灰 い帯	7.5YR6/4 に赤 い帯	中・多	-	-	-	-	(68)	良好 1.8
193	1	13	①	土師質 土器	杯	口縁部：同転ナデ、 指ナゲ	同転ナデ、ハケ 目	7.5YR8-2 灰白	7.5YR8-2 灰白	中・少	-	-	(14.6)	-	-	良好 1.8
194	1	13	①	土師質 土器	碗	口縁部：同転ナデ、 体部：指ナゲ、 ナゲ	同転ナデ、 ハケ目	10YR8-2 灰白	10YR8-2 灰白	中・少	-	-	(15.3)	-	-	やや 軟
196	1	13	①	土師質 土器	碗	口縁部：同転ナデ、 体部：指ナゲ、 ナゲ	同転ナデ、 マメツ	7.5YR7/3 に赤 い帯	7.5YR7/3 に赤 い帯	中・少	-	-	(15.1)	-	-	やや 軟

第59表 土器観音表(9)

観音番号	面	調北区分名	遺跡名	内容	種類	調整		色調		土土		法量 (cm)	焼成	備考		
						外面	内面	外面(観土)	内面(列頭)	瓦石・瓦石	角四石				雲母	重色粒
196	1	24	SD3014	・	土胎質土器	口縁一部、同転ナフ 底面同転ナフ	口縁一部、同転ナフ 底面同転ナフ	75YR5/3に赤い色	75YR5/3に赤い色	・	・	(14.9)	・	1.8 土胎質に赤い色		
197	1	13	SD3014	・	土胎質土器	口縁一部、同転ナフ	口縁一部、同転ナフ	N8/灰白	25G78/1灰白	・	・	(15.6)	・	1.8 土胎質		
198	1	32	SD3014	・	土胎質土器	同転ナフ	同転ナフ	75YR7/4に赤い色	75YR7/4に赤い色	・	・	(14.0)	3.05	(7.0)	良好 2.8	
199	1	32	SD3014	・	土胎質土器	同転ナフ	同転ナフ	75YR5/4に赤い色	75YR5/4に赤い色	・	・	・	(7.8)	良好 2.8	・	
200	1	32	SD3014	②	土胎質土器	板ナフ後同ナフ	板ナフ後同ナフ	75YR5/2灰褐色	75YR6/3に赤い色	・	・	(15.8)	・	良好 5.8	和泉型	
201	1	32	SD3014	・	瓦器	同ナフ	同ナフ	N4/灰	N4/灰	・	・	(15.8)	・	良好 1.8	和泉型	
202	1	32	SD3014	・	瓦器	同ナフ	同ナフ	N4/灰	N4/灰	・	・	(15.8)	・	良好 1.8	和泉型	
203	1	32	SD3014	・	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	25YR2/6明赤	25YR2/6明赤	中・並	・	(6.1)	・	良好 2.8	・	
204	1	32	SD3013	①	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	25YR3/淡黄	25YR3/淡黄	中・並	・	(7.8)	1.3	(4.9)	良好 1.8	・
205	1	32	SD3013	③	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	・	・	(11.8)	3.1	(7.8)	良好 1.8	・
206	1	32	SD3013	②	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	75YR5/3黄緑	75YR5/3黄緑	・	・	(13.8)	・	良好 1.8	・	
207	1	32	SD3013	③	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	10YR8/2灰白	10YR8/3黄緑	・	・	(38.8)	・	良好 1.8	・	
208	1	32	SD3013	①	須恵器	同ナフ	同ナフ	N7/灰白	N7/灰白	・	・	・	(6.0)	良好 2.8	・	
209	1	32	SD3013	②	瓦器	同ナフ	同ナフ	N5/灰	N5/灰	・	・	・	3.9	良好 5.8	和泉型	
212	1	32	SD3016	・	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	10YR4/2灰黄緑	10YR4/2灰黄緑	・	・	・	・	良好 1.8	・	
213	1	32	SD3016	・	陶器	同ナフ	同ナフ	5G7/1明赤	5G7/1明赤	・	・	(10.7)	・	良好 1.8	肥前系	
215	1	32東瀬部	SD3025	・	須恵器	同ナフ	同ナフ	N8/灰白	N8/灰白	・	・	(12.8)	・	良好 1.8	土胎質	
217	1	32	SD3026	・	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	75YR5/6明赤	75YR5/6明赤	・	・	(13.8)	・	良好 1.8	土胎質	
218	1	32	SD3026	・	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	10YR8/2灰白	10YR8/3黄緑	・	・	・	・	良好 1.8	土胎質	
219	1	32	SD3026	・	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	10YR6/3に赤い色	10YR6/2灰白	・	・	・	・	良好 1.8	土胎質	
220	1	32	SD3026	・	土胎質土器	同ナフ	同ナフ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	・	・	(7.0)	・	良好 1.8	土胎質	
221	1	32	SD3026	・	陶器	同ナフ	同ナフ	N5/灰	N6/灰	・	・	(36.0)	良好 1.8	土胎質	肥前産	
222	1	32	SD3027	・	須恵器	同ナフ	同ナフ	N6/灰	N6/灰	・	・	(11.0)	良好 1.8	土胎質	・	
223	1	32	SD3027	・	陶器	同ナフ	同ナフ	N6/灰	N6/灰	・	・	(24.9)	・	良好 1.8	土胎質	

第60表 土器観察表 (10)

観文番号	調査区名	遺構名	内容	種類	調査			色調			胎土			法量 (cm)	構成	備考
					外面	内面	内面	外面 (胎土)	内面 (胎土)	口徑	高さ	底径	石灰・角四石			
224	1	SU0028	②	土師質 土器 土師 杯	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5YR7/4 に赤い肌	7.5YR7/4 に赤い肌	7.5YR7/4 に赤い肌	9.6	2.9	(65)	良好	2.8	-	-
225	1	SU0028	①	土師質 土器 杯	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5YR7/4 に赤い肌	7.5YR7/4 に赤い肌	7.5YR7/4 に赤い肌	23.4	-	-	良好	3.8	-	-
226	1	SU0028	②	土師質 土器 把手 付鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR7/3 に赤い肌	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	20.0	-	-	良好	1.8	-	-
227	1	SU0028	①	土師質 土器 把手 付鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5YR8/3 成黄褐色	7.5YR8/3 成黄褐色	7.5YR8/3 成黄褐色	18.6	-	-	良好	2.8	-	-
228	1	SU0028	①	土師質 土器 把手 付鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	21.5	-	-	良好	1.8	-	-
229	1	SU0028	②	土師質 土器 把手 付鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR7/2 に赤い肌	10YR8/2 成黄褐色	10YR8/2 成黄褐色	25.7	-	-	良好	1.8	-	-
231	1	SU0028	②	土師質 土器 把手 付鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5YR8/4 成黄褐色	7.5YR8/4 成黄褐色	7.5YR8/4 成黄褐色	30.4	-	-	良好	1.8	-	-
232	1	SU0028	②	土師質 土器 把手 付鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/3 成黄褐色	10YR7/3 に赤い肌	10YR7/3 に赤い肌	36.4	-	-	良好	1.8	-	-
233	1	SU0028	②	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR7/2 に赤い肌	10YR8/4 成黄褐色	10YR8/4 成黄褐色	51.8	-	-	良好	2.8	-	-
234	1	SU0028	①	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	2.5Y7/2 成黄褐色	10YR8/4 成黄褐色	10YR8/4 成黄褐色	60.8	-	-	良好	1.8	-	-
235	1	SU0028	①	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR7/2 に赤い肌	10YR8/2 成黄褐色	10YR8/2 成黄褐色	23.4	-	-	良好	1.8	-	-
236	1	SU0028	①	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	2.5YR7/6 成黄褐色	2.5YR7/6 成黄褐色	2.5YR7/6 成黄褐色	23.4	-	-	良好	1.8	-	-
237	1	SU0028	①	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/2 成黄褐色	10YR8/2 成黄褐色	10YR8/2 成黄褐色	32.4	-	-	良好	1.8	-	-
238	1	SU0028	①	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5YR7/6 成黄褐色	7.5YR7/6 成黄褐色	7.5YR7/6 成黄褐色	33.8	-	-	良好	1.8	-	-
239	1	SU0028	①	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5YR7/6 成黄褐色	7.5YR7/6 成黄褐色	7.5YR7/6 成黄褐色	39.8	-	-	良好	1.8	-	-
240	1	SU0028	①, ②	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	10.4	-	-	良好	1.8	-	-
241	1	SU0028	②	土師質 土器 鍋	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ハタ切リ後任意部	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	10.4	-	-	良好	1.8	-	-
242	1	SU0028	②	黒色 土器 板	底足: ナナ字、把付付	底足: ナナ字	N7/ 成黄褐色	7.5YR8/2 成黄褐色	7.5YR8/2 成黄褐色	5.8	-	-	良好	2.8	-	-
243	1	SU0028	①	黒色 土器 板	底足: ナナ字、把付付	底足: ナナ字	2.5YR8/4 成黄褐色	2.5YR8/4 成黄褐色	2.5YR8/4 成黄褐色	1.8	-	-	良好	1.8	-	-
244	1	SU0028	①	白磁 皿	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ナナ字	口縁-体部: 回転ナナ字	N8/ 成黄褐色	N8/ 成黄褐色	N8/ 成黄褐色	16.4	-	-	良好	1.8	-	-
245	1	SU0028	②	青磁 碗	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ナナ字	口縁-体部: 回転ナナ字	7.5Y7/1 成黄褐色	7.5Y7/1 成黄褐色	7.5Y7/1 成黄褐色	6.6	-	-	良好	1.8	-	-
253	1	SU0033	-	土師質 土器 皿	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ナナ字	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/2 成黄褐色	10YR8/2 成黄褐色	10YR8/2 成黄褐色	1.6	-	-	良好	1.8	-	-
254	1	SU0033	-	土師質 土器 鉢	口縁-体部: 回転ナナ字 底足: 回転ナナ字	口縁-体部: 回転ナナ字	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	10YR8/3 成黄褐色	1.8	-	-	良好	1.8	-	-

第61表 土器観音堂(11)

順 番号	調 査 区 名	遺 跡 名	内 容	器 種	器 種 類	調 整		色 調		土 質				備 考				
						外 面	内 面	外 面 (胎土)	内 面 (釉面)	瓦 蓋・ 瓦 石	角 四 石	重 色 粒	砂 粒		口 徑	口 徑 高	底 径	
255	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	指手 付溝	口縁部：ナナ 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ 体部：指手ナナ、ナナ	10YR8-2灰白	10YR8-2灰白	-	-	-	-	1.8 良好	-			
256	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	指手 付溝	口縁部：ナナ 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ 体部：指手ナナ、ナナ	10YR8-2灰白	10YR8-2灰白	-	-	-	-	1.8 良好	-			
257	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	指手 付溝	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR8-3黄褐色	10YR8-3黄褐色	-	-	-	-	1.8 良好	-			
258	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	火鉢	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5YR8-3浅黄	7.5YR7-4に赤 い層	-	-	(42.4)	-	1.8 良好	体部外面に 付着			
259	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	罎	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5YR2/1黒	7.5YR7/4に赤 い層	-	-	(46.5)	-	1.8 良好	体部外面に 付着			
260	1	SO002	①、②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ヨコナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	2.5Y6/4黄灰	2.5Y4/1黄灰	-	-	(24.4)	(14.5)	(10.8)	(10.8)	3.8 良好	体一部内 面に着色層	
261	1	SO002	①、②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR8-2灰白	10YR8-2灰白	-	-	-	-	1.8 良好	-	体部内面に 着色層		
262	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5YR8-3浅黄	10YR6/2灰黄緑	-	-	-	-	1.8 良好	-	-		
263	1	SK2018、 SO0001、 SO0002	②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5YR6/3に赤 い層	7.5YR5-2灰緑	-	-	-	-	11.2 良好	3.8 良好	-		
264	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	2.5Y8-2灰白	10YR5-1黄灰	-	-	-	-	(12.0)	良好	2.8 良好	体部内面に 着色層	
265	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR8-2灰白	2.5YR2灰白	-	-	-	-	7.7 良好	7.8 良好	-		
266	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	襦袢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR7/3に赤い 層	10YR7/3に赤い 層	-	-	-	-	(11.0)	良好	2.8 良好	-	
267	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	火鉢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR8-2灰白	7.5YR7/3に赤 い層	-	-	-	-	-	1.8 良好	-		
268	1	SO002	②下層	土師質 土師瓦	火鉢	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR7/2に赤い 層	10YR7/2に赤い 層	-	-	-	-	-	1.8 良好	-		
269	1	SO002	②下層	磁器器 高台付 磁器 皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR6/2灰 白	NT7/灰白	-	-	-	-	(10.2)	-	1.8 良好	-		
270	1	SK2018、 SO0001、 SO0002	②下層	磁器器 高台付 磁器 皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5YR8/1 黄灰	5Y8-1灰白	-	-	-	-	14.1	3.9	5.0	6.8	6.8	磁器系、 砂 目層の跡が 残る
271	1	SO002	②下層	陶器 溝線皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR7/3に赤い 層	N8/灰白	-	-	-	-	11.8	3.7	4.3	3.8	3.8	磁器系、 砂 目層の跡が 残る
272	1	SO002	②下層	陶器 皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR7/2灰白	10YR7/3に赤い 層	-	-	-	-	(13.7)	3.1	4.7	3.8	3.8	磁器系、 砂 目層の跡が 残る
273	1	SO002	②、②下層	陶器 溝線皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5YR7/2明 灰	7.5YR7/3に赤 い層	-	-	-	-	(14.6)	3.8	(6.0)	2.8	2.8	磁器系、 砂 目層の跡が 残る
274	1	SO002	②、②下層	陶器 溝線皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	10YR7/1灰白	10YR7/3に赤い 層	-	-	-	-	(13.5)	3.4	5.0	4.8	4.8	磁器系、 砂 目層の跡が 残る
275	1	SO002	②下層	陶器 皿	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	口縁部：ナナ、 体部：指手ナナ、ナナ	7.5Y6/2灰オ リーブ	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	4.6	良好	7.8 良好	7.8 良好	磁器系、 砂 目層の跡が 残る

第 62 表 土器観察表 (12)

編年 番号	調査区名	遺構名	内容	種類	調査	色調	胎土	法量 (cm)	底成	備考
276	34	SD002	①下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 7.5YR7/3 に、赤い帯	石英、 角閃石、 長石	口徑 器高 底径	56 - 56	良好 5.8	肥前系
277	34	SD002	①下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.7Y7/1 灰白	-	-	-	良好 1.8	肥前系
278	34	SD002	②下層	陶器 折縁皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.6/2 灰オリーブ 10YR7/2 に、赤い 帯	-	-	-	良好 2.8	肥前系、伊 日指の跡が 残る
279	34	SD002	①下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.6/2 灰オリーブ 10YR7/1 灰白	-	-	-	良好 1.8	肥前系
280	34	SD002	②下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.5/2 灰オリーブ、 5.5/8.1 灰白、赤い 帯	-	-	-	良好 6.8	肥前系
281	34	SD002	①下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.7/1 灰白	-	-	-	良好 2.8	肥前系
282	34	SD002	②下層	陶器 溝縁皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 10YR7/3 に、赤い 帯	-	-	-	良好 1.8	肥前系
283	34	SD002	②下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 7.5Y8/1 灰白	-	-	-	良好 3.8	肥前系
284	34	SD002	②下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.7/2 灰白	-	-	-	良好 1.8	肥前系
285	34	SD002	②下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 10YR7/1 灰白	-	-	-	良好 1.8	肥前系
286	34	SD002	①下層	陶器 溝縁皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 7.5YR6/2 灰 オリーブ	-	-	-	良好 2.8	肥前系
287	34	SD002	②下層	陶器 湖反皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 7.5Y7/1 灰白	-	-	-	良好 1.8	肥前系
288	34	SD002	②下層	陶器 皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 2.5Y7/1 灰白	-	-	-	良好 1.8	肥前系
289	34	SD002	②下層	陶器 白磁	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.7/2 灰白	-	-	-	良好 3.8	中国製
290	34	SD002	②下層	陶器 溝縁皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.6/2 灰オリーブ	-	-	-	良好 1.8	肥前系
291	34	SD002	②下層	陶器 器	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 2.5Y6/2 灰赤 い帯	-	-	-	良好 1.8	備前焼
292	34	SD002	②下層	陶器 器	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 2.5Y6/3 に、赤 い帯	-	-	-	良好 1.8	備前焼
293	34	SD002	②下層	陶器 葉	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 7.5YR4/1 刷灰	-	-	-	良好 1.8	備前焼
294	34	SD002	①下層	陶器 白磁	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 10Y7/1 明灰 2.5Y8.1 灰白	-	-	-	良好 3.8	中国製
295	34	SD002	②下層	青磁 瓶	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 2.5Y6/1 オリーブ	-	-	-	良好 4.8	中国製
296	34	SD002	②下層	陶器(砂付) 器	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 3.0Y7/1 明灰	-	-	-	良好 1.8	肥前系
297	34	SD002	②下層	陶器 小杯	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 3.0Y7/1 明灰	-	-	-	良好 8.8	中国製
300	34	SD002	③下層	陶器 溝縁皿	外面 底成：南房出し高台、 無地 内面 底成：釉敷 外面(胎土) 5.6/2 灰オリーブ	-	-	-	良好 1.8	肥前系

第63表 土器観音養(13)

順 番号	面	調査区名	遺跡名	内容	器種	調整		色調				粘土				焼成	備考	
						外面	内面	外面(軸上)	内面(列頭)	石英・ 長石	角閃石	雲母	重色粒	砂粒	口径			器高
311	1	S3	S3002	①	土師質 土師 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	7.5YR8/3 黄 黄	7.5YR7/3 に赤 い	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
312	1	S3	S3002	①	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR8/2 灰白 黄	10YR7/2 に赤い 黄	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
313	1	S3	S3002	②	陶器	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	N9/7 2 灰白	N7/ 灰白	-	-	(12.7)	4.3	3.9	良好	1.8	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
314	1	S3	S3002	①	陶器	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	N9/ 白	10YR5/4 細灰	-	-	-	-	(3.9)	良好	2.8	口縁部外 径 1.8 良好	2.8 良好
315	1	S3	S3002	①	青磁	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10Y7/1 灰白	5YR7/4 に赤い 黄	-	-	-	-	3.8	良好	7.8	口縁部外 径 1.8 良好	7.8 中国製
316	1	S3	S3002	②	磁器	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	5S/1 青黄	N8/ 灰白	-	-	-	-	3.9	良好	2.8	口縁部外 径 1.8 良好	2.8 良好
320	1	S3	S3004	②	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	2.5Y7/1 黄灰	2.5Y7/4 黄灰	-	-	(8.4)	1.4	(5.9)	良好	1.8	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
321	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	(9.4)	良好	1.8	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
322	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR7/2 に赤い 黄	10YR7/4 に赤い 黄	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
323	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR8/3 黄黄	10YR8/3 黄黄	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
324	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	7.5YR6/3 に赤 い	7.5YR6/3 に赤 い	-	-	中・少	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
325	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
326	1	S3	S3007	②	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	(12.8)	良好	1.8	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
327	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR8/1 灰白 黄	10YR8/3 に赤 い	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
328	1	S3	S3007	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
329	1	S3	S3041	-	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR4/1 細灰	10YR4/1 細灰	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
330	1	S3	S3041	-	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	(9.7)	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
331	1	S3	S3041	-	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR6/3 に赤い 黄	10YR6/3 に赤い 黄	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
332	1	S3	S3042	③	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR8/3 黄黄	10YR8/3 黄黄	-	-	(8.0)	1.0	(5.1)	良好	1.8	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
333	1	S3	S3042	①	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR7/3 に赤い 黄	10YR7/3 に赤い 黄	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
334	1	S3	S3042	①	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	7.5YR7/4 に赤い 黄	7.5YR7/4 に赤 い	-	-	中・少	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
335	1	S3	S3042	④	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR5/1 細灰	10YR5/1 細灰	-	-	-	-	-	-	-	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好
336	1	S3	S3042	④	土師質 土師 土師	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	口縁- 体部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部: 口縁部:	10YR5/3 に赤い 黄	10YR5/3 に赤い 黄	-	-	-	-	(7.4)	良好	1.8	口縁部外 径 1.8 良好	1.8 良好

第64表 土器観察表 (14)

順文番号	調査区名	遺物名	内容	種類	調整		色調		胎土				法量 (cm)	底成	備考	
					外面	内面	外面 (胎土)	内面 (胎土)	石英・長石	角閃石	雲母	黒色粒				砂粒
337	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	-	-	-	(17.2)	-	良好	1.8
338	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	7.5Y8/3 に赤い 肌	7.5Y8/3 に赤い 肌	-	-	-	中・少 (22.4)	-	良好	1.8
339	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	10Y8/3 淡黄	10Y8/3 淡黄	-	-	-	中・少 (22.6)	-	良好	1.8
340	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	-	-	-	(25.6)	-	良好	4.8
341	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: 指ササエ後 ナテ、 体部: ハケ目、 体部: 指ササエ後 ナテ	10Y88/3 淡黄	10Y88/3 淡黄	-	-	-	(28.7)	-	良好	2.8
342	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	10Y84/1 赭灰	10Y84/1 赭灰	-	-	-	中・少 (25.0)	-	良好	6.8
343	1	33	SD0042	①	土師質土器 足差	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	10Y87/3 に赤い 肌	10Y87/3 に赤い 肌	-	-	-	(現存 21.9)	-	良好	8.8
344	1	33	SD0042	④	土師質土器 脚座	ナテ	ナテ	10Y88/3 淡黄	10Y88/3 淡黄	-	-	-	(現存 21.9)	-	良好	8.8
345	1	33	SD0042	②	土師質土器 十地彫	ナテ、足差と指ササエ 分・指ササエ後ナテ	ナテ	7.5Y8/3 淡黄	7.5Y8/3 淡黄	-	-	-	中・少 (12.2)	-	良好	8.8
346	1	33	SD0042	④	土師質土器 抱手	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	10Y88/3 淡黄	10Y88/3 淡黄	-	-	-	中・少 (34.2)	-	良好	1.8
347	1	33	SD0042	④	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	10Y87/2 に赤い 肌	10Y87/2 に赤い 肌	-	-	-	-	-	良好	1.8
348	1	33	SD0042	①	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	10Y87/2 に赤い 肌	10Y87/2 に赤い 肌	-	-	-	中・多	-	良好	1.8
349	1	33 南風 原地区	SD0042	①	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	10Y85/1 赭灰	10Y85/1 赭灰	-	-	-	中・多 (28.4)	-	良好	1.8
350	1	33	SD0042	①	土師質土器 柄	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	10Y88/3 淡黄	10Y88/3 淡黄	-	-	-	中・少 (27.2)	-	良好	1.8
351	1	33	SD0042	④	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	10Y88/2 灰白	10Y88/2 灰白	-	-	-	中・少	-	良好	1.8
352	1	33	SD0042	④	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	2.5Y3/1 黄肌	2.5Y3/1 黄肌	-	-	-	中・多	(11.2)	良好	2.8
353	1	33	SD0042	①	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	10Y86/3 に赤い 肌	10Y86/3 に赤い 肌	-	-	-	中・少 (12.0)	-	良好	2.8
354	1	33	SD0042	①	土師質土器 柄	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	2.5Y7/3 淡黄	2.5Y7/3 淡黄	-	-	-	-	(10.7)	良好	3.8
355	1	33	SD0042	①	土師質土器 薬	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	10Y86/4 に赤い 肌	10Y86/4 に赤い 肌	-	-	-	中・少 (9.8)	-	良好	3.8
356	1	33	SD0042	②	土師質土器 薬	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	口縁部: ヨコナテ、 体部: 指ササエ後ナテ 体部: ハケ目	2.5Y8/3 に赤い 肌	2.5Y8/3 に赤い 肌	-	-	-	中・多 (21.0)	-	良好	1.8
357	1	33	SD0042	②	土師質土器 薬	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	口縁部: ナテ、 体部: 指ササエ後 ナテ	7.5Y8/3 淡黄	7.5Y8/3 淡黄	-	-	-	中・多	(6.0)	良好	2.8

第 65 表 土器観音堂 (15)

順次番号	面	調査区名	遺跡名	内容	種類	調整		色調		粘土				焼成	備考
						外面	内面	外面(粘土)	内面(列項)	片石・角四石	雲母	黒色粒	砂粒		
358	1	33	SD002	②	土師質土器	外面	体一底部: 同転ナデ	外面	5YR7/1 灰白	片石・角四石	-	-	-	1.8	-
359	1	33	SD002	①	須恵器鉢	外面	体一底部: 同転ナデ 口縁部: ナデ 体部: 灰緑、ナデ	内面	5YR7/1 灰白 10YR7/2 にぶい 黄緑	片石・角四石	-	-	-	1.8	(48)
360	1	33	SD002	④	須恵器薬	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ後、ハナ目、指ササエ ハナ目、指ササエ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
361	1	33	SD002	②	須恵器薬	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
362	1	33	SD002	①	須恵器薬	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
363	1	33	SD002	②	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
364	1	33	SD002	④	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
365	1	33	SD002	③、④	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
366	1	33	SD002	①、②	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
367	1	33	SD002	②	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
368	1	33	SD002	①、②	陶器滑縁皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
369	1	33	SD002	④	陶器滑縁皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
370	1	33	SD002	④	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
371	1	33	SD002	④	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
372	1	33	SD002	③	陶器椀	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
373	1	33	SD002	①	陶器皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
374	1	33	SD002	③	陶器椀	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
375	1	33	SD002	①	陶器鉢	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
376	1	33	SD002	③	陶器指鉢	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
377	1	33	SD002	③	陶器薬	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系
378	1	33	SD002	③、④	陶器大皿	外面	口縁部: ナデ、体部: 口縁部: ナデ ハナ目、指ササエ	内面	25Y7/4 黄灰	片石・角四石	-	-	-	1.8	十輪山窯系

第 68 表 土器観察表 (18)

編年 番号	調査区名	遺構名	内容	種類	調査		色調		胎土				法量 (cm)	底径	底成	残存 率	
					外面	内面	外面 (胎土)	内面 (胎土)	石英・ 長石	角閃石	雲母	黒色粒					砂粒
448	2	24	・ 遺跡面精査	弥生土器	差	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
449	2	24	・ 遺跡面精査	弥生土器	差	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
449	2	24	・ 遺跡面精査	弥生土器	差	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
450	2	24	・ 遺跡面精査	弥生土器	差	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
451	2	24	・ 遺跡面精査	弥生土器	差	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
453	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
454	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
455	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
456	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
457	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
458	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
459	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
460	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
461	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
462	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
463	1	34	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
469	2	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
470	2	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
471	1	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
472	1	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
473	1	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
474	1	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
475	1	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・
476	1	32	・ 遺跡面精査	土師器	足冑	外面：ハタリ	内面	外面：25Y7.4 黄灰	内面：黄灰	石英・長石	・	・	・	・	・	・	・

第 69 表 土器観音表 (19)

観音番号	面	調査区名	遺跡名	内容	種類	調整			色調			粘土			法量 (cm)	破砕	保存率	備考
						外面	内面	内面 (列頭)	外面 (粘土)	石灰・角閃石	雲母	重色粒	砂粒	口径				
477	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 靑	7.5YR7/6 靑	-	-	(13.3)	-	-	-	良好	1.8	-
478	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器 (SR300-北側)	杯	マメツ	マメツ	10YR7/3 に近い 10YR6/2 灰黄靑	10YR7/3 に近い 10YR6/2 灰黄靑	-	-	(13.0)	-	-	-	良好	2.8	-
479	1	32	SR300	上層 5号 遺跡面精査 土師質 土器	高杯	ヨコナデ、マメツ	キレツ、指オケ、マメツ	7.5YR6/6 靑	10YR8/2 灰白	-	-	(12.2)	-	-	良好	5.8	-	-
480	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器 (南側)	足差	ヨコナデ、指オケ	ヨコナデ、ハケ目	10YR8/3 灰黄靑	10YR8/3 灰黄靑	-	-	(29.0)	-	-	中心 軟	1.8	北側	-
481	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	足差	ヨコナデ、指オケ	ヨコナデ、ハケ目	10YR8/2 灰白	2.5YR3 淡黄	-	-	(40.2)	-	-	良好	1.8	-	-
482	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	風	ヨコナデ (マメツ) ヨコナデ (マメツ)	板ナデ (マメツ)	10YR8/2 灰白	2.5YR3 淡黄	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
483	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	椀鉢	ヨコナデ、指オケ	ヨコナデ、指オケ	7.5YR7/6 靑	7.5YR8/4 黄靑	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
484	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	椀鉢	ヨコナデ、指オケ	ヨコナデ、指オケ	7.5YR7/4 に近い い靑	7.5YR7/4 に近い い靑	-	-	(18.0)	-	-	良好	1.8	-	-
485	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	椀鉢	ヨコナデ、指オケ	ヨコナデ、指オケ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	(29.0)	-	-	良好	1.8	-	-
486	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	椀鉢	ヨコナデ、指オケ	ヨコナデ、指オケ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	(18.9)	-	-	良好	1.8	-	-
487	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	(11.3)	3.5	4.3	良好	1.8	肥前系	-
488	1	32	-	遺跡面精査 土師質 土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/2 灰黄靑	10YR7/3 に近い 靑	-	-	(11.6)	-	-	良好	1.8	肥前系	-
491	1	33	-	遺跡面精査 土師質 土器	湯鉢	口縁-体部: 黒靑	口縁-体部: 黒靑	10YR6/3 に近い 靑	10YR6/2 灰黄靑	-	-	(11.7)	3.5	(7.2)	良好	1.8	-	-
493	-	34	-	既述(前) 器口縁-体部: 黒靑	杯	口縁-底部: 回転ナデ	口縁-底部: 回転ナデ	10YR8/2 灰黄靑	10YR8/2 灰黄靑	-	-	(7.0)	良好	1.8	-	-	-	
495	1	35	-	トレンチ	杯	体部: 回転ナデ	体-底部: 回転ナデ	7.5YR8/3 黄靑	7.5YR8/3 黄靑	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
498	-	5	SP5008	南半分	杯	口縁-体部: 回転ナデ	口縁-体部: 回転ナデ	7.5YR7/4 に近い 靑	7.5YR6/1 靑灰	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
499	-	4	-	遺跡面精査 土師質 土器	杯	口縁-体部: 回転ナデ	口縁-体部: 回転ナデ	10YR7/6 明靑	10YR7/6 明靑	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
500	-	4	-	北半分	杯	口縁-体部: 回転ナデ	口縁-体部: 回転ナデ	10YR6/4 に近い 靑	10YR6/4 に近い 靑	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
501	-	4	-	北半分	杯	指ナデ	指ナデ	10YR7/2 に近い 靑	10YR7/2 に近い 靑	-	-	(残存 13.6)	-	-	良好	1.8	-	-
503	-	5	-	遺跡面精査 土師質 土器	杯身	口縁部: 回転ナデ	口縁部: 回転ナデ	5Y6/6 靑	5Y6/6 靑	-	-	-	-	-	不良	1.8	-	-
504	-	5	-	遺跡面精査 土師質 土器	杯	口縁-体部: マメツ	口縁-体部: マメツ	7.5YR7/3 に近い い靑	7.5YR8/3 黄靑	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
505	1	5	-	西半分 上層 (褐色粘土) 土師質 土器	杯	口縁-体部: 回転ナデ	口縁-体部: 回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-
506	-	5	-	西側器面	杯	底部: マメツ	底部: マメツ	7.5YR7/6 靑	7.5YR8/3 黄靑	-	-	-	-	-	良好	1.8	-	-

第70表 瓦観察表

編文 番号	面 調査区名	遺構名	内容	器種	調整		色調		胎土			法量 (cm)			焼成 残存率			
					凸面	凹面	凸面	凹面	白色 砂粒	黒色 砂粒	灰色 砂粒	全長	拱深幅 (残存幅)	広深幅 (残存幅)		厚さ		
108	1	SK3018	-	平瓦	平瓦、赤切り瓦	平瓦	2578/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	(10.5)	(10.3)	1.3	良好	破片		
109	1	SK3018	-	平瓦	瓦目	瓦目	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	(18.4)	(23.2)	-	2.2	良好	破片	
110	1	SK3018	-	平瓦	平瓦、タタキ目	平瓦	N5/ 灰	2577/1 灰白	-	-	-	(5.4)	(5.5)	-	2.2	良好	破片	
186	1	SD0014	下層	丸瓦	丸瓦、タタキ目、高目比瓦、表面割離	丸瓦、タタキ目、高目比瓦、表面割離	7.575/1 灰	7.575/1 灰	中・少	無	中・少	14.0	11.9	-	1.9	中・欠	破片	
187	1	SD0014	①下層	丸瓦	丸瓦、高目比瓦	丸瓦、高目比瓦	2.577/3 黄黄	10YR7/4 に近い黄	粗・多	無	中・少	15.5	11.8	-	1.9	中・欠	破片	
246	1	SD0028	②	軒平瓦	平瓦、板ナデ	平瓦、板ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	中・多	(5.3)	(9.5)	-	2.3	良好	破片	
247	1	SD0028	③	丸瓦	丸瓦、板ナデ	丸瓦、板ナデ	N5/ 灰	N6/ 灰	細・少	-	-	(16.0)	(7.3)	-	2.4	良好	破片	
248	1	SD0028	④下層	丸瓦	丸瓦、板ナデ	丸瓦、板ナデ	5Y7/1 灰白	N6/ 灰	中・多	中・多	-	(2.8)	-	-	8.0	1.8	良好	破片
299	1	SD0032	④下層	平瓦	平瓦、板ナデ	平瓦、板ナデ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	中・少	中・多	中・多	(10.7)	-	-	2.9	良好	破片	
300	1	SD0032	④下層	平瓦	平瓦、板ナデ	平瓦、板ナデ	N7/ 灰	N6/ 灰	中・少	中・多	中・多	(8.0)	(13.1)	-	3	良好	破片	
301	1	SD0032	④下層	平瓦	平瓦、板ナデ、板ナデ目 (マメツ)	平瓦、板ナデ、板ナデ目 (マメツ)	N5/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	中・多	-	-	(11.3)	(7.4)	-	2.6	良好	破片	
302	1	SD0032	④下層	平瓦	平瓦、タタキ目	平瓦、タタキ目	N6/ 灰	N6/ 灰	中・少	中・少	中・少	15.8	8.0	-	2.7	良好	破片	
383	1	SD0042	④	丸瓦	丸瓦、ナデ	丸瓦、ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	(12.0)	(6.8)	-	1.6	良好	破片	
384	1	SD0042	④	平瓦	平瓦、板ナデ、タタキ	平瓦、板ナデ、タタキ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	(6.0)	(7.5)	-	2	良好	破片	
385	1	SD0042	①	平瓦	平瓦、板ナデ、赤切り瓦	平瓦、板ナデ、赤切り瓦	N6/ 灰	N6/ 灰	-	中・多	-	(5.8)	(9.6)	-	2.1	良好	破片	
386	1	SD0042	①	平瓦	平瓦、板ナデ	平瓦、板ナデ	N3/ 灰	N4/ 灰	中・少	中・少	中・少	(14.2)	-	(7.6)	1.8	良好	破片	
403	1	SD0043	②	丸瓦	丸瓦、板ナデ	丸瓦、板ナデ	2.577/1 灰白	2.577/1 灰白	細・少	中・少	中・少	(9.5)	(8.8)	-	1.6	良好	破片	
414	1	SK3003	c-2 層	平瓦	平瓦、瓦目	平瓦、瓦目	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	-	-	中・少	(7.5)	(16.2)	-	2.7	良好	破片	
465	-	3-1	-	平瓦	平瓦、板ナデ、高目比瓦	平瓦、板ナデ、高目比瓦	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	細・多	-	-	(8.9)	-	(7.5)	2.5	良好	破片	
466	1	3-1 北側 配線部	-	平瓦	平瓦、高目比瓦、遺構面調査	平瓦、高目比瓦、遺構面調査	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰白	細・少	中・多	中・多	(13.2)	-	(14.5)	2.3	良好	破片	
496	-	3-5	-	平瓦	平瓦、高目比瓦、遺構面調査	平瓦、高目比瓦、遺構面調査	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	(10.4)	(9.5)	-	2.1	良好	破片	

第71表 土鍾観察表

観文番号	面	道標名	内容	認識	調整		色調		胎土				法量			焼成	残存率				
					外面	内面	外面	内面	石英・長石	角閃石	雲母	黒色炭	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)			底径 (cm)	その他 (cm)	重量	
447	2-1	-	西側傾溝	管状土鍾	ナデ	-	10YR8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	(長さ) 3.4	(幅) 1.15	(厚さ) 1.0	(孔径) 0.3	353 g	良好	破片

第72表 用途不明土製品観察表

観文番号	面	調査区名	道標名	遺構名	種類	認識	調整		色調		胎土				法量 (cm)			焼成	残存率	備考	
							外面	内面	外面	内面	石英・長石	角閃石	雲母	黒色炭	砂粒	口径 (長さ)	器高 (幅)				底径 (厚さ)
68	1	1-2	SG001	-	土師質土器	用途不明	ナデ	-	10YR5/4にぶい黄褐色	-	中・並	細・少	-	-	(長さ) 3.3	(幅) 2.5	(厚さ) 1.5	1.2	良好	1/8	輸入品?
112	1	3-1	SK3019	-	須器	不明	同観へナデ	-	N7/灰白	-	-	-	中・少	-	(長さ) 3.8	(幅) 3.9	(厚さ) 0.9	-	良好	8/8	印盤状に加工
248	1	3-1	SD0028	②	土師質土器	用途不明	-	2.5Y7/1灰白	7.5YR7/3にぶい橙	-	-	-	中・多	-	(長さ) 5.3	(幅) 4.7	(最大径) 4.0	-	良好	-	焼土?
303	1	3-1	SD0032	②下層	須器	不明	ナデ	ナデ	7.5YR8/1灰白	-	-	-	-	-	(長さ) 2.7	(幅) 3.05	(厚さ) 0.45	-	良好	-	円盤状土製品?

第73表 石器観察表

観文番号	面	調査区名	遺構名	内容	器種	法量				材質	残存率	備考
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
90	1	3-1	SK3009	-	砥石	4.7	1.55	1.55	12.14	流紋岩	-	2面使用
111	1	3-1	SK3018	-	火打石	7.91	5.12	4.54	189.16	石英	-	-
144	1	3-2南側 拡張部	SD3007	-	剥片	-	-	-	-	サヌカイト	-	-
146	1	3-2	SD3007	①	叩き石	7.05	10.30	7.43	718.72	安山岩	一部折損	-
165	1	3-2	SD3014	①上層	砥石	5.95	4.23	3.21	179.86	安山岩	破損	-
210	1	3-2	SD3013	-	叩き石	18.0	7.11	5.45	948.75	砂岩	破損	-
211	1	3-2	SD3013	①	砥石	8.77	7.94	3.67	298.84	砂岩	破損	被熱
216	1	3-2東側 拡張部	SD3025	-	火打石	3.58	5.58	1.91	31.13	サヌカイト	-	-
249	1	3-1	SD3028	②	火打石	7.8	6.6	5.3	282.98	石英	-	-
252	1	3-1北側 拡張部(南)	SD3029	-	砥石	5.74	6.27	1.03	50.59	安山岩	破損	2面使用
304	1	3-1	SD3032	②下層	砥石	16.2	10.1	7.4	1525.12	砂岩	-	2面使用
305	1	3-1	SD3032	②下層	砥石	8.36	3.33	2.58	106.68	流紋岩	上下端折損	4面使用
306	1	3-1	SD3032	①下層	砥石	10.8	4.9	4.0	345.33	流紋岩	-	4面使用
307	1	3-1	SD3032	①下層	砥石	8.1	5.8	3.9	287.78	安山岩	-	-
308	1	3-1	SD3032	②下層	五輪塔 (火輪)	(高さ) 14.6	23.2	(軒厚) 4.8	7880	角礫凝灰岩 (天霽)	-	-
310	1	3-1	SD3032	①上層	砥石	5.1	3.5	2.5	57.87	流紋岩	-	2面使用
317	1	3-1	SD3032	②	石包丁	4.7	8.7	10.1	539.1	サヌカイト	-	-
318	1	3-1	SD3032	②	剥片	5	4.8	1.1	37.05	サヌカイト	-	-
319	1	3-1	SD3032	①	砥石	12.88	4.88	3.93	352.46	流紋岩	下端折損	4面使用
387	1	3-3	SD3042	②	砥石	4.07	3.53	1.36	33.82	流紋岩	上下端折損	4面使用
388	1	3-3	SD3042	②	火打石	1.76	1.17	0.56	1.22	赤色チャート	-	-
389	1	3-3	SD3042	④	火打石	5.27	2.21	1.83	20.21	サヌカイト	-	-
390	1	3-3	SD3042	④	火打石	3.59	4.08	1.93	25.30	サヌカイト	-	-
391	1	3-3	SD3042	④	火打石	6.72	5.76	2.23	109.19	サヌカイト	-	-
392	1	3-3	SD3042	②	火打石	8.59	7.61	6.58	419.70	サヌカイト	一部折損	-
393	1	3-3	SD3042	②	火打石	7.53	6.64	2.62	197.03	サヌカイト	-	使用痕迹しい
394	1	3-3	SD3042	③	火打石	1.22	10.5	4.5	617.29	サヌカイト	-	一部打突痕あり
395	1	3-3	SD3042	④	五輪塔 (地輪)	(高さ) 14.0	20.8	(奥行) 20.5	9180	角礫凝灰岩 (天霽)	-	-
396	1	3-3	SD3042	④	五輪塔 (空輪)	(高さ) 15.4	22.6	-	8000	角礫凝灰岩 (天霽)	-	-
397	1	3-3	SD3042	④	五輪塔 (火輪)	(高さ) 12.3	24.6	(軒厚) 5.0	8220	角礫凝灰岩 (天霽)	-	-
398	1	3-3	SD3042	④	石臼	23.0	14.5	9.4	3720	角礫凝灰岩 (天霽)	-	-
399	1	3-3	SD3042	③	石臼	(11.6)	(9.8)	6.3	658.72	角礫凝灰岩 (天霽)	不明	縁が付着
452	2		排土	-	火打石	10.1	6.1	2.6	192.8	サヌカイト	-	-
489	1	3-2	2南橋成土	トレンチ	石鏃	2.55	1.6	0.3	0.97	サヌカイト	-	-
490	1	3-2南側 拡張部	出土位置 不明	-	火打石	6.66	5.08	3.12	73.26	サヌカイト	-	-
492	2	3-3	遺構面積査	-	火打石	17.3	9.2	5.8	729.32	サヌカイト	-	-
494	1	3-4	遺構面積査	-	石鏃か	5.4	1.9	0.7	4.95	サヌカイト	半分欠損	-
497		3	排土	-	不明	13.9	9	4.1	486.22	安山岩	-	-
502	1	4	包含層	-	石鏃	7.1	4.2	0.8	24.77	サヌカイト	-	-
507	1	5	包含層	-	石鏃	3.5	2.6	0.3	2.03	サヌカイト	-	-

第74表 金属器観察表

観文番号	面	調査区名	遺構名	内容	器種	法量				材質	備考
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
75	1	3-1	SE3104- SP3356	-	和釘	54	13	15	18.0	鉄	-
145	1	3-2	SD0007	-	握り鉄	82	13	07	8.57	鉄	-
214	1	3-2	SD0016	-	鑄造鉄器片	26	31	12	-	鉄	-
250	1	3-1	SD0028	②	椀型鍛冶滓	24	30	18	-	鉄	-
251	1	3-1	SD0028	②	椀型鍛冶滓	38	35	25	23.88	鉄	-
400	1	3-3	SD0042	④	ガラス質滓	61	82	31	82.89	鉄	-
431	1	3-2	SP3143	-	毛抜き	91	43	14	37.99	鉄	-
464	1	3-1	-	上面積査	釘	5.0	2.3	1.1	12.5	鉄	-
467	-	3-1 北側拡張部	-	表土掘削	不明	6.3	2.5	1.0	9.6	鉄	-
468	-	3-1 北側拡張部	-	表土掘削	釘	6.0	2.1	1.2	15.0	鉄	3本の釘が錆化し壊れ 合る

第75表 木器観察表

観文番号	面	調査区名	遺構名	内容	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	木取
55	1	3-1	SR3001	砂層(最下層)あぜより 東側・木	-	13.9	5.2	3.0	-	板目
56	1	3-1	SR3001	砂層(最下層)木(加工品)	-	20.7	3.9	1.4	-	板目
57	1	3-2	SR3001	-	-	42.5	2.5	1.9	-	板目
147	1	3-1 南側拡張部	SD0007	-	木枕	50.7	4.4	5.9	-	芯持ち
401	1	3-1 南側拡張部	SD0042	-	板材	15.6	4.7	0.9	-	板目

第76表 掘立柱建物・構成一覧表(1)

区	遺構名	掘立柱×梁間 (間)	桁行(m)	桁行柱間 (m)	梁間(m)	壁間柱間 (m)	方位	面積(m ²)	構成ビネット	掘立柱物	備考
1-1	SR1002	2 × 1	3.02 ~	1.95 ~ 2.16	3.90	3.90	N62.19° E	15.29	(骨) SF1016, SF2018, SF2017, SF2008, S1017, SF1011 (土) SF2011, SF2010, SF2007, SF1004	69	3 面柱
2-1	SR3001	3 × 1	6.86	2.15 ~ 2.26	4.48	4.48	N70.97° W	30.73	SF2010, SF2014, SF2016, SF2018, SF2031, SF2032, SF2033	70, 71	-
2-3	SA3001	2	5.10	2.55	-	-	N65.0° E	-	SF2034, SF2036, SF2037	-	-
3-1	SR3001	2 × 1 ~	5.73	1.72 ~ 2.09 程度	2.25	2.25	N 34.87° W	12.89 ~	SF2037, SF2039, SF2053, SF2065	-	-
3-1	SR3002	3 × 1 ~	6.34	2.05 ~ 2.13	3.76	3.76	N 34.31° W	23.84 ~	SF2025, SF2040, SF2044, SF2067, SF2073	72	-
3-1	SR3003	3 × 1	7.14	1.81 ~ 3.26	4.79	4.79	N 31.75° W	23.78	(骨) SF2068, SF1515, SF2068, SF2542 (土) SF2043, SF2011 (骨) SF2037, SF2031, SF2543 (土) SF2038, SF2039, SF2041	-	-
3-1	SR3004	3 × 3	7.25	2.05 ~ 2.92	3.55	3.55	E30.43° N	25.74	(骨) SF2048, SF3562 (土) SF3562, SF3422, SF3401 (骨) SF3572, SF3581, SF3581 (土) SF3572, SF3581, SF3581	73, 74, 75	-
3-1	SR3005	3 × 2	7.29	2.18 ~ 2.55	2.85	1.17 ~ 1.47	E27.46° N	21.5	(骨) SF3583, SF2086, SF2410 (土) SF3583, SF2086, SF2410 (骨) SF3410, SF2416, SF2425, SF3374 (土) SF3374, SF3373	-	-
3-2	SR3001	3 × 1 ~	4.5	2.16 ~ 2.27	2.02 ~	2.02 ~	N63.56° E	15.23 ~	(骨) SF3131, SF2178, SF2190	-	-
3-2	SR3002	1 × 1 ~	2.27 ~	2.27 ~	2.22 ~	2.22 ~	N61.04° E	6.25 ~	(骨) SF3132, SF3128	-	-
3-2	SR3003	3 × 2	5.80 ~	2.56 ~ 3.24	3.60	1.80	N60.76° E	27.21 ~	(骨) SF3147, SF3167, SF3072 (土) SF3072, SF2014, SF2017 (骨) SF3017, SF2138, SF2181 (土) SF2181, SF2140, SF2147	-	-
3-2	SR3004	1 × 2	2.26 ~	2.26 ~	4.20	1.94 ~ 2.25	N70.49° E	12.60 ~	(骨) SF3142, SF2168 (土) SF3142, SF2168, SF2134	76	-
3-2	SR3005	1 × 2	2.13 ~	2.13 ~	4.54	2.24 ~ 2.32	N63.27° E	12.56 ~	(骨) SF3157, SF3140, SF3182	-	-
3-2	SA3201	2 ~	3.72 ~	1.69 ~ 2.03	-	-	N63.68° E	-	(骨) SF3169, SF2149, SF2074	-	-
3-2	SA3202	2 ~	3.38 ~	1.59 ~ 1.79	-	-	N65.76° E	-	(骨) SF3185, SF2168, SF2150	-	-
3-2	SA3203	4	7.76	1.79 ~ 2.01	-	-	N28.22° W	-	(骨) SF3169, SF3187, SF2189, SF2121	-	-
3-2	SA3204	4	6.83	1.51 ~ 1.86	-	-	N28.97° W	-	(骨) SF3188, SF2196, SF2191, SF2103, SF2063	-	-
3-2	SA3205	3	5.83	1.47 ~ 1.98	-	-	N29.94° W	-	(骨) SF2025, SF2051, SF2040, SF2038	-	-
3-2	SA3206	3	4.95	1.47 ~ 1.98	-	-	N30.01° W	-	(骨) SF2062, SF2027, SF2024, SF2050	-	-
3-2	SA3207	4	6.34	1.66	-	-	N30.94° W	-	(骨) SF2035, SF2046, SF2037, SF2030, SF2055	77	-
3-3	SR300-a	3 × 1 ~	4.19	-	-	-	N31.41° W	7.95 ~	(骨) SF2602, SF2604, SF2601, SF2615	-	-
3-3	SR300-b	3 × 1 ~	3.90	-	-	-	N31.41° W	6.98 ~	(柱で修さず、骨) SF2603, SF2612, SF2614	-	-

第77表 掘立柱建物・構列一覧表(2)

区	遺構名	桁行×梁間 (間)	桁行 (m)	桁行柱間 (m)	梁間 (m)	礎頭柱間 (m)	方位	面積 (㎡)	備註 掘立柱	掲載遺物	備考
3-4	SE3401	4 × 1	7.719	1.31 ~ 2.42	2.6	2.6	N28.38° W	20.01 ~	(w → e) SF2691, SF2694, SF2678, SF2666, SF2752 (n → s) SF2752, SF2627 (e → w) SF2627, SF2634	-	-
3-4	SE3402	3 × 1	4.64	1.25 ~ 1.87	2.94	2.94	N 31.14° W	13.64	(w → e) SF2641, SF2668 (n → s) SF2641, SF2668 (e → w) SF2621, SF2619 (s → n) SF2619, SF2642, SF2641	-	-
3-4	SA3403	2	3.73	1.84 ~ 1.87	-	1.83 1.9	N 27.86° W	-	(n → s) SF2711, SF2620, SF2712	-	-

写真図版



令和元年度 現地説明会終了後



1-2 区全景 北から



1-3 区全景 南から



1-3 区 (3面) 完掘状況 南から



2-1 区全景 南から



2-1 区 SD1005・SD1006 周辺 南から



2-2 北区遺構検出状況 北から



2-3 区全景 南から



2-4 区全景 南から



3-1 区全景 北から

図版 3 沖遺跡 (2024 年)



3-1 区全景 南から



3-1 区 (3面) 全景 南から



3-1 区南拡張部・3-2 区北拡張部全景 東から



3-2 区全景 南西から

図版 4 沖遺跡 (2024 年)



3-3区全景
南から



3-3区全景 北から



3-4区全景 西から



3-4区全景 南東から



1-1 区東壁 南西から



1-1 区東壁 (SD1005 部分) 南西から



1-2 区東壁 南西から



1-2 区東壁 南西から



1-3 区東壁 (SD3019 部分) 北西から



1-3 区北壁 南から



2-1 区西壁 (北半) 北東から



2-1 区西壁 (南半) 北東から



2-1 区北壁 南から



2-2 北区 西壁 北東から



2-2 北区 西壁南端 (SD3039
・SD1008 部分) 東から



2-2 北区 南壁 (SD3039 部分)
北から

図版 7 沖遺跡 (2024 年)



2-2 南区 西壁 南東から



2-3 区北壁 南西から



2-3 区東壁 南西から



3-1 区北壁 (SD3039 部分) 南から



3-1 区西壁 (SR3001 部分) 北東から



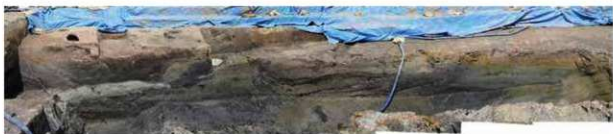
3-1 区北壁 南から



3-1 区東壁 北西から

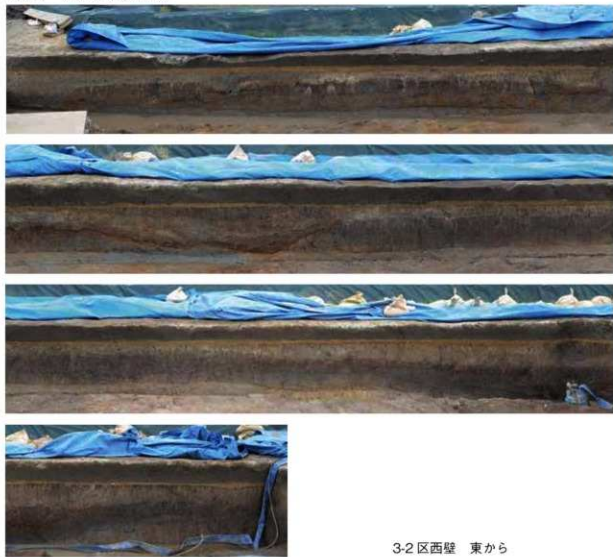


3-2 区東壁 西から



3-2 区下層確認 西から

図版 9 沖遺跡 (2024 年)



3-2 区西壁 東から



3-3 区東壁 西から



3-4 区東壁 西から



3-3 区西壁 SK3030 断面 東から



1-3 区東壁 SD3022 断面 西から



2-1 区2面 SD2001b-b' 断面 東から



2-3 区3面 SD3054e-e' 断面 西から



3-2 区 SR3004 遺物出土状況
東から

3-2 区 SR3004 断面 北西から



1-1 区東壁 SD1005 断面 西から



2-1 区 SD1005 東から

図版 11 沖遺跡 (2024年)



1-1区 SD1005 (25) 土器出土状況 北西から



1-1区 SD1005 土器 (21・24)
出土状況 北から



1-1区 SD1005 土器 (24)
出土状況 西から



1-1区 SD1005 土器 (25) 出土状況 東から



1-1区 SD1005 土器 (25)
出土状況 上から



1-1区 SD1006 完掘状況 東から



1-1区西壁 (SD1006部分) 断面 東から



1-1区 SD1006b-b' 断面
西から



3-1区 SD1006e-e' 断面
東から



1-1区 SD1006 土器 (29)
出土状況 西から



1-1 区 SD1007・SD1008 付近 西から



2-2 区 SD1008c-c' 断面
北東から



2-3 区 SD2003a-a' 断面
北東から



1-3 区東壁 SD3019 断面 西から



3-2 区 SD3020 土器
(44・45) 出土状況 南から



3-2 区 SD3020 完掘状況 北西から



3-2 区 SD3020a-a' 断面 東から



3-2 区 SD3021 断面 東から



1-2 区 SD3039 完掘状況
南西から

図版 13 沖遺跡 (2024 年)



1-2 区 SD3039
b-b' 断面 南東から



3-1 区 SD3040 完掘状況 南西から



3-1 区 SD3040b-b' 断面 東から



1-2 区 SD3040d-d' 断面
南東から



3-3 区 SD3049 断面
北から



3-3 区 SD3049 完掘状況
南から



3-1 区 SR3001・SR3002 完掘状況 西から



3-1 区 SR3001・SR3002 完掘状況 東から



3-1 区西壁 SR3001 断面 東から



3-1 区 SR3001 断面 東から



3-2区 SR3001 検出状況 東から



3-2区 SR3001 完掘状況 北から



3-1区 SR3001 獣骨
出土状況 東から



3-2区 SR3001b-b' 断面 東から



3-2区 SR3001 遺物出土状況 西から



1-1区 SB1002-SP1004 断面
東から



1-1区 SB1002-SP1011 断面
南から



1-1区 SB1002-SP2018 断面
西から



2-1区 SB1002-SP2010 断面
西から



1-1区 SB1002-SP2008 断面
西から

3期
SB・SA
SB1002

図版 15 沖遺跡 (2024 年)

SB2001
SA2001



2-3 区 SB2001・SA2001 完掘状況 南から



3-1 区 SB3101-SP3239 断面
南から

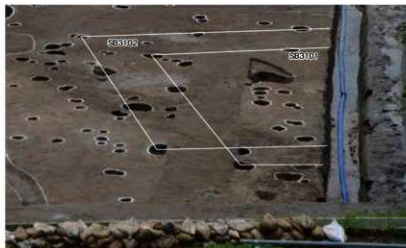


3-1 区 SB3101-SP3263 断面
南から



3-1 区 SB3101-SP3265 断面
北から

SB3101
SB3102



3-1 区 SB3101・SB3102 完掘状況 北から



3-1 区 SB3102-SP3240 断面
西から



3-1 区 SB3102-SP3273 断面
南から



3-1 区 SB3102-SP3244 断面
東から

SB3103



3-1 区 SB3103 完掘状況 北から



3-1 区 SB3103-SP3295 断面
北から



3-1 区 SB3103-SP3298 断面
西から



3-1 区 SB3103-SP3317 断面
東から



3-1 区 SB3103-SP3331 断面
西から



3-1 区 SB3104・SB3105 完掘状況 南から



3-1 区 SB3104-SP3348 断面
東から



3-1 区 SB3104-SP3372 断面
西から



3-1 区 SB3104-SP3401 断面
西から



3-1 区 SB3104-SP3401
遺物出土状況 西から



3-1 区 SB3105-SP3368 断面
東から



3-1 区 SB3105-SP3374 断面
西から



3-1 区 SB3105-SP3416 断面
南から



3-2 区 SB3201～SB3205・SA3201～SA3207 南西から

SB3104
SB3105

図版 17 沖遺跡 (2024年)

SB3301
ab



3-3区 SB3301a・b 完掘状況 北から



3-3区 SB3301-SP3604 断面
東から



3-3区 SB3301-SP3612 断面
北から



3-3区 SB3301-SP3614 断面
東から



3-3区 SB3301-SP3603 断面
東から

SB3401



3-4区 SB3401 完掘状況 南東から



3-4区 SB3401-SP3627 断面
東から



3-4区 SB3401-SP3678 断面
西から



3-4区 SB3401-SP3694 断面
南から

SB3402



3-4区 SB3402 完掘状況 南東から



3-4区 SB3402-SP3619 断面
東から



3-4 区 SB3402-SP3625 断面
西から



3-4 区 SB3402-SP3642 断面
西から



3-4 区 SA3403-SP3620 断面
西から



3-4 区 SA3403-SP3711 断面
西から



3-4 区 SA3403-SP3712 断面
西から

SA3403



3-2 区 SK3001 断面 南から



3-2 区 SK3002 断面 東から



3-1 区 SK3006 断面 南から

SK



3-1 区 SK3009 断面 南から



3-1 区 SK3010 断面 南から



3-1 区 SK3012 石検出状況
東から



3-1 区 SK3013 断面 北から



3-1 区 SK3014 断面 南から



3-1 区 SK3015 断面 東から



3-1 区 SK3011 断面 南から



3-1 区 SK3011 完掘状況 西から



3-1 区 SK3018 断面 西から

図版 19 沖遺跡 (2024 年)



3-1 区 SK3018 遺物出土状況
西から



3-1 区 SK3019 断面 東から



3-1 区 SK3023 遺物出土状況
南西から



3-3 区 SK3024 断面 西から



3-3 区 SK3025 断面 北から



3-3 区 SK3025 断面 東から



3-3 区 SK3025 遺物出土状況
東から



3-3 区 SK3027 断面 南から



3-3 区 SK3027 断面 東から



3-3 区 SK3027 遺物出土状況
東から



3-3 区西壁 SK3027 断面
東から



3-4 区 SK3029 断面 南から

SX



3-2 区 SX3001a-a' 断面 南から



3-2 区 SX3003a-a' 断面 西から

SD



2-1 区 SD1001・SD1002 完掘状況 東から



1-1 区西壁 SD1001・SD1002
断面 東から



1-1 区 SD1001・SD1002
b-b' 断面 西から



3-3 区西壁 SD1001 断面
東から



1-1 区西壁 SD1007 断面
西から



3-2 区 SD3001a-a' 断面
南から



3-2 区 SD3001d-d' 断面
南から



3-2 区 SD3005b-b' 断面
南から



3-2 区 SD3005d-d' 断面
南から



3-1 区 SD3005a-a' 断面
西から



3-2 区 SD3007b-b' 断面
北から



3-2 区 SD3007c-c' 断面
東から



3-2 区 SD3007 動物遺存体・鉄
製品 (145) 出土状況 南西から



3-2 区 SD3007 完掘状況 南から

図版 21 沖遺跡 (2024 年)



3-2 区 SD3007 完掘状況 東から



3-2 区 SD3007 完掘状況 西から



3-2 区 SD3013・SD3014 完掘状況 西から



3-2 区 SD3010b-b' 断面 西から



3-2 区 SD3013b-b' 断面 西から



3-2 区 SD3013・SD3014 断面
東から



3-2 区 SD3013・SD3014c-c'
断面 東から



3-2 区 SD3013・SD3014d-d'
断面 東から



3-2 区 SD3014 東壁断面 西から



1-3 区 SD3014a-a' 断面
東から



1-3 区南拡張 SD3014
西壁断面 東から



3-2 区 SD3023 完掘状況 西から



3-2 区 SD3025・SD3026
完掘状況 南から



3-2 区 SD3025・SD3026b'



3-2 区 SD3027c-c' 断面 南から
断面 南から



3-1 区 SD3028d-d' 断面 南から



3-1 区 SD3028・SD3029
a-a' 断面 北から



3-1 区 SD3029b-b' 断面 北から



3-1 区 SD3028 遺物出土状況 北から



3-1 区 SD3028 遺物出土状況 西から

図版 23 沖遺跡 (2024 年)



3-1 区 SD3030a-a' 断面 東から



3-1 区 SD3032 西壁断面 東から



3-1 区 SD3032a-a' 断面 東から



3-1 区 SD3032 土器 (272)
出土状況 南から



3-1 区 SD3032 土器
(274・313) 出土状況 西から



3-1 区 SD3032 五輪塔 (308)
出土状況 西から



3-1 区 SD3037a-a' 断面 東から



3-1 区 SD3041a-a' 断面 南から



3-3 区 SD3042 遺物出土状況 南から



3-3 区 SD3042b-b' 断面 北から



3-3 区 SD3042c-c' 断面 北から



3-3 区 SD3042a-a' 断面 北から



3-3 区 SD3042 ①土器 (368)
出土状況 西から



3-3 区 SD3042 ①遺物
出土状況 東から



3-3 区 SD3042 ③遺物
出土状況 北から



3-3 区 SD3042 ③木器 (401)
出土状況 東から



3-3 区 SD3042 ③木器 (401)
出土状況 北から



3-3 区 SD3042 ④遺物
出土状況 北から



3-3 区 SD3042・SD3043 南から



3-4 区 SD3044b-b' 断面 北から



3-3 区 SD3045b-b' 断面 北から



3-3 区北壁 SD3050 断面 南西から



3-3 区 SD3047b-b' 断面 北から



3-3 区 SD3050b-b' 断面 北から



3-4 区 SD3051 断面 東から



3-4 区 SD3052 断面 南から

SP



3-1 区 SP3261 断面 南から



3-1 区 SP3299 断面 南から



3-1 区 SP3319 断面 西から



3-1 区 SP3304 断面 北から



3-1 区 SP3323 断面 西から



3-1 区 SP3354 断面 西から



3-1 区 SP3422 断面 東から



3-1 区 SP3432 断面 北東から



3-1 区 SP3442 断面 東から



3-2 区 SP3083・SP3084 断面
南西から



3-4 区 SP3633 断面 南から



3-4 区 SP3690 断面 北から



4 区 遺構検出状況 南から



5 区 遺構検出状況 南から



4区 東半部西壁 東から



5区 南壁 (SK5013部分) 北から



4区 SD4012 断面 南から



4区 SD4018・SD4019 完掘状況 南から



4区 SD4018・SD4019c-c' 断面 南から



4区 南壁 (SD4018・SD4019部分) 北から



4区 西壁 (SD4018・SD4019部分) 東から



5区 SA5001-SP5005 断面 東から

図版 27 沖遺跡 (2024 年)





図版 29 沖遺跡 (2024 年)



図版 30 沖遺跡 (2024 年)



図版 31 沖遺跡 (2024 年)



図版 32 沖遺跡 (2024 年)



図版 33 沖遺跡 (2024 年)





図版 35 沖遺跡 (2024 年)





492



490



489



497



494

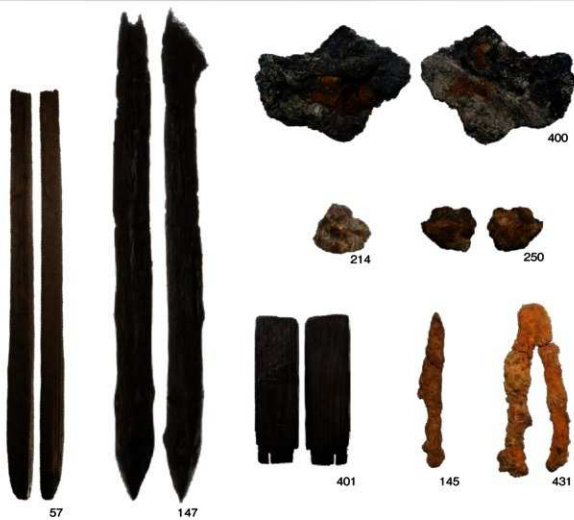


502



507

図版 37 沖遺跡 (2024 年)



報告書抄録

ふりがな	おきいせき							
書名	沖遺跡							
副書名	国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第9冊							
編著者名	蔵本晋司、益崎卓己、溝上千穂、山元素子、佐藤竜馬、富岡直人（岡山理科大学生物地球学部教授）、森将志・AMS年代測定グループ・藤根久・米田恭子・竹原弘展（パレオ・ラボ）、（株）吉田生物研究所、鈴木瑞穂（日鉄テクノロジー株式会社九州事業所）、株式会社イビソク							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4 Tel 0877-48-2191 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	2024年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいせき 沖遺跡	香川県丸亀市飯山町上法軍寺	37202		34° 14' 54"	133° 51' 21"	2018.9・10 2019.4～9 2022.4～6	2.785㎡	国道438号線道路改築事業（飯山工区）
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	集落跡	弥生時代後期以前 古墳時代 古代 中世 近世	掘立柱建物・欄列・土坑・溝・柱穴		土器・石器・鉄製品・木製品・獣骨			
要約	<p>沖遺跡は、丸亀平野南東部の大東川中流域に所在する古墳時代から近世にかけての集落遺跡である。</p> <p>本遺跡では、主に弥生時代後期から古墳時代にかけての自然河川および溝、中世前半期の溝群、中世後半から近世前半期にかけての掘立柱建物等を検出した。このうち中世前期の溝群は周辺の現在の地割から推定できる推定条里坪界線に近接・並行しており、周辺地域に認められる条里型地割の原型が、12世紀後半以前に形成されたことが明らかになった。また、中世後期に出現する掘立柱建物群とそれに伴う区画施設の存在から、中世後半から近世にかけて、遺跡周辺の低地部が集落居住域として開発・利用されたことが判明した。</p>							

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第 9 冊

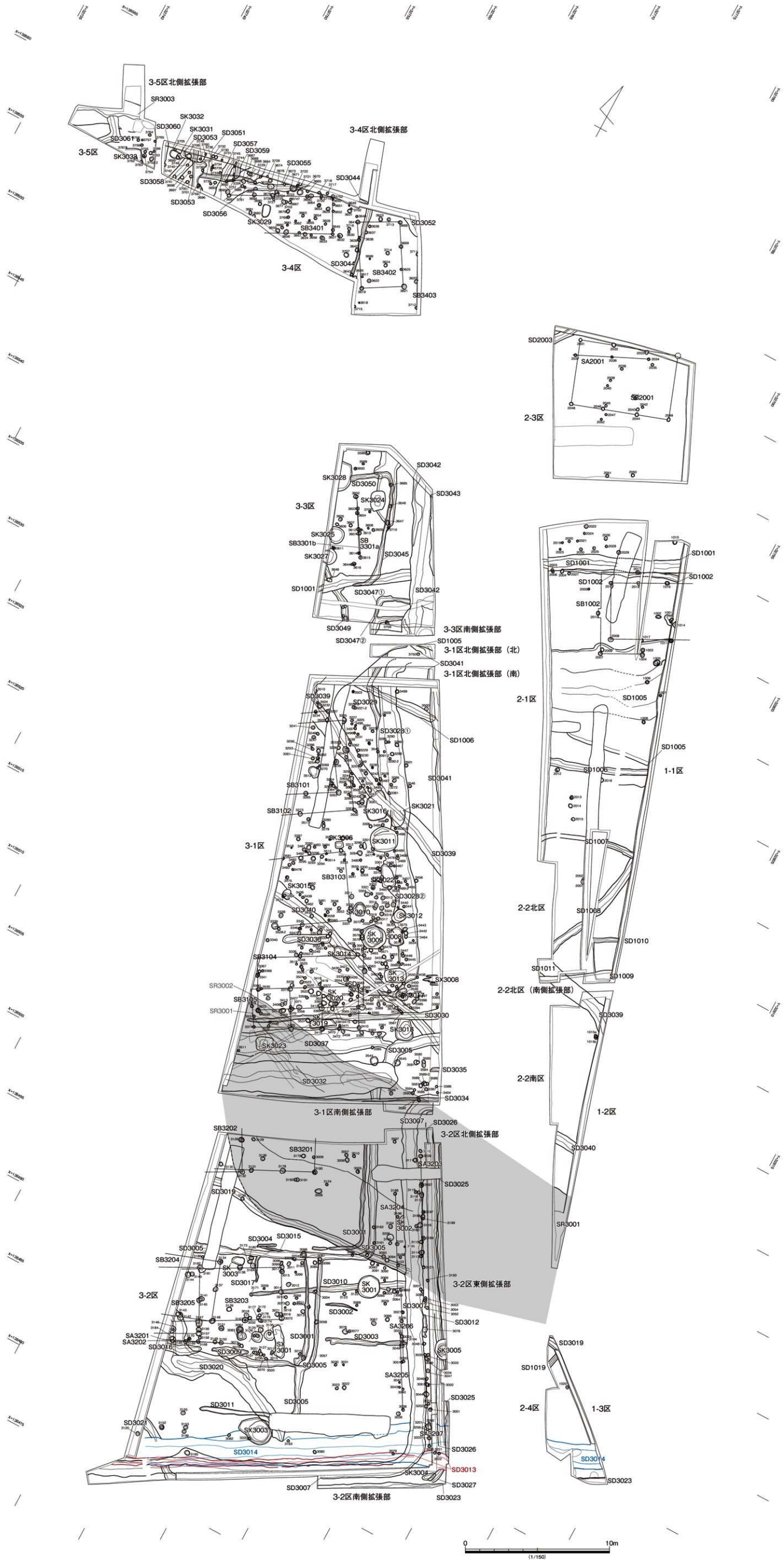
沖遺跡

2024 年 2 月 28 日

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会

印刷 ナカハタ印刷株式会社



付図 沖遺跡 1～3区古墳時代～近世遺構(1面検出遺構)平面図